

自然弁証法の研究の發展史

加藤 正

問題の發展を歴史的に追求することがいかに無目的にハンサに終るかの証明。

しかし練習場としては、歴史を何度も繰り返えしたどつて見ることは非常によいことだ。

この原稿はそのことの証明にもなる。

自然弁証法の十二年

一

われわれの間における自然弁証法的研究を回顧するに當つて一つの道標となるものは、大正十五年八月以降福本和夫の個人雑誌『マルキシズムの旗の下に』に訳載されたデボーリンの論文『唯物論的弁証法と自然科学』であろう。これによつて、われわれは始めてエンゲルスに『自然弁証法』なる遺稿があることを知つた。その前年モスコウにてリヤザノブの手でその遺稿が刊行されたのを機会に、右の論文が露誌『戦闘的マルクス主義』に發表され、次いで翌一九二六年一月発行ドイツ語版『マルクス主義の旗の下に』第三冊に轉載され、それが福本氏に訳述せられたのであるが、更に翌昭和二年には二種の邦訳本があらわれている。

この論文は、われわれを意識的に自然科学とマルクス主義の問題に立ち向わせる点において意義があつたばかり

ではない。他方において、例の有名な区分法（デボリーンが提起した）（一般的方法論または合則的相互関係の学としての唯物弁証法、自然科学における方法としての自然弁証法、社会科学における方法としての歴史弁証法または史的唯物論）により理論的体系としての見地からマルクス主義（弁証法的唯物論）の全貌を描いて見せた点からも、当時のマルクス主義理論に相当深刻な影響を与えている。更にこれはデボリーンの哲学的見解を最も特徴的に示した論文であった。このことについては別に触れる機会があるだろう。とにかく、この論文（エンゲルスの自然弁証法）によって、自然弁証法という言葉が普及したと同時に、唯物弁証法的、自然弁証法的研究に一つの規準が与えられたと見てよい。しかし、多かれ少かれこれに影響された方向が表面化するには、所謂福本イズムの思想的ヘゲモニーが崩壊するまで待たねばならなかった。そしてそれが崩壊した後にも三木清を中心とする哲学派とヘゲモニーを争わねばならなかった。

右のデボリーンの論文と並んで影響の大きかったのは、昭和二年の春に現れたレーニンの『唯物論と経験批判論』の訳（白揚社レーニン著作集、井上満の訳出を佐野文夫が編集したもの。これがこの書の最初の外国語訳であった。当時まだこの書の独訳はなかった。）であろう。これはわれわれが素朴的と呼んで内々軽蔑の傾向にあった唯物論を終始一貫して鮮明にわれわれの印象に灼きつけた点に絶大の意義を持っていた。何といってもわれわれは当時一般的な影響から、マルクス主義の唯物論を目して、思想が社会的に決定されるという方面を強調するもので、意識が物質から生れるとか、意識と独立にそれ自身に物質があるとか等のことは、たいして重きを置くべき問題ではなからう、という風に表象していた。いずれにせよ、一切の思想、一切の認識を、プロレタリアートの立場から仕上げ直すことにあるので、大事なものは、プロレタリアートが社会的歴史的に占める地位、およびその地位が思想を決定する仕方である、そうした事柄には、意識と物質はどちらが先か、自然を意識と独立にあるがままに認識しえるか否か等の問題はたいして関係してこない、と思われた。否、当時においては福本イズムの影響で、むしろ積極的

にこの関係を否定してしまう傾向の方が強く、これらの問題もまた逆にプロレタリアートの社会的立場において始めて規定されるという社会的決定から解決されるべきものだと考えられていた。私個人としては、物質が意識を生み、自然が人間を生んだという自然科学的唯物論の立場から、意識が社会的に決定されるという唯物論を統一的に展開する方向を当時漸くにして意識的に求めつつあったのだが、それにしても、『唯物論と経験批判論』の深刻極まる印象をどうしても忘れることができない。かえって、レーニンはあまり無批判的に独断的に古い素朴な唯物論を主張しすぎてはいまいかとさえいふかかったほどであった。レーニンは本書で自然科学上の認識問題に特別の一章を捧げ、断々乎として意識から独立せる客観的實在の存立を主張し、物理学上の理論は思惟がこの實在を益々深く反映することによって変遷し、発展するものとなし、それによって自然科学的認識における観念論的傾向を批判した。われわれ自然科学特に物理学を勉強したものは、多かれ少かれ一方では講壇哲学の新カント派的認識論やプランクの物理学的世界像の理論、他方ではマッハの経験批判論やポアンカレの科学論の影響を受けていたのである。これらの諸認識説に対して、マルクス主義の立場からは、あるいはプロレタリアートの立場からは、どんな態度をとるべきかは、マルクス主義に興味を持つほどの自然科学の学生には相当直接的な問題であった。ちょうどその二年前福本は『経験批判主義の批判』なる論文を書いて（雑誌『マルクス主義』大正十四年三月号）、マッハの認識論を『進展期にあった資本制生産組織に決定された意識形態』と規定し、アインシュタインの言葉を引いて『マッハのなしたところは、一の目録であつて一の体系ではない』と特徴付け、資本制の没落期に現われるべき意識形態（全体性的観察がそれだと福本は主張している）に対しては、階級利益上の反動性を持つのみと批判した。こうした対し方にも一種の巧妙さがあつて、当時のわれわれの意識にある程度の満足を与えたことはいうまでもない。しかし、レーニンが、マッハやポアンカレその他の傾向を、自然科学の発展そのものから説明し、——彼等が、これまでの古い原則が変革され、古い物質概念が変革され人間の知識の相対性が明かとなったことから、客観的實在としての物

質なる概念の否定を導き出し、われわれの認識しえるのは現象であり、感覺的印象であつて、客觀的實在を認識しているのではないと結論したのは、認識の弁証法的な唯物論的な性質（即ちわれわれの認識は客觀的實在を益々正確により深くより全面的に反映する過程の中にあるもので、その相對的知識の中に絶對的真理が内包され、開示されてゆくのだ、という性質）を知らないためである、——また、レイの説を引いて、彼等は常に客觀的實在を捨象して、實在の運動を数学的構成によつて表象し、それにより高い価値と眞理性を認めることにより客觀的實在を無視させ、觀念論を導入したのである、と述べた言葉は更に一層われわれに満足を与えた。

この書は哲學的唯物論に対する関心を高めた。そしてあらゆるマルクス主義的知識の基礎には哲學的唯物論が横わるという思想が普及された。それゆえマルクス主義の新しい解釈家として登場した三木清がその年の夏（七月始め）その第二論文『唯物論と唯物史觀』（改題の上『思想』に、ついで『唯物史觀と現代の意識』第二論文に載す）——『思想』の方には、当日の私の批判的質問を顧慮した語がある）を学生社会科学研究会を背景にもつ京大經濟學批判會（河上肇が責任を持っていた）で発表したとき、マルクスの唯物論とは、とりも直さず唯物史觀（史的唯物論）であるという彼の考え方に対して席上一般的な不満が表明され、史的唯物論は唯物論の一般の原理すなわち哲學的唯物論に基くものだとの反対意見が支配的であつた。もちろんあらゆる領域における具體的知識を唯物論的基礎から把握するとは、そもそも如何なることであるかについて、すべての人が明確な觀念を懷いていた訳ではない。その証拠に、その命題を全體的に把握すれば必然的に驅逐さるべきはずの福本的イデオロギーが依然としてヘゲモニーを保っていたのを見てもわかる。しかし、ともかくにもマルクス主義の基礎には哲學的唯物論があるということが常識化した。そしてそれとともに哲學の党派性に関するエンゲルスの『フオイエルバッハ論』におけるあの有名な言葉があらためてまざまざと意識に上つたのであつた。すなわち、哲學總体の最高問題は思惟と存在、精神と自然との關係の問題であり、このいずれを本源的に見なすかにつれて哲學者は觀念論と唯物論との二つの党派に

分れる、という言葉が。

もつともこの『唯物論と経験批判論』の訳出以前に、既にこの書に対するデボーリンの解説書『戦闘的唯物論者レーニン』が紹介されていて、それも相当に感銘を与えたものであった。(この解説書はロシアでレーニンの著書の単行普及版への序文として書かれたもので、それが一九二四年に独訳され、翌大正十四年の終りに二種の邦訳が現れ、昭和二年の八月すなわちいま問題のころには、志賀義雄の訳が改題の上改訂普及版として現れている。)しかし、唯物論の認識論、唯物論の根本原理、哲学的唯物論をわれわれの意識に植えつけ、絶対真理としての客観的実在が吾人の意識と独立に存立すること、われわれの認識は益々ますますそれに接近して行く反映(相対的真理)であるとして、一切の哲学的認識論的問題を裁断することにより、われわれに異常に深刻な印象を与えたのは何といつても『唯物論と経験批判論』であった。

デボーリンの『唯物論的弁証法と自然科学』(その二種の単行出版は昭和二年の三月ごろと八月ごろであったと思ふ)およびレーニンの右の著書について、同じく昭和二年六月にはエンゲルスの『反デューリング論』の訳が出版された。

いまわが国の自然弁証法的研究を回顧するに当って、右の一年間を真実の胚胎期と考えることは最も当をえたものであろう。自然弁証法的研究の前史は種々な形態において発足した。それらを詳細に探索することは恐らく不可能に近いであろう。しかし、一般的にいえば、新しい哲学的世界観や社会観が成長するに従って、自然科学という一人文現象もまた一方では見直された社会的現実の上にいる再評価されざるをえなくなり、他方では新しい哲学的立場によってその認識論的根柢が反省されざるをえなくなる。こうして自然科学の新しい見方が生れてきたのだ。一方では、最初に自然科学の社会的効用や役割あるいは社会人としての自然科学者の反省が産れ、他方では科学概論とか科学方法論とかいう学問が生れる。しかし新しい哲学と新しい社会観とが独立にいるわけではない。相互

に影響しあい、相互に連係している。自然弁証法はマルクスの唯物史観が社会観のチャンピオンとして現われ、その史観の哲学的基礎たる弁証法がわが国に紹介されたとき、この唯物史観と唯物弁証法を背景として自然科学がなめられるようになって、ここに生れ出るようになったのだが、その一般的趨勢の母胎に精子が与えられて胚胎期となったのが、右の時期である。この時期を境として自然弁証法的研究はいわばその本史に入る。

本史に入る前に、前史の潮流をうかがうに足る若干の文献と、若干の事実を、主として著者の個人的回想を中心に述べよう。いまの場合これが唯一の可能な仕方であるから。もし、この時期を経過して自然弁証法の理論家となった人びとの追想が広く紹介されるようになったら、この時期の詳細な研究に大いに役立つだろうと思う。

二

個人的な回想がどれ程読者に興味があるかは疑問である。しかし、一つの問題に即した思惟の発展の回想には、例の系統発生と個体発生との関係に似た関係があつて、ある時期の人類の思想的発展を、多かれ少かれ何等かの形で表現していないものもあるまい。

私の最初の出発は自然科学特に物理学の諸理論の哲学的解釈に対する関心であつた。

ある田舎の中学の物理の時間であつた。フト何かのはずみに教師のいった言葉がいまでも耳に残っている。『引力は質量の相乗積に比例し、距離の二乗に反比例して作用する。しかし、この引力が何故働くかという問題は科学では説明できぬ。それを説明しようとするど、どうしても哲学の問題になつてくる』——この言葉がどんな意味でいわれたかはいまでは分らない。しかし、この言葉は未来の詩人物理学者を夢みていた中学生の心をしつかと捕え、一連の空想的問題に拉し去つた。この問題は、私が自然科学の修業に携わるや否や私をそれから引離し、私が自然科学から離れようとするや否や、私をしつかりと自然科学に結びつけるところの不思議な力を持った問題であつた。

そして私にはその『哲学の問題』にふける喜びが与えられた。物理の教科書にある諸事項に教科書とは別なもつと『熱のある』『ロマンチックな』説明を下すことに没頭した。後で考えれば吹き出すようなことばかりであったが、そのためにいく度か学期試験を一夜漬でごまかさねばならなかったことだろう。同じころ、私は漸く喧伝されはじめた相対性原理の通俗解説を読んで怯悦に酔ったことを覚えていて、そしてこの革命的な見地に鼓吹された精神をもつて物理学教科書を第一頁から考え直すことがその後長いこと私の空想を占領した。しかし、どうしてそんな詩的空想から認識が生まれえよう。私の自然科学の修業時代を通じて、この空想は真の自然認識の唯一の門たる実証的知識の充分な吸収を阻害するのに役立つた。

大正十一年の秋、アインシュタインが来朝したときには、私は資本主義都市大阪の空気を吸っていた。そこでは中学生が労働問題を論じたりする風景もあった。しかし、その年の初秋に大阪の天王寺公会堂で行われた、労働組合総連合の創立大会のあの有名な分裂は、私には何の関心もひかずに過ぎた。そういう事柄を多少の見透しをもつて注目するにいたつたのはなお二、三年の後であった。そのときになつてやつと、なるほどそういうえばあの頃親しかった『社会主義者』の友人が、天王寺で何かがどうかしたという話をしていたわいと思ひ出した位であった。

私の心は益々自然法則の賛嘆と反省とに向けられ、自然を詩的空想の中に躍動せしめて捉えようと骨を折つた。そのころむさぼり読んだが結局は理解できずに終つたところの石原純博士の『相対性原理』から、しかし私ははじめて一つの認識問題を教えられた。自然法則は、経験上の観察から得られるのではあるが、体系をつくるに当つては、心理的にはマツハのいわゆる思惟経済の原理に従い、しかもそれを徹底させることによつて、単一精美の自然法則、唯一性をもつ体系に到達するのだという思想、これである。これは、いかにもその通りだという風に思われたが、そうした問題を掘り下げて行く興味ははまだ切実でなかつた。思うに、中学程度の科学的知識しか持たない場合、そうした問題を掘り下げる根拠はあるはずがないの得られるだ。何故なら、認識問題とは科学的知識の発展

法則を論ずるのだが、肝心の知識そのものが少ししかない場合、知識の法則を研究しようにも研究の対象たるべき知識材料がないではないか。必然に、私の空想は、自然の中に^{なか}芸術や哲学や科学や一切の思想の根源を見、その自然の観照としての物理学の中に人間精神の最高の殿堂を見た。そして、その殿堂をたたえる詩を作り、未来のインシュタインを夢みて高等学校へ入った。

まだ少年の夢の抜け切らない理科の生徒にとつても、人間生活に対する関心が起らざるをえない年ごろであった。「民衆」というものが私の目の前に浮び上ってきた。近世社会思潮に関する紹介書を読んで、理想社会を設計して見たり、英国労働党内閣の成立に目を見張ったりしたが、しかし全体としては私は自然科学にひたすら没頭した。そして六月五日の『暁の手入れ』（一九二三、六、五、第一次日本共産党員検挙）にもまだそれほどの深い興味は覚えなかつたと思つている。しかし一年の後には反動がきた。

自然観照の中^{なか}に一切の精神活動の精華を見ようとする世界観には分裂がきた。科学と文学とはお互に関係のない二つのものに見え始めた。文学と芸術の中^{なか}にはあらゆる人生観が表現されているが、それと自然観照とに何の関係があろう。この生徒は、スピノザとシェリングの肖像のある部屋で宇宙の秘密を探らんとする努力を続けた自然科学者が、人生の感情（彼はこれを愛という言葉で表現して見た）に裏切られて破滅するという筋の劇詩を作つたりした。まだそんな程度の人生感情であつた。それに相応して社会観も空想的であつた。経済学も大いに勉強したいと思つた学問であつたが、それはただ社会的なことを知るといふ知的興味からで、それが社会的理想のための闘いとどんな関係があるか、はつきりした意識はなかつた。人間の親愛と高貴な精神に充ちた未来社会を空想しながら、^{しばしば}屢々自分をその戦士として描いて見たが、それではこの戦士は具体的にどんなことをすればよいのかという点には一向考え及ばない戦士であつた。それもそのはず、こうした理想社会というのは、結局は自分の心情の喜びを、理想社会従つて未来社会の精神生活という形で、自分の目の前に表象しているだけにすぎないのだから、そうした社

会を闘いとするには、ただ自分の、心情の中なかに溺れ込んでしまえばそれでよいのだ。とにかくこの戦士は理想のために闘う。彼は自然科学者である。彼は書齋にあつては物理の研究に没頭し、出でては革命家として迫害と闘い、逮捕されたり、追放されたり、亡命の前にひそかに恋人の窓を訪れたりする。私には自然科学者で革命家のクロポトキンが最も理想とする人であつた。しかし、このクロポトキンは私に素晴らしいことを教えてくれた。あのころ流布していた英文パンフレットの『アップール・ツー・ザ・ヤング』の冒頭の句が与えた強い印象を忘れることができない。——君がいま医学を修め、良心のある医者として社会に立つたとしよう。君はある富豪の家へ招かれる。そこには一人の病人がいる。遊惰と飽食から招いた病気を直すために君は彼女に適度の運動と節食とを勧める。それから君はある貧しい病婦を見舞うことになる。薄暗いじめじめした不健康な部屋、汚い蒲団ふとん、病婦の夫は失業している。病気は明かに栄養不良と不衛生な環境に因由する。病人には何よりも充分な栄養と転地が必要だ。しかし君は平然とそれを勧告することができるだろうか。その時君はこの社会について何事かを考えないだろうか。あるいはまた、君が技術家であるとしよう。君は寝食を忘れて、一つの機械を発明する。しかし、それが工場において多くの職工を失業させ、彼等の搾取を促進し、少数の資本家を富ましめるとすれば、君はそれについて何と考えるであろうか。大体そういうようなことが生彩ある言葉で書かれてあつたと思う。もちろん、私は社会的不正について考えた。しかし、社会的不正の依つてくる根源を科学的に研究するとか、不正・不合理と闘い、あるいはそれを克服すべき現実的な各種各様の方法を意識することは、いまだ決して内面的に迫つてくる問題ではなかつた。内面的にはなおやはり、未来社会の空想により多くの情熱を燃やしていたが、こういう空想は、夢見る学生の人道主義的理想がそのときどきにとる形態の一つにすぎないものである。その少し前、大正十三年の七月大阪市電ストライキに際して、大阪高等工業および高等商業の生徒が一般市民の困惑を緩和すべく自己の技術を社会的に活用したこと自体に対して、交通労働者の闘争に対する以上に興味を感じたほど素朴であつた私は、その後間もなく、その学生

の行為を労働者階級に対する闘争において資本家階級に手をかすものとして認識しなければならなかったといえ、いまだ決して人道主義的理想の境地から出はしなかった。

私が、不正・不合理と闘うこと、それを倒して社会を解放すること、そのあとへ人類愛と理性によって統制された理想社会を建設すること、というプログラムの夢想にふけり、その理想社会の幻想にとらわれていた間に（いわば、『空想的社会主義』の夢に囚われていた間に）、市電事件を契機として、学生社会科学連合会の運動は新しい躍進を遂げつつあった。それは科学的社会主義としてのマルクス主義の研究と宣伝の運動であったが、私にはいまだその科学的の意味が理解できなかった。私は人類解放の偉大なる思想は必ず研究さるべきであると信じていたので、もちろんその運動と接触は保ちはしたが、マルクス主義の唯一性を確信した上のことではなかった。そして、あらゆる種類の社会学的、社会主義的理説が平等に研究されることこそ公平な学問的な態度だという考えを持っていた。一つの社会的運動としては、客観的にいって、もはやマルクス主義（社会民主主義も含めて考えていた）以外にないことを知ってはいたが、しかし冷静な科学者としては当然諸説の公平なる比較吟味を忘れてはならないと思っていた。それが科学的態度だと思っていた。空想と科学との区別をはっきりと知るにいたったのは一年か、なおそれ以上後のことであった。空想とは、各人がそれぞれ各自の生活環境や生活態度や教養からして懐くにいたる理想を、現実の社会の上におしついたり、その彼方に描いて見たりすることである。空想的社会改造とは、そうした理想から眼前の社会の不合理を難じ、その現実の社会を押退けて理想に従った遺漏なき制度を実現しようとするのだ。これに反し、科学とは、歴史を貫いている客観的な必然的な発展法則を認識し、社会的な不正や不合理を社会の歴史的発展の必然的結果として説明し、客観的に発展しつつある現実の社会の中にそれらを解決する要因を発見することである。いかなる理想的考案も、社会の必然的な発展が元来因果的にその方に向いていなければ実現されない。いかなる理想的方策もそれを実現する一定の社会的な勢力が歴史の客観的発展法則によって生長し結合して行くの

でなければ実現されえない。空想は観念によつて現実を律しようとするが、科学は現実を現実として研究する。このことを私は最初ゾンバルトの著書なんかによつて、つぎにエンゲルスの含蓄深い『空想から科学へ』によつて会得したと覚えている。である限りは、科学的社会主義あるいは社会科学としてのマルクス主義のみが現実的な社会運動の上で勢力を保持する唯一の思想であるという事実は当然の結果なのである。そしてその社会科学の教えるところによつて、私もまた最後にはプロレタリア階級の地位を擁護し、あらゆる社会的動きに処してその階級の立場を有利に展開することの中にのみ、人間解放の大根幹があることを了得するにいたつたのであった。最初自然科学の中に一切の真理の源泉を求めていた私の関心は、こうしてプロレタリアートの解放の中に一切の真理の源泉を見ることに推移して行つたのである。

ここにおいて一つの問題が生ずる。クロポトキンは上述の書でインテリゲンチヤ青年に訴え、かくて今日はもはや科学上の真理や発見を蓄積しているべきときではない、きたつて社会解放の實際運動に参加せよと、呼びかけている。最初の間私は無条件に自然科学の殿堂の建設者たらんとする理想を追いつつ、同時に革命家たらんことを夢想していたが、ついで私は自然科学者たることに大いなる疑問を持ち始めた。そして實際『真理や発見を蓄積』することの意義を大いに疑い始めざるをえなかつた。当時のわれわれの素朴な考え方によれば、もはや現存状態（スーツ・クオー）に満足せざるわれわれにとっては、研究すべき科学はただ一つしかなかつた。プロレタリア階級闘争の科学がそれである。自然科学の如きは到来せしめらるべき新しき状態においてのみ始めて研究されればよいのである。現在の如き段階においては、研究さるべき価値がない。否、現在の段階においては単なる自然科学の研究ということ自体は、社会的正義からの逃避であり、支配階級の利益となるばかりである、と。

こういう考え方は、自然科学および技術の理論的および社会的意義、並びに自然科学者および技術者の社会的地位の評価に関する驚くべき単純さに由来するものであるが、しかしそれ自身また一個の意味ある見解たるを失わな

かった。大正の終りから急激に抬頭^{たいとう}してきたった労働者農民の結合勢力は、彼等自身の階級的インテリゲンチヤ・活動家を要望していたのである。少しでも意識をもった人間は自己の立場に留つてゐることができなかつた。学連の学生達は一切を棄てて職業的な闘士となろうとした。私自身もはや社会的闘争に眼をつむり、自然科学の殿堂に引きこもつてゐることができない気持であつた。自然科学に対する離れ難い愛着はそれでもなお、私をして自然科学者たらんとする要求を放棄することを許さなかつた。そして私を絶えずプロレタリアートの解放と、自然科学および自然科学者との関係という問題に結びつけてはいたが、気がついたときには、既に自然科学の研究を放棄していた。

さて、しかし、一つの時期において、一定の人びとが自然科学や技術の研究を放棄して、プロレタリアートの解放の問題に専念したのも、一つの必然ではあつたが、それと同じ当然さをもつて、人間的社会的解放はまたその方で、自然科学および自然科学者のかかるものとして、の力に待つこと大なるものがあることを忘れてはならないのである。この力を無視する者は、それだけ人間的社会的解放を無力ならしめてゐる訳である。科学的社会主義は常にその意義と力を充分に評価することを忘れなかつた。否、自然科学と技術との全き意義を理解したものは、ただ科学的社会主義のみだといつて差支えない。科学的社会主義は、『人間の自然に対する理論的実践的行為すなわち自然科学と産業とを歴史の運動（社会とその発展）』（『自然弁証法』上巻、二二頁）の基礎と見る唯物史観に拠るものである。空想的自然観照と自然科学への絶大な傾倒に対する私の最初の反動が、自然研究と人生感情との分裂という形でやつてきたことは前述の如く^{ごと}であつたが、それによつて自然科学の方法に対して批判的になつたり疑問を懐くようなことは決してなかつた。

そのころ私は科学概論といった風の書物をむさぼり読んだ。田辺元博士の『科学概論』などはとても難解で齒も何も立たなかつた（このころ平林初之輔がこの書の手引書のようなものを出している）。同じく『最近の自然科学』

も部分的にしかわからなかった。しかし、そこに紹介されていた自然の科学と人生の科学（文化科学、歴史学）とを分つドイツ西南学派の説は私の印象に残った。自然科学は対象の普遍的必然的な法則を求める学問であるが、人文的諸科学は価値の判断を与える学問である。人間の関心に従つて事物や出来事の意味を了得すること、人間が実現すべき理想に照らしてそれらを評価することは、自然科学のなしえないところであつて、そのために別種の科学が必要である、と。この考え方は私に大きな感銘を与えてくれたが、結局身にはつかかなかつた。カントの実践理性の優位の思想は、私にはそんな説もあるのかという位の印象しか与えなかつた。自然科学の魂をなす純粹理性（理論理性）すなわち必然的法則が闡明しえる範囲には限界があつて、それ以上のことは実践理性（自由意志）によつて始めて明かにされえるということ、また理論理性の意義は実践理性をまつて始めて理解されるということ、こういうことは分つたような分らぬような調子で、しつくり頭にはいらなかつた。一般に新カント派等の講壇哲学を私はどんな風を受取つてよいのか全く見当がつかかなかつた。そこへはどういう風に入つて行つてよいかわからなかつた。そしてわからないまま過ぎて行つた。

これらの考え方は種々に形を変えて、後に自然弁証法に関する一般の討論の中へも入つてくることになる。ただ永遠の価値（先験的な理想）に照らしての価値判断が、歴史の中に組み入れられ、歴史的に実現さるべき理想（史的価値）に照らしての判断に移つて行つただけの相違である。人文現象が客観事象としての法則性において科学的に研究されるかわりに、未だ理念や理想に照らしての価値判断に委ねられている領域を残している限りは、かかる型の考え方は絶えず生み出される。

アンリ・ポアンカレ——彼の『科学のための科学』の思想『科学の価値』緒論は、ちょうど私が自然科学に対する深大な崇敬の念を懷いて高等学校に入ったころの心理状態であつた。『真理の発見、これが吾人の活動の目的でなければならぬ。吾人が活動の目的とするに価するものはこの外にはない。』物質的幸福は頼むに足らぬ。真理の

研究こそ人生の目的である。吾人の知性が世界の中に発見する調和こそ、吾人の到達する唯一の客観的實在であり、真理である。そしてこの調和が美の根源である。ただ科学と芸術とによつてのみ文明は価値を有する。ポアンカレは真理の中に科学的真理と道徳的真理とを含めて考えていた。しかし科学的真理（自然の真理）と道徳的真理（人生の真理）とは、私には益々対立的に映ずるようになってきていた。人生の真理は単に調和を発見することにあるのではない。ちよつと、自然の調和（科学法則）と美の調和とが全く別々で、人間が芸術家として美の調和を読み取りかつ表現することが、科学研究と何の関係があるかと思つていたときであつた。調和の発見でなくて、調和を創造すること、不正や不合理と闘つて調和ある人生を実現すること、これが道徳的真理ではなからうか。

既に人間の生産活動や社会生活というものに、また民衆というものに、目が開き始めて以来、私は『人生のための科学』の思想に転向していた。そして科学は調和ある社会の創造に役立たねばならぬという信念の下に科学と人生との関係を考えた。すなわち調和ある社会とは、科学が普及し、すべてが科学的に遂行され、科学の福祉が平等に浸透するのだからなければならない。それに従つて一方では科学の社会化に大きな関心を持ち、当時の小倉金之助博士の実用数学の提唱にひかれたりした。社会化、つまり知識の普及と技術的应用との謂いである。他方では科学の福祉の享受を骨子とするウイリアム・モリスやクロポトキンの理想社会の叙述に好奇心を満足させていた。またいわゆる社会学なるもの、すなわち個々の人間を社会的に結合している種々な原理や結合形態の抽象的な議論をもつつき捜した。が、種々な社会形態を知ることとは、単に面白いというだけで、かなり無意味なことと思われた。要は、野蛮なまた不都合な制度を改めて科学の応用を普遍的に享受できる社会になつてゆけばよいのだ。

こうして社会的関心が高まり、科学のための科学の思想から、人生のための科学の思想に移つて行つても、それによつて自然科学の方法そのものに対して批判的になつたり疑問を懐くようには決してならなかつた。実験、観察、帰納、演繹、仮説、検証によつて科学的真理が得られることを私は決して疑わなかつた。人生の真理、社会的道徳

的真理は、まさにこの科学的真理とその普及・応用に調和すべきであつた。そしてゾンバルトの著書『社会主義と社会運動』によつてエンゲルスの『空想から科学へ』の見解を解説した一章を読み、社会に対しても、合理的な形態を頭で描くかわりに、科学的にすなわち必然的な法則に従つて動いて行くものとして扱わねばならないこと、従つて実験、観察、帰納、演繹、仮説、検証によつて社会の發展法則を発見すればそれが人生の真理すなわち社会主義だということを悟るに至つて、自然科学の認識方法に対する信頼は益々高まつた。私は哲学問題に随分興味はもつたが、そういう哲学的認識論的問題から自然科学の独立性を頑として確信していた。自然科学の固有の精神はそういう哲学の議論とは無関係だと思わざるをえなかつた。その固有の精神の開發こそ重大な任務なのであつて、私はそれを志すことに喜びを感じ、自分を唯物論者と呼ぶことに喜びを感じ、自分を唯物論者と呼ぶことに誇りを覚えた。そして『素朴な』、実証論者、経験論者、實在論者として、マツハヤピアスンやポアンカレ等の『批判的な』経験論や実証論、ヴェインデルバントやリツケルト等の『批判的な』先験論に本能的な不満を覚えた。しかし前述の如く、これらをどんな風に取り、どんな風に入つて行けばよいのかわからなかつた。従つてどう仕末してしまえばよいのかわからなかつた。

* * *

私が以上のような問題に当面しつつあつた時に、わが科学的社会主義者の間でも、プロレタリア階級解放の立場から科学を問題にし始めていた。

雑誌『マルクス主義』第五号（大辛一二年九月）の林房雄『階級闘争における知識の役割』という一文を見よう。『科学は生活の必要から生れた。社会の必要によつて生れ、必要によつて刺戟されつつ發展してきた。』

『ただ社会科学の場合においては注意すべきは、その社会が利害の対立を基礎とする階級に分裂している場合には、各階級毎に、その必要を異にし、従つてそれより発生する科学が、明確なる階級的性質を有している」と

いうことである。自然科学が、社会人が自然に対抗し、これを征服する武器であつたように、社会科学がある階級がある階級を征服し、支配し、搾取する武器となる場合が甚だ多い。』

『そこでこういう結論が生れる。すなわち数学、物理学、化学の如き自然科学においては、資本主義的解釈と違うものはない。(実際においては、この科学は、資本家的生産に応用されて、利潤の作出の手段となるが。)しかし、歴史、経済学の如き社会科学においては、資本家的解釈と、労働階級の解釈とが対立しえる。』

『各階級にとつて、知識はその階級の必要を満し、目的を遂行するために、有力な道具であり、武器である。』
ついで第八号(十二月号)には『独立労働者教育』について論じている。

『労働者の必要とするものは、労働階級の解放運動をできるだけ有効に促進するための教育——すなわち独立労働階級教育である。』

『(1)現存制度のもとにおける労働階級の地位はどうであるか。

(2)如何にして、また何故に労働階級はそういう地位にいるようになったのか。

(3)どうしたらこれを改造できるか。』

『この問題を解決するための基礎となるものは歴史である。』『この歴史の基礎をなすものは、先ず第一に生物学(『有機体としての人間の発展を取扱う科学』)及び心理学(『思考し、感覚し、意志する有機体としての人間を取扱う科学』)、ほかに地理学がある。(『人間の歴史全体を通じて常に存在している物は二つある——人間と地球)』

『生物学、心理学、地理学、経済学(経済学といっても、現存制度の擁護学たる、『官学的』経済学ではなく、労働こそ経済学の始めにして終りであることを暴露してくれる労働の経済学、科学的経済学すなわちマルクス主義の経済学である)、労働階級運動の歴史——これがわれわれの研究の骨子をなすものである。無論、これを

決定するものが、労働階級の闘争の必要である以上、特殊な必要に依じて、必要なる改変、附加、あるいは削除が加えられることは言をまたない。』

これらは当時盛んになってきていた（同時にそのころの学連の『實際運動』の重点でもあった）労働者教育運動に関連して書かれたものである。これでもわかる通り当時は自然科学とその啓蒙的意義とに対して大いなる信頼が持たれていて、自然科学は社会科学と異りそれ自身はもちろん階級性を持たないという考え方が一般的であったようだ。その年の暮に東西数ヶ所の講演会で多大の感激を呼び起こした森戸辰男の講演（『思想と闘争』として翌十四年一月号『改造』所載、ついで独立のパンフレット『青年学徒に訴う』として発行）のなかでも捉われない自由な自然研究のことが語られている——『自然科学と自然科学的テクノロジイ、この領域においては自由なる研究とその成果の自由なる応用とが公認せられたのみならず、場合によつて非常に奨励せられさえした。』『社会科学の領域においては、自然科学におけるが如き科学的精神が徹底せず、あたかも中世における自然科学におけるが如く、支配階級の利益がその最後の命令者であるという状態から余りに多くを脱却していないのである。』氏はその理由として五つの事情を指摘し、『此等の諸事情は、根本においては、現代社会が階級対立の社会であるという事実から生ずるのである』と述べている。

山本宣治の『生物、人類』（『無産者自由大学』中の一冊、全集第七卷無産者生物学に採録）は昭和二年の出版であつて、この時期のものではないが不思議にもちょうどこのころのものとして林氏の所論などと関連させて言及するのが最も相応しく思える——『劈頭第一に観察者の個人的感情や利害関係を超越して、いわゆる「第三者」の立場からその時の対象を見ようとする、すなわちかように「客観的」観察をすることが、われわれの今いう「科学的な物の見方」なのである。自然科学のあらゆる部門は皆、この科学的態度に立脚してそれぞれ専門に属する対象の特性を観察記録することから出発している。社会科学も当然その筋道をたどるべきであるにもかかわらず、有産者

御用達の「文化学者」は何等客観的存在理由も確かめられていない「何々すべし何々すべからず」をふりかざして科学的研究法からは出発しなかった。否それから出発したものの途中で将来がこわくなって、その科学的研究法をほおりだした者ばかりである。』(六、七頁)

自然科学に対するこうした信頼は、十九世紀において欧州の自然科学が大発展を遂げ、あらゆる空想的思弁にとどめを刺して威力を発揮した精神的影響であり、日本資本主義の産業的発展がそれを輸入して科学教育を普及させた結果であろう。われわれの日常経験は物事を実地に見て確信することの必要を教えているが、自然科学への信頼は実証的な経験的な分析の確実さと技術的応用の威力とに対する信頼である。空想を去って科学的に物を見ようとし始めるやいなや、われわれは既に在る科学に必ず依拠点を見出そうとするのは当然である。マルクスが、ダーウィンの進化説は『ちょうど歴史的階級闘争の自然科学的基礎をなすものだ』といったように、自然科学によつて養われた事物を実証的に見る精神と、人間を自然の産物としての地位においてみる見方とは、社会を科学的に把握するための思想的準備となるであろう。林房雄の見解とほぼ一致して、山本宜治は右の本で『何のために「無産者が科学を学ぶか」(二六一頁)を述べ、『^{しか}然らば、その無産者科学のなかでも生物学は、我らの解放の為に特に「どんな方面に」役に立つか」(二六四頁)』という問題を提起して、(1)人の生物界における位置を定め、この知識は人間社会におけるわれわれ自身の立場の決定(階級闘争)の基礎になる、(2)物の見方を根本的にかえる点において、変化の過程にある生ける全体に見透しをつけようとする生物学はおのずから弁証法的見方を会得せしめる、と、答えている。そのころの『マルクス主義』の新刊紹介の小さな記事には新カント派の文化科学に対して無産階級は『一切の社会現象を自然科学的立場から見る』と主張してある。恐らく、『経済学批判』の序文の自然科学的な忠実さをもつて証明しうべき物質的変革という言葉の転用なのであるが、やはり当時の自然科学に対する無条件的信頼の一表現に外ならない。大正十三年の秋神戸で関西学連結成の相談が行われた会合であったと思うが、その席上、京

大研究会の重鎮某君がこんなことをいつたのを覚えている、『この中に理科の人はいませんか。研究会に理科の人がいると大変いいですよ。蟻や蜂の社会の話なんか聞けますから。』大杉栄の『種の起源』や『昆虫記』の翻訳だとかは問題外としても、わが国の前期の社会主義者達が自然科学的啓蒙に関心を持っていたことは、種々な文献からも知りえる。やはりこのころエリオットの『近代科学と唯物論』（白揚社）なる書が山川均に訳されて好評を拍している（残念ながら、私はその本の内容を知らないが、広告文には『つとに世界的名著としてとなえあるもの』とある）。この広告文の一節は、われわれに興味がある——『近代に及んで人類の知識が、すべてを科学的解決の方途に求めて止まなかつた努力は、遂にその著しい成業を総合して一元的、唯物論的の宇宙観を立派に立てることができた。ここに真の宇宙観は始めて確立され、延いては正しい人生観の方向に決定を与えるにいたつた。』かつて『社会主義研究』に訳載され、やはりこのころ出版されたデイツゲンの哲学論文（山川均訳）も、自然科学を人間の認識の模範的成果と見、その認識の方法を「哲学の成果」として、弁証法的唯物的哲学として分析している。こうした自然科学に対する無条件的信頼は、つぎの時期には全く転倒してしまうことになるが、このことは追おいに述べよう。

さて、以上において、自然科学の社会解放上の意義は、専らそれが人びとの自由な捉われざる研究の目を開かせるといふ方面からのみ評価されているのがわかる。そして自然科学者の事業が解放運動に貢献し得る所以がその点に求められたのは、当時知識階級の実際運動といえは（俸給生活者組合の運動を除けば）労働者教育運動であつたことと並行した現象であつた。山本宣治は一生物学者として大阪京都の労働学校に参加した。しかし、本当をいえば山宣が『生物、人類』で立てた『各自の世界観、人生観、社会観を建設するに際して、出発点と観察態度の決定それから全体として統一ある人生観と社会観を戦いとること』（一六三頁）という目的をどの程度に達したかは私にはわからない。とにかく、山宣が労働者を正しい人生観に教育した以上に、労働者運動は山宣を鋭い人生観に教育

した。帝国大学も同志社大学も山宣を追った。彼は既に生物学者の埒内らちに止つていなかった。そして最後に最初のそして唯一の革命的代議士として兇刃に斃たおれた。——クロポトキンは『今日もはや科学上の真理や発見を蓄積してあるべきときではない』と断じ、きたつて社会解放の實際運動に参加せよと青年に訴えた。山宣のみではない、幾多の「小」山宣達は自然科学や工学や医学の専門を捨ててそれに参加した。社会科学研究会を通じて組合や政党の仕事に入つて行つた。

とはいえ自然科学者がその立場において人類解放のためにプロレタリアートと協力しえる道はこれに尽きない。私はいまもう一つの真理を語らねばならない。唯物史観は歴史の原動力と、歴史における人類解放の基礎とは、産業の発展の中なかにあることを教えている。産業を支えるものは科学と労働民衆の手である。クロポトキンの認識とは反対に、科学上の真理や発見は（自然科学上のそれたると社会科学上のそれたることを問わず）人類の進歩と解放と生活の豊富化のために絶えず益々蓄積ますますされねばならないのである。そこに自然科学者の人類に対する使命がある。そしてこの使命を自覚する限りは、自己および自己の活動が、人類の進歩と解放に敵対して用いられ、生活の破壊と抑圧に役立てられつつある事実とその原因とを、認容することはできないのである。それはちやうど労働する民衆が自己の社会的歴史的地位を自覚する限り、自己の労働の成果によつて自己が抑圧されることを認容できないと同様である。

自然科学とプロレタリアートとは、歴史を動かし人類を解放すべき産業の生産力の二つの側面である。自然を征服し人類のために役立てた経験によつて、自然の性質を見極めえた限りの知識の集積として、自然科学は社会の生産力（産業的技術的基礎）の理論的側面である。自然科学はかかるものとして自己の地位を確立した。この同じ基礎、同じ生産力は労働する民衆の最も集中化され組織化された社会階級、プロレタリアートを生んだ。プロレタリアートは労働する全民衆を代表して社会の産業的基礎の人的側面をなす。社会的な困難や不合理がこの階級の上に

圧力を及ぼし、自己の地位の維持と伸張が脅かされるとすれば、そのことはすなわち生産関係・産業組織・社会制度が社会の基礎たる生産力に適應せず、それに矛盾していることを意味するのであって、その限りこれは同時にその理論的側面である自然科学にとつても、内在的な危機をなしているのである。自然科学の築き上げた地歩、その既得の勢力範囲と精神的力が崩れるのを欲しない限り、その地位の維持と伸張を欲する限り、自然科学者は意識するとせざるとにかかわらず、プロレタリアートと同じ立場に立たしめられるのである。自然科学と自然科学者の活動は、右の如き^て関係においてプロレタリアートと共に解放さるべきものである。プロレタリアートが今日われわれの社会において階級的存在として限定されているとはいへ、その中^{なか}に『人類社会または社会的人類』として展開さるべき本質が内在していると同様に、自然科学もまた社会的矛盾を脱し、人類の進歩に対立した目的を追う社会的階級や社会層の統制や占有の限界を乗り越し、全人類のものとして解放さるべき本質をもっている。自然科学のこの本質からして、自然科学者の使命、その本分が生れてくる。クロポトキンの忠告に従うのも一つの道であろう。自然科学を健全な合理的な精神を養う知的啓蒙のために社会化させることも一つの道であろう。しかし科学こそ人類の進歩と解放の^{こうかん}槓杆であり、この槓杆を握る自然科学者にとっては——まさに自然科学者であるというその理由によつて、かつその資格において——プロレタリアートと共に進み、密接な提携を確立し、社会的生産を維持して、その成長に矛盾して運動する社会力を克服すべき義務が生まれるのである。ア・アインシュタインが有名な反戦主義者であり、労働者救援運動の友であり、ソヴェト連邦の友であることは、必ずしも彼がユダヤ人であるゆえばかりではない。一九三〇年ソヴェトの産業を破壊し社会主義建設を挫折せしめんとした「産業党（技術団体連盟）」の公判に際し、彼を始め他の科学的名士の中^{なか}から、彼等反革命的技師は科学者たるの本分に背いたのであるとの意見が聞かれたのは、当然の現象である。一九三二年八月アンリ・バルビュスの提唱による戦争反対国際会議では、彼はシューナイヒ將軍等とともにドイツの常設委員として活動し、ソヴェト連邦を軍事的襲撃によつて弱め、その経済

的發展を阻害せんとする意図に対し反対を表明した。有名な科学者が自己の義務に目覚めてくる趨勢は益々著しい。特に英仏等の自由主義国家において。例えば、一九三五年に出版された『自然科学の徒勞』という本がある。ソデイ博士やブラケット教授等によって、イギリスの現在の社会組織の下では自然科学は人類の幸福に貢献するという自己の最大使命を達成しえないという自覚が、そこに語られている。こういう科学の徒勞は、科学そのものの拠って立つ基礎、科学の發展の地盤が退嬰的たいえいとなり、なおも慣性をもって前進せんとする科学自身が蜃気楼的存在となつて昇華してゆく危機を暗示している。

話は戻る。一九二五年九月ロシア学士院二百年祭にレーニングラード・ソヴェトの議長として、ジノヴェフは各国の学者の前において（日本からは福田徳三、松村松年、八杉貞利の三氏が招待された）あいさつを述べたが、そのなかで彼はプロレタリアートと科学者との間には、その目的において多くの共通点があることをいい、それを結合するものとして三つの点を挙げてゐる。すなわち戦争に対する闘争、生産上の無秩序に対する闘争、科学と民衆との接近のための闘争。

『私は信ずる、これらの三点は、民衆に奉仕、全世界に奉仕せんと欲するあらゆる科学者に、完全かつ無条件に受け入れられなければならないと。』

有名なロシアの碩学力・チミリヤゼフ（植物学者、ダーウイニスト）は、その生前彼の息子（ア・チミリヤゼフ、後に述べる）に対する最後の手紙において、ボルセヴィキは民衆の幸福のために働きつつあり、また彼等に幸福をもたらすであろうと書いた。レーニンの活動を真心から讚美して、チミリヤゼフはつぎのごとく書いた。「私は貴下に対して満腔のあいさつを送り、そして貴下が人類の幸福のための貴下の事業において引続いて成功せられんことを祈る」と。

これは科学の世界からの最初の燕であった。爾来八年の歳月が経過した。われわれはすべての困難を克服して、

われわれの綱領の実現に、民衆の文化と幸福との標準の向上に、一層近づいた。ロシアの科学者が今や種々の道を経てわれわれにまで到達するであろうということは疑うべくもない。彼等は時にはわれわれを傷けるであろうが、然しやがて彼等はチミリヤゼフが到達した点に到達するであろう。

『学者の物質的地位が非常に悪かった一九一八〜二一年には、レーニングラードの科学者は困難な時代を経験した。われわれは教授達が烈しく苦痛をなめつつある事実に対してわれわれの眼を決して閉じてはいなかった。またわれわれが、若干の学者の集団がわれわれの事業を理解することを執拗しつように拒否するのを見、すべてのわれわれの意向が如何に不利な意味に説明されるかを見た時にも、われわれは憎悪の感情を抱かないだけに十分客観的であった。われわれは一年の後にもせよ、または何年かの後にもせよ、彼等が……われわれの事業を……承認する時は来るであろうということを理解していた。』

しかし、チミリヤゼフはただ一人ではない。アメリカのG・E会社研究所の電気工学の世界的権威からレーニンに送られた手紙を是非ここへ引用しておきたい（『唯物論研究』第三〇号参照）。

『一九二二年二月

親愛なるレーニン氏よ

ロゼフ氏の帰国は、ロシアがかくも困難な状態の下に達成しつつある社会的および産業的復興の驚くべき事業に対し、私の欽仰のこころをあなたに表示する機会を私に与えました。

私はあなたが最大の成功をえられんことを望み、またあなたがそれを達成せられるであろうことを衷心から信ずるものであります。実際あなたは成功しなければなりません。何故なにゆえなら、ロシアによって始められた大業は、失敗してはならないものだからです。

技術上の問題について、特に電気工作事業上の問題について、もし私が何等かの方法、勧告、提示あるいは指

導によつてロシアを助けることができるならば、私は常によるこんで私の力限りのことをしたいと思います。

あなたの友として シ・ピ・スタインメッツ』

プロレタリアートと科学者および技術家との提携は、ソヴェト連邦において社会主義建設の困難な事業を成し遂げた。そこではかのクロポトキンが青年に訴えたような不合理は原理的に除去されている。そこでは何人も科学の徒勞をかこつ必要はない。科学はプロレタリアートとともに王座についている。生産力の自由な展開とその成果の自由な享受とを、自己の非社会的な目的のために壟断ろうだんせんとする組織的な社会的力は、一国の規模においては、かつ根本のところは、その根を絶たれている。科学は自己の道を自由に進むことによつて直接に社会的な幸福を増進する。だが全世界的規模において考えれば、これは単に成し遂げられたただ一つの環にすぎない。自然科学者が、自己の本来の使命を自覚することによつて、プロレタリアートとの提携を樹立し、科学が社会の所有に帰し、人類の福祉に直接に結びつく事情の招来に協力する必要があります重大、切迫していくのである。

私が高等学校を卒業して大学に入ったころ、ちょうど大正十五年五月に『マルクス主義』誌上で前掲ジノヴェフの演説を読んだとき、私にはそれが単に思いつきな祝辞演説的言辭位にしか印象されなかつた。自然科学者の地位に対する認識はいまだそこまで進んでいなかつた。問題は自然科学につくか、それとも解放運動につくかの二者択一として立てられた。しかし間もなく自然科学者が自然科学者として持っている社会的使命と社会的力を反省することができるようになった。そして科学者の間に科学の社会的意義と科学者の本分とを自覚せしめるために気なげな倦うまざる困難な障害多き啓蒙を遂行し、社会層としての科学者と階級としてのプロレタリアートとの結合を実現することの必要に目覚めて行つた。

だがこれは決して取つきやすい仕事ではなかつた。後昭和三年の初頭、各大学の教授助教を糾合して『自然科学とマルクス主義』の研究団体を作ることが山宣らによつて計画されつつある様子（『東洋学芸雑誌』第四四卷第

二号の学芸時事に報道された)を知つて心躍つたが実現を見なかつた。昭和四年にプロレタリア科学研究所が創立されたときもこの方面は殆ど顧慮されなかつた。ついで昭和六年にわれわれがソヴェトの友の会(後の日ソ文化協会)を起こしたときも、ロシア・プロレタリアートの事業と、ソヴェト科学との結合の實際をわが国の科学者・技術家に紹介して、科学とプロレタリアートとの提携に対する啓蒙に資しようと試みたが、充分成功を見るにいたらなかつた。更にその翌年唯物論研究会が創立されたとき、著名な自然科学者も知的興味からこれに参加したが、会の性質上哲学的認識論的方面の理論的関心に限られ、科学者層を労働者階級の事業に結合すべき啓蒙と活動は、残された別個の問題となつている。

面白いことに、『弁証法を意識的に自然科学に適用する試みないしこの問題に関する研究』(唯物論全書『自然弁証法』一五二頁)が益々盛ますますとなつて行つたときも、精々自然科学の方法並びに科学理論の内容に反映している社会的階級的人格に注意を向け、またプロレタリア階級の立場を反映した自然科学を成立せしめる問題に注意を向けることはあつたが、しかし、自然科学者の社会的な立場の反省の問題、科学者もまた科学者として自己の社会的本分を持ち、プロレタリアートと共に擁護すべき地盤、戦うべき敵を共有することの自覚の問題は案外に放棄されていゝた。(否、逆に、両者が相共に社会的政治的に闘う問題は、既にプロレタリアートが持つに相応ふさわしい自然科学を成立させるという問題の中なかに含まれていると考え、そういう『統一』が唯物弁証法の精神だとなす哲学が一般化すらしたのである。この哲学がどんな風に展開されていったかは追おいに説明していこう。)そして昭和十一年前後においてファッシズムの風潮に抗して科学精神の擁護が各方面から問題になつたときも(前掲書後篇第三章、田辺元『科学政策の矛盾』、小倉金之助『自然科学者の任務』等)、唯物論者の意識は単に科学的世界観のための知的闘争に限定され、何等かの実践的社会的な活動に發展することはなかつた。例外は医師であつた。彼等は医学という学問の中なかへ弁証法を意識的に適用する試みは問題でなかつた(昭和八年にリフシツ『臨床医学と弁証法的唯物論』

ナウカ社刊というような翻訳書が現われたこともあるにはあるが——なお宮本忍氏等の昭和十年の『唯研』誌上の論文、翌年の同氏著『社会医学』(唯物論全書)。彼等は自己の技術を民衆と結びつけ、医療を社会化するために困難な尊敬すべき努力を払った。昭和五年から後に労農救援会の一部門となつて昭和八年まで継続した無産者診療所の運動を一例として思い出せばよい。問題はこの努力が一部少数の医師の特殊な努力に終つてはならないという点にある。医学そのもの、医師層の全体が、その本質、その使命の上から民衆と結合しなければならぬのだ。このことがすべての医師の理解するところとならねばならないのだ。そのため長い^{なが}執拗^{しつよう}な實際的な啓蒙が必要なのだ。

さて、最初の林氏の論文、すなわち大正十三年に立歸つて始めよう。既に述べた^{ごと}如く、自然科学は科学的理論そのものとしては客観的であつて、階級性を持たず、資本主義的解釈というが^{ごと}如きものを容れえないという意見は、当時の一般的思想であつた。もつとも階級社会においてははすべてのものが何らかの形で階級的な特徴を帯びざるをえないのであつて、自然科学も例外ではない。問題は^{いか}如何なる意味において階級性があるかの点にある。林房雄は自然科学はそれ自身として階級性は持つていないが、その社会的応用において資本家的利潤獲得に利用されていることを指摘している。山宣は『客観的態度を維持せねばならぬ科学者でさえ、当時の社会的事情に左右され、また当人の特殊傾向に誘われて、意識的あるいは無意識的に』(四一頁)当時の支配階級の意向に迎合して、その弁護論の立場から客観的な生きた真理をまげたり、無視したりしていることを特に生物進化論を中心に述べている。このことに、即して、山宣は曲学阿世者流の有産者科学に対して、客観的な全体的事実^{なか}に忠実な理論を無産者の科学と呼んでいるが、それは氏の前掲の所論からも見られる通り、専ら^{もっぱら}『この問題に対する誤り^{なか}、ない認識が、無産者階級解放運動の根本原理に影響すると同時に、いかなる暗黒と圧迫の中にもそれが希望と光明をもちきたす』(四三頁)という意味においてであつた。従つて、無産者の科学という字面からだけ考えると、山宣は一見林房雄のいう『自然科学においては資本主義的解釈なるものはない』という考え方を踏み越えて理論そのものの中に階級性^{なか}が内在す

ることを認めているようだが、しかし決してそうではないのであって、山宣もまた『いつの場合でも普遍的科学知識と、個人的色彩を脱しきれぬ特殊的人生観を切り放して考えるように用心が肝心である。殊に無産者に対して科学の名を濫用して、有産者的世界観を押し売する輩の如きは絶対にポイコットする必要がある』(一二頁)ということによって自然科学の唯一性、その資本主義的解釈からの本来的な独立性を主張しているのである。

この観点は更に社会科学の領域にも拡張^え得る。山宣は、無産者の社会科学は、有産者の『ほおりだした科学的研究方法』(前出)を取り上げて、これを徹底せしめたものだという。社会に対して『正しい判断を与えるものは科学的態度あるのみ。短いけれども自然科学始まってこの方の歴史は、この態度が人間生活の指導方針として正しいことを教えているから』無産者階級の指導者によって採用されることになったのだ、と(八頁)。面白いのはつぎの考え方である。すなわち『指導者は自己の重大な責任上、自己の環境に対し誤り無き判断を下さねばならぬ』から、目的意識的に科学的態度を採用するのであるが、無産者の大衆自身においても、自然科学とその応用を主とする工場の機械や装置のなかで、見るもの、聞くもの、なす事ごとく科学と関係のないものはなく、自然生長的に科学的態度がめばえてくる。この後半は一応再考の余地があるが、自然科学に養われた科学精神に対する信頼の表現として見れば、ドキュメンタ的な興味がある。

森戸氏は前出の講演で、自由なる、偏せざる、とらわれざる、客観的事実に忠実なる、『科学的精神』が、自然研究の範囲においては、教権的支配とのその不屈の闘争の後、資本家支配の社会の確立とともに、公認せられたことを述べ、しかしその科学的精神は社会科学の範囲においては阻害されると述べることによって、真の社会科学の性質がいかなるものであるべきかを指し示している。山宣もこの考え方の流れを汲んでいるのである(ちなみに森戸氏の講演を私は大正十三年の暮、関西学院の講堂で聞いたが、山宣もそのとき女性生殖器の解剖図を背景に『ラジオと産児制限』なる得意の性講演を提げて同じ演壇に立ったのを覚えている)。後に至^{いた}って知ったことであっ

たが、エンゲルスはかかる『科学的精神』（森戸）『科学的態度、科学的研究方法』（山宣）に貫かれた認識こそ唯物論なのであって、唯物論とは本来それ以上のものではないと主張しているのである（『フオイエルバッハ論』第四節四五、六頁その他）

ここにおいて自然科学とプロレタリア科学としてのマルクス主義的社会科学（唯物史観）とは、その科学的精神において、ともに唯物論であるという点において、一の連帯性を持つていのがわかる。両者は双方の側から科学的精神を支え合っているのである。そして一面的なかつ不十分な形態においてではあったが、この科学的精神の特徴を反省し、体系化せんと努力した点において、デカルトおよびベーコン以来の近世理論哲学の没すべからざる功がある。マルクス・エンゲルスが始めて、この精神を全面的な形でせんめい闡明し、弁証法的唯物論として定立したとき、近世哲学はその至いたるべき極致を示したのであった。読者諸君の中なかには意外に思われる向もあると思うが、プロレタリア科学あるいは無産者科学という熟語は、マルクス・エンゲルスおよびレーニン等、マルクス主義の教師達においては見出されないのである。彼等にあつては事象の認識において唯一的な科学的精神を貫徹することが問題であった。恐らく、科学の本質上、それをその階級的特質によつて分類するが如ごときことは、偉大な科学の理論家たる彼等には考え浮ばなかつたのだと私は思う。エンゲルスもレーニンも、労働階級の利益と要求とに真に一致する認識といえ、他ならぬ右の科学的精神に貫かれた客観的な認識こそそれであると宣言している（前掲書九九頁）。われわれがそういうことを知つたのは、ずっと後のことだが、マツハの経験批判論の流を汲むボグダノフのいわゆるプロレタリア科学論に対して、レーニンは答えている——プロレタリア科学というのは、つまりマルクス主義（弁証法的唯物論）のことだと。ボグダノフ者流は、マルクス主義とはつまりプロレタリア科学（プロレタリアートの立場を先まず考えて、その立場で研究される科学）のことだと考えていたのであった。ちょうど、大正十四年二月号の『マルクス主義』には彼ボグダノフの論文『科学と労働階級』が載っている。これは当時同誌の編集に協力してい

た林房雄の好みに依るものと推測されるが、既に同氏訳『経済科学概論』（現在改造文庫中に編入、スヴェルドルフ大学の初期の教科書で当時われわれに非常に新鮮な印象を与えた書）によつて、ボグダノフはわれわれに親しい名であつた。しかし哲學的基礎の貧しかった当時のわがマルクス主義者は、彼の既知の諸論著から、彼の認識論を剔抉しえなかつたのはもちろん、彼が経験批判論的立場を典型的に代表する論客である事情を知る者すら、殆んど無かつたのではないかと思える。

はじめに引用した林房雄の科学の役割とその階級性の論は、若干の偏差はあるが大体においてボグダノフの見解の焼直しであつた。偏差は、やはり、林氏が『自然科学、数学、工業技術学等の科学は、別に階級的だというわけではない』（『学そのものに階級的性質はないが、ただ資本主義制度のもとにおいては、それが利潤の増加の手段となることを記憶すべきである』）と考へ、ただ社会科学にのみ階級性を認める点にある。『大学の教室で教えられる経済学、社会学、歴史、法律学等は、単なる資本主義の弁護であり、私有財産の礼讃であり、労働者監督法であり、利潤搾出学である』、『それを労働者が知らないのをいいことにして、学者先生達が、純正科学だ、科学の自律性だ、科学の超階級性だと叫ぶ』と。然るにボグダノフはプロレタリアートの階級的目的に適應することによつて自然科学は学そのものとしても大いに變化せざるをえないと考へているのである。ところで林氏の考へ方を一步反省を深めて考へて見ると、『科学そのもの』なる概念を許すとすれば、それはとりも直さず、科学的認識の客観性を認めていることなのである。換言すれば、科学は単にある社会や階級の必要を充たすためのものというだけに止らず、更に進んで、その必要に従つて処理せんとする対象の法則や性質を正しくいい表わしているか否か、客観的事実に忠実であるか否かということ、すなわち、科学の眞理性を科学の根底に認めていることなのである。換言すれば、科学の、それを必要とする社会や階級の意図目的に即した方面と區別して、客観的な事実の性質、法則に即した方面（その意味で超階級的にそれ自身として考へられる方面）を認めていることなのである。だが、社会科学にはそう

いう後の方面が全くないのであろうか。或個人、或階級、或学派が、社会的事実をどういう方面から、どういう風に、説明し解釈しようと、説明され解釈される当の事実そのものに変わりがあるはずはない。この客観的な歴史的社会的事実を客観的必然的な事実としていい表わすところの社会科学、従って客観的な、真理性を持った、その意味で『学そのもの』としては超階級的な、社会科学が存立しえないのであろうか。林氏自身の口吻くつふんを真似ていえば、学そのものとしては別に階級性がある訳ではないが、ただ社会的に應用されて労働階級解放の手段となる——といったような、そうした社会科学はありえないのであろうか。しかし、マルクス主義こそまさにそうした科学である。普通、労働者階級解放のための科学という意味で、労働者科学、プロレタリア科学ということがいわれているが、そういうわれ得るえものは、まさにこのマルクス主義でなければならぬ、と。これがエンゲルス、レーニンの見解であり、森戸氏や山宣の前記の見解もこの線に沿うている。(林氏の引用文中『科学的』なる言葉の意味は一寸ちよつとある特殊な匂いを持っているが、いまのところ分析せずに置こう。)

この科学的精神の革新的威力に対する反動は、自然認識の領域においても、この精神を破壊し、客観的事実の発展のありのままの認識に対して人びとの眼を阻止し、現代社会の偏見と独断、虚偽と迷妄に囚われた処世観や歴史観と妥協せしめる方向に動いているのであって、このことは、山宣も生物学の範囲で関説している。マルクス主義が一般にブルジョア科学といっているところのものは、外ならぬブルジョア社会またはその社会における個人や集団の地位の弁証論のことなのであって、本来科学の名には価せぬもの、ただ科学(しかも『自由な、公平な、不偏不党な科学』の名のもとに)の名を乱用して、人びとの意識にブルジョア社会が人類の合理的な生存形態であることを信ぜしめんとする『御用学問』に外ならない。一旦御用学問の立場に立てば、もはや事実を事実として通用させることはできなくなる。従って事実を事実として捉とらえる科学を、そのままに通用させることはできなくなる。それは超事実的な超自然的な観念や宗教的信仰と淫して、科学に対立するようになる。しかしながら、プロレタリ

アートの解放の科学は弁護論でなく、迎合的曲説であつてはならない。それは経験される現実の事実を、プロレタリアートの立場から見てその面から解釈するのではなく、その事実を事実として、客観的に把握するものでなければならぬ。それは単に科学としての真価において通用せしめられた科学そのものであつて、それ以上でも以下でもない。一般に科学が人びとの必要に添い得るか否かは、専ら処理さるべき対象の客観的な運動や性質をありのままに捉えているか否かに依存する。問題は科学の研究家がその本分を尽すこと、すなわち科学の唯物論的な精神を継承し『何事をも顧慮するところなく何物にも囚われずに』それを貫徹することにある。科学がこの方向に『進めば進むほど労働者の利益と要求とに一致するようになる』ことをエンゲルスは指摘している（『フォイエルバッハ論』九九頁）。だがこの方向における考え方は、当時はこれほどまでに徹底して理解されていた訳ではなかった。実はその徹底化の道程において別の思想影響が侵入してきたのである。

ところで林氏の社会科学の階級性の考察を見ると、同氏は社会科学の階級性の根柢を、各階級が自分の必要と目的とに添うように科学を鍛え上げるといふことの中に求めている。（従つて、一方の階級のための科学は、他方の階級の目的には使用しえない）。しかしこの林氏の考え方を徹底させれば、自然科学にもまた『学そのものとしての』階級性を認めない理由がないのである。資本家階級の必要に従つて資本主義に適應せる自然科学と、労働階級の必要に従つて社会主義に適應する自然科学とは、『学そのものとして』も相違せざるをえないであろう。一方の階級のための科学は他方の階級の目的には使用しえないということは、自然科学にだつて当てはまらないことはなからう。『今日の天文学、数学等の「ブルジョア性」に関する観念は、決して旧式マルクス主義者が考えていたほど滑稽な観念ではない』——これが前記ボグダノフの科学論であつた。彼によれば、科学とは『経験の組織』すなわち経験を整理し、それに一定の形を与え、矛盾を除き、組合わせ統一したものである。人間は経験を組織するのみだけでなく、人間自身をも同じ仕方方で組織する。そして科学とは社会的労働を組織する手段であつて、そこに

科学と社会生活（労働）との相互関係があり、そこに『科学の生活に対する常住不変の現実的、「客観的」意義がある。』労働の組織が、階級支配の形で行われている社会では、生産を組織すべき精密な科学はただ支配階級の特権となり、この知識の独占によってその支配的地位は保証されている。一般民衆には知識の断片が「通俗化」されるにすぎない。ブルジョア社会についていえば、特権化はつぎのような方法で保たれている。

『第一、科学は商品の如く売られる。大学や専門学校の高等科学は高価だから、一般ブルジョアジーの子弟でないとそれが買えない。第二、科学研究法が科学を民衆から遮断している。科学は極端に煩瑣化され、それに接近しようとも、数多の特殊な附加物のためにむずかしくなっているので、労働人民の大多数の手はこれに届かない。異様な抽象形態、不要な「専門的」表現、余計な穿鑿、あるいはまた資料を山と積みあげることによって、科学の中枢観念と体系はわかり難いものにされている。この点は既に民主主義的学者（例えば数学におけるペリー）の等しく認めているところで、その不可を指摘し、科学の形式を単純化して、一般にひろく接触されるように努力している。……これは（科学が）資本主義の矛盾せる無政府的關係に同化されて、十分に組織されていないために起こる。』

かく労働の組織の手段から階級支配の手段となった科学は、更に新興階級の勢力を組織して社会闘争における勝利を得させる手段ともなる。だが、『プロレタリアートはプロレタリア科学を必要とする。すなわちその階級の見地から理解され、解決された科学、その階級的任務の遂行を指導し得る科学、その諸勢力を闘争と勝利のために、その社会的理想の実現のために組織する科学を必要とする。』

プロレタリア科学の特質はつぎのようである——(1)労働する階級、生産する階級に立場を変え、集团的労働を中心として見ることによって、社会生活の一切が変わって見え、旧位置から感知できなかった事物の力や現象の原因が明かとなり、経験の組織方法が全然変化する。(2)社会経済（人間、事物、観念）を計画的統一的に組織

するために、科学のあらゆる部門が全一的調和的に組織される。(3)集团的に追求され「社会化」されることによつて労働民衆全体の力となる(ブルジョア科学の「民衆化」は、個人を社会的上層へのぼらせるに役立つのみであり、集团的精神を推し進めるものではない)。

以上のボグダノフの見解の根底を要約すれば、『階級の見地の変化とは、旧経験を新しく処理する新論理にある』という彼の得意の「組織学」であり、マツハ、否、更に朔つてはヒュームに発する批判的経験論の精神である。従つて、プロレタリアの立場から、プロレタリアの眼をもつて、すなわち経験組織の新しい論理をもつて処理するために、『学生が科学的問題の共同論議において知的思考に慣れた教師でも考え及ばないような正確有効な証明をなし得ることが容易に起るようになってくる』——というようなことをボグダノフは言っている。つまりマルクス主義は、このプロレタリア科学である。プロレタリアートの見地から処理された科学のことである。

この論文のことは、『唯物論と経験批判論』の附録のネフスキの論文にも言及されているが、レーニンはその書で、科学的真理を『實際的必要への適応という合目的性に即した経験の組織形態』に帰着せしめることに終始一貫して反対している。レーニンの見解に従えば科学的真理とは、思维の客観的實在への適応であり、その反映である。科学の發展史は、根本的には、人類の思维が益々全面的に客観的實在へ適合して行く過程の表現に外ならない。ボグダノフは、科学が客観的対象へ適合し、それを反映することによつて与えられる規定を、プロレタリアートの階級的目的への適応によつて与えられるのだという風に意味付けている。彼は、分立した専門分科の整調と統一化は、その階級が無秩序でなく組織的計画的生産を遂行する組織的階級であるという本性に適合して行われるという。しかし科学的事実の蓄積、諸事象の相互関係の闡明が行われるに従つて、科学が調和的体系化の方向をとるのは、人類知識の普遍的な傾向にすぎない。彼は言語学等において労働の組織化または集团的労働のための必要から生れたという説明が奏効した例を挙げているが、この『労働』説をプロレタリアの見方に帰することは事実に戻している。

十九世紀の資本主義が産んだ新世界開発によって、未開民族の生活形態が文明人の目に暴露されたとき、ノアレやその他の学者によって労働説は生れたのであって、ブルジョアの立場からプロレタリアの立場へ見方を移すことによって生れた解釈ではない。プロレタリアートは原始民族ではない。いつの場合でも科学の発展と改革は、思惟が最終的事実に益々正確に適応して行くことによって起るのだが、ボグダノフの目的には、その発展と改革がプロレタリアの合目的性の立場から行われるという風に映るのであるブルジョアの合目的性に代って、今後の科学を形成し組織する原理は、プロレタリアの合目的性である、と。

この合目的性の論は、新しくプロレタリアートの意識に目覚め、一切をその立場からとらえようとはし始める人びとを最初にとらえることのできる最も安易な考え方である。科学の本質が実際的必要性や階級的解釈や階級的合目的性や階級意識への照応性等の側面においてのみ考察されると、勢い真理性すなわち客観的实在への適応性の側面が忘却され、更に、客観的实在それ自体の存立が無視されるにいたるのは自然な道行きである。ボグダノフの認識論上の先達、マツハ、さらにさかのぼってはヒュームは、すでに各人の経験と独立な客観的实在（従ってまたそういう实在それ自身に見る法則——因果性、必然性）を無視若しくは否定してしまっている。

この人達は、すべて科学的真理をば、経験事項を経験（実際、プラグマテイア）的要求に従う原理若しくは論理によつて系統立てたものと見た。私が中学のころ石原博士の著書で始めて接したマツハの思惟経済の原理は、人類の生存闘争の必要に従つて、経験事実（感覺要素）を最少の精力で頭に収めることのできる次第に最も簡単な関係に組織することの中に科学の発展を見るものであった。ボグダノフは人類の必要の代りに、階級的必要を置いただけに過ぎぬ。思惟経済の代りに、全体的統一の論理を置いたに過ぎぬ。吾人の認識の発展と改革は、他の動機や理由から行われるように映ずる場合でも、その根底には客観的实在の真相への一層の接近という事実が横わっているのである。たとえある意味において何かの動機が実際に認識に変革をもたらしたといえる場合でも、それは思惟を

在の真相へ一層接近せしめる蝶番（契機）となつたのにすぎないのであつて、實際の变革の根底にはやはりこの接近の事実が横わる。認識の発展は認識の改造という点にあるのでなく、客観への接近という点に成立つのだ。この接近の内在しないような認識の変化は、発展でなくて、客観的な実在からの遊離であり、観念化であり、空想化である。

しかしながら、かく解説された限り、知識は経験生活が変ると共に変わるわけであるから、多かれ少かれ各人の経験する立場に左右されず、主観的合目的性から独立した客観的關係、事物それ自身の必然的な關係が意識されるところでは、『組織された経験』説はその効を失う訳である。林氏が自然科学については学そのものとしては階級性から独立しているといったのも、自然科学の諸法則は各人の立場によつて変りはしない、誰にとつても通用するという普通の素朴な事実によつたのであろう。カントやその現代的亜流は、そうした普遍妥当な（という意味で客観的な）それ自身において必然的な科学的知識の成立の根柢を、人間の知識の中なかには経験に依存しない頭腦のそれ自身の働き、経験的原理から独立した法則、先験的原理があるという点に求めている。後、岡邦雄がレーニンの『唯物論と経験批判論』を批評して自然認識の領域で弁証法的唯物論を拒否し、自然科学の方法論としては認識論的観念論が正しく、社会科学の方法論としては弁証法的唯物論が正しいと主張したのも、恐らくは同氏が弁証法的唯物論をプロレタリア的立場からの闡明せんめいの意に解し、自然科学のこの弁証法的唯物論からの独立性、すなわち超階級性を、新カント派の先験主義的精神で明かにしようとするのが眼目だったのであろう。（因みに石原博士は前出の通り、そのころマッハの立場においてマッハを克服し、自然科学的認識の唯一性を基礎付けようと試みておられるが、必ずしも成功していない。）

しかしながら、唯物論は、客観的実在の存立、換言すれば、自然並びに社会はわれわれの認識や処理とは独立にそれ自身の法則で動いていること、このことの承認によつて、マッハからボグダノフまでの経験批判主義を克服す

る。自然および社会にそれ自身の法則があるならば、われわれは、われわれ自身の合目的性、必要性にそう経験の組織化の見地を越えて、客観的なその法則を追求しなければならない。人がそれぞれ自分の立場から、経験を知識に組織し、人間労働や人間活動を一定の統一に組織するのだと見えることも、その実は自らの思惟や行為の立場が、自然や社会の客観的なそれ自身の運動に適応しつつそれを表現して行く過程にすぎないのである——その過程の逆立ちした反映にすぎないのである。

私自身についていえば、このころ前記の如く、唯物論を追い、哲学上の認識説に対しては不安と懐疑を覚えていたが、もちろんそれらの問題を解決すべき能力は持っていなかった。客観的な実在（物それ自体）の存立とその認識可能性との問題は当時私の頭痛の種であった。しかし、この問題をいかにして肯定し、いかにしてあらゆる認識にその観点を貫徹するかを会得しない限り、マツハ説や新カント説の公然たるまた隠された様ざまな形態の影響を、離脱することは決してできないのであって、その後われわれはこのことを思い知らされねばならない幾多の経験をもった。（例えば——他の例は問わずとするも——大正十五年夏翻訳が現われて以来昭和四年ごろまで一時は唯物論の典拠のように見られたブハーリンの『唯物史観』におけるボグダノフ主義を想い出して見よう。）

三

大正十四年はわが国においてマルクス主義の哲学的基礎の研究がはじめて日程に上った年であった。その前年河上肇博士は唯物史観を説明するために、その認識論的基礎として公然とマツハ哲学を導入した。これは直接的には石原純博士の物理学的方法論に関する論文に影響されたのであった。そしてマツハの観点から、歴史行程それ自体における因果の関係、人類社会それ自身としての必然的な発展法則という『旧式な』観念を排除し、唯物史観とは『ただ諸々の社会現象の間における相関的な関係を物質的生産力を中心として統一し整理して見せたもの』であって、

もしそれを歴史の客観的必然法則の認識であるとすればかえって歴史的事実と一致しないと考えた。もちろん、すでにそのときにはエンゲルス『空想から科学へ』もプレハノフ『マルクス主義の根本問題』も翻訳されており（前者には博士自身の部分訳もあり、堺利彦の全訳もあった。後者の翻訳は『主として河上肇先生のお勧め』よつたと訳者恒藤氏は述べている。）また直接他の原典を自由に読みえた博士が、唯物史観の哲学的基礎について創始者自身の認識論的見解を知っていたつてよさそうに思えるが、しかしそれらを意識的に読みとることをせず、たまたま哲学的概念の処理が問題となるに及んで、唯物論とは別なマツハ哲学に頼ったということは、認識論的問題において欠くるところのあった当時の一般の傾向の一つの現われでもあった。とはいえ、当時の新鋭のマルクス学徒達は、すでにこうした問題に確固たる態度を持つることを知っていたのである。例えば、学連の俊逸の一人是枝恭二氏は十四年一月、二月両号の『マルクス主義』に、『歴史的必然の概念に就て』なる努力的な克明な論文を寄せて、河上博士を駁撃し歴史の必然的行程、歴史の客観的合法則性を擁護した。克明な論証の進め方には、まだ学生風なただどしさはあつても、努力的で充分に尊敬に価するものであり、当時まだ翻訳のなかつたブハーリンの『史的唯物論の理論』、クノーの『マルクスの歴史、社会、国家学説』、エンゲルスの『反デューリング論』、『フォイエルバッハ論』等を拠点として縦横に論じているあたり、そのころの新進マルクス学徒の勤勉振りが伺われる。ついで三月号にはその少し前からドイツ仕込の新知識をもつと、一種独特な調子の論文を寄稿し始めていた福本和夫氏が、既出のごとく『経験批判主義の批判』を書いて、河上博士に対する批判をマツハ主義の認識論そのものの批判にまで及ぼしている。その同じころ（二月号）に前記ボグダノフの論文が載っているのは、一種の皮肉でもあるが、しかし階級的合目的な経験組織の説の中にマツハ主義を見抜くほどの見識ははまだ一般的には養われておらず、ボグダノフ等のマツハ主義を詳細に批判したレーニンの『唯物論と経験批判論』はまだ知られていなかったのだから、その種のプロレタリア科学論が傾聴されたとしても異とするには当たらないだろう。すでに述べたごとく、レーニンのこ

の大著に対するデボーリンの紹介論文の独訳は前年に出ているが、まだこのころには誰も読んでいないらしい。しかし、やがてこの年の終りには二種の翻訳が出た。これら一連の論文や翻訳と並んで、同誌四月号にはマルクス主義哲学の果すべき諸任務を指示したレーニンの重要な論文『戦闘的唯物論の意義について』が『マルクス主義の旗の下に』という標題で訳載されている。更に一月号から五月号にわたって佐野文夫氏の『フオイエルバッハ論』の翻訳が連載され、続いてこれは単行本となった。最後に大正十四年はいわゆる福本イズムの理論的基礎が一通り展開され、つぎの二年間における華かな覇権を準備した年であった。いまわれわれの問題に関係のある限りでいえば、その成果は『唯物史観と中間派史観』、『社会の構成並びに変革の過程』の二著について見ることができる。

以上の文献に加えて、十四年末から十五年始めにかけて訳出され、ついで『レーニンの弁証法』（十五年三月、河上肇編纂マルキシズム叢書第一編）にまとめられた諸論文、特に後編のレーニン遺稿『弁証法に関する断片』（現在『弁証法の問題に寄せて』として『哲学ノート』や『唯物論と経験批判論』に収録）とそれに対するデボーリンの解説論文とを挙げるならば、十五年八月既出のデボーリン『弁証法的唯物論と自然科学』が訳出されるまでの主要邦語文献の目録が一通り揃ったことになる。

河上博士が因果律を否定したのは、氏が『原因と結果とは個々の場合をそれだけとり出して見た場合にのみ通用する観念で、われわれが個々の場合を世界全体との関連において観察しさえすれば、両者の区別は無くなり、普遍的な交互作用の中なかに解消し、原因と結果とは常に相互の地位を代え、いまここで結果だったものが、やがてかきこでは原因となり、またその逆が行われるのが看取される』（『空想から科学へ』）ということを忘れたためで、一つの因果法則が必ずしも普遍的に適用されえないということから、直ちにその否定を結論し、社会諸現象間の関係はただ諸要因を一定の視角から整頓した相関関係（共変関係）の記載図としてのみ提示しえるとなしたのであった。これに対する是枝、福本両氏の批判は極めて著しい対照をなしている。是枝氏は、読者の眼前に現実の歴史の進行

を拉しきたり、その歴史の上に行われている法則、因果的に結びつけられた現象間の相互関係を一貫せる社会それ自身の弁証法的進合法則、それらの法則が一定段階においてはたらく特殊の形態の認識を強調し続けている。これに対して福本氏は、徹頭徹尾哲学的方法論的概念の判別に特色を示していた。ヘーゲルの『小論理学』を引用しつつ、因果関係の観点は一層全面的な交互作用の観点にまで高めらるべきであり、諸現象間の交互作用における決定的要因は何であるかという風に問題を提出すべきことを指摘し、また博士が一面的な因果関係の視点『を排斥すると同時にやすやすとその反対極として考えられている相関関係に転移せられるところに、非弁証法的思考の特質を遺憾なく發揮せられる』のを難じ、弁証法的思考方法を高調するあたりは、蓋し福本氏の独壇場であった。客観的な現実的な対象の実証的分析という唯物論の眼目は最初から忘れられていたが、実はそれを超越してしまっていたゆえにこそ、同氏がわれわれのもてあましていた諸観念を図式的直観的な方法論の庖丁で手際よく料理して行った小気味よさの大きな魅力が読者をひきつけた。いまこの概観では福本イズムそのものを論究している訳にはゆかないが、唯物史観に有産者社会の全面的な批判という課題性を付与し、更にその批判をプロレタリアートの立場から遂行するについての方法論を提示し、かつ自説を現前のわが無産者階級運動が当面せる必要に應ずるためのものと称して提出したことは、わが左翼思想史上に凱旋行列をもたらした理論構成上の秘密であった。これは自他の立場を弁証し、グループ意識を結晶せしめる上にあずかって大いに力があつた。そしてまたたくうちに左翼の公用語となり、福本氏独特の論理と用語法とによらなければ話が通じなくなつてしまった。その後になつて是枝氏が再び河上博士に応酬したときには（昭和二年夏）、福本イズムの忠実な騎士としての資格においてであつた。

いうまでもなく、ここで問題となるのは、自然科学についてであるが、上掲の『経験批判主義の批判』にはつきのような問題提起が見られる。

『無産者科学は、やがてはまた自然科学の領域において、その有産者的認識様式を批判によりてアウフヘー

ベン（揚棄）しなければならぬものであるから、今ここに、自然科学における最近の認識論上の発達に対して一つの批判を試み、もっと一般にその有産者的地平線の揚棄への機縁を喚起することは、無産者的科学発展の過程において重大の意義あるものといわなければなるまい。』

傍点は福本氏自身の付したもので、その意味は同氏がマルクスのとり上げた課題をつぎのように表象し、自らをその課題の継続者に擬したことから理解できる——すなわちヘーゲルの問題は自然と人間の思考とであった。マルクスは問題を歴史的社会的現実性に転向し制限し、しかもその問題の解決を有産者社会の批判に求めることによつて、ヘーゲルの闡明せんめいした弁証法に更に深い形成を与え、より高い特質を付与した。それによつて自然認識には存しない弁証法の決定的規定をえた。主体と客体、理論と実行との真实的統一、思考の変化の基礎としての社会的関係の歴史的变化等がそれだ、と氏はいう。要するに氏は、マルクスの真の課題は有産者社会の全面的批判にあり、その一環として有産者的現実の規定された認識様式や意識形態を批判する点にありと見、自然の認識としての自然科学の問題を転向して、自然科学における有産者的認識様式の批判『揚棄』に問題を制限した訳なのである。揚棄というのは氏の創案になる訳語で、現在でも止揚しやうという代りに時どきこの訳語が用いられている。福本氏の問題提起——いわばマルクスの方法は、氏のドイツ留学みやげ土産で、その当時相当反響のあつたコルシュやルカチ一派の新説に基くものであつた。この立場からカール・コルシュの如ごときは、自然科学をそれ自身として研究し、自然法則を発見するようなことは問題とならぬ、マルクスの課題性の立場からはただ自然科学の中へ浸潤なましている有産者的影響を暴露し克服することのみが問題であると述べている（『社会科学』唯物史観研究号大正十五年九月）。ゲオルグ・ルカチの説は福本氏の説とともに、現在ではやや不当に評価されている嫌がないでもない。普通これらの人びとは簡単にエンゲルスに反対して自然の弁証法を否定したといわれているが、そのことは漫然と考えられてはならぬ。福本氏もマルクスの弁証法が社会関係の弁証法であることを強調しつつ、『かくいうは「問題の転向」の視角よりし

てであります。もちろん自然並びに思考の弁証法が唯物弁証法から除外されているという意味では断じてならないのであります』と断っている。コルシユの言葉からも考え合すことができる通り、彼等は、ヘーゲルの体系化した弁証法的連関が自然の運動なかの中に体现している（エンゲルスの指摘したように）ことを必しも否定している訳ではなからう。そういう否定を彼等の言説から導出することはできない。しかし彼等は個々の科学部門をそれ自身として研究し、それぞれの分野で客観的な弁証法をせんめい闡明するというような純科学的な仕事は、マルクスの課題すなわち有産者社会の批判の課題（この批判の主体は無産者階級であるという建前から、この課題は同時にプロレタリア的課題でもある）の外にあると考え、弁証法をそうした純科学的研究の方法として説明することは、マルクスの課題性、マルクスの弁証法の特質を滅却する（従って有産者的歪曲だ）——と考えたのであった。マルクスの唯物史観こそ歴史の客観的純科学的認識たる点にその革命的意義を保有しているのだという『旧式の』考え方は、この『マルクス的方法』の前に漸次影を薄めてしまった。そして右の経験批判論の批判においても、自然および歴史それ自身なかの中に因果関係や必然法則が動いていることは既定のこと（スザンタンデュ）若しくはマルクスの課題以前の事実として取扱われた。そして専らもっぱらそれが資本主義の進展期の特有な意識形態たる分裂的個々の研究を、理論付けたものとして評価することに視点が置かれ、自然科学に浸透せるこの有産者意識を、資本主義没落期における特有な意識形態たる統一的な研究、全体性的考察の意識（それは本質的に資本主義に対する批判的階級たるプロレタリアーの意識である）と対比しつつ打破するという風に課題を立てたのであった。

ついでのことには福本氏の『マルクスの弁証法』すなわち無産者階級が有産者社会の批判者たり、かつ自己解放が人類解放たりえるその特殊の地位からして持つにいたる社会認識の方法の根本規定を示すと、

「無産者階級は、

第一に、事物を媒介性において観察しうべくまたしないではいられない。

第二に、事物をその生成において。

第三に、全体性において観察しうべくまた、しないではいられない。ゆえにこの階級にとつては、その自己認識は、同時に全社会の客観的認識たりうるしました、たらねばならぬ。

第四に、かかる認識に対して、この階級は、認識の主体たると同時に客体たりうべく、また、たらずにはいられない。かの観念論者ヘーゲルによつて企てられたる主客統一（思考と存在、理論と実行、との統一）の試みは、この階級の出現によつて、はじめて、完成（その合理的形態にまで）せられ実現せらるる。

この捕捉し難い言葉を解説するのは一苦労だが、当面の問題に必要な限りは追おいに解剖することにしよう。

およそ課題が明確にたてられるところには、意識的な研究が起るはずだが、『自然科学における有産者的認識様式の批判』はまだまだ表立つては人びとの関心を集めるにいたらなかつたようである。唯物論的世界観のためのマルクス主義者の闘争の諸任務を論じた上掲レーニンの論文『戦闘的唯物論の意義』は、その任務の一つとして唯物論的傾向の自然科学者との提携をうちたてることを提唱している。実をいえば、私自身は当時そういう自然科学者の卵だったのである。それでこの論文からは相当感銘を受けた。レーニンはその際つぎのような注意を与えている。それは、現代の自然科学が急激な廻転を通過しつつあるために、絶えず反動哲学の学派がそこから生れること、十九世紀の末葉以来の自然科学上の大変革がいつもブルジョア的思想家に利用されていること、従つて確固たる哲學的基礎がなければ、どんな自然科学を持つてきても、どんな唯物論を持つてきても、ブルジョア思想の影響とブルジョア世界観の復興に対抗できない。この闘争に打勝うちかつには自然科学者もまた弁証法的唯物論者にならねばならぬということである。現代の自然科学者は、唯物論的に理解されたヘーゲル弁証法なの中に、今日の自然科学上の革命が提出し、かつブルジョアの流行の崇拜者共が反動的学派に引込んだところの哲學問題に対する解決を発見するであろう。そしてこの弁証法を軽蔑する限り、自然科学は理論上の定礎を失つて、その発展を阻止されるにいたるだ

ろう。レーニンはかく述べつつ、唯物論的に理解された弁証法について、『もし自然科学者がそれを求めるならば、かつわれわれマルクス主義者が彼等を援助する方法を知るならば』と註している。確かに私はそれを求めていたのであった。自然科学上の理論提立にオリエンテーションを与えるような哲学的認識論的立脚地を求めて、弁証法というものに、好奇心を向けつつあったのだ。しかし、弁証法的唯物論者の側からの援助はどうであったか。前述のような一連の翻訳が提供された以上には多く出でなかつた。だが、自然科学の学生にとつては、マルクス主義の哲学的文献に自然科学のことが語られているということ自体が、大いなる吸引力であつた。その意味では『フオイエルバッハ論』は殊に素晴しかつたが、正直なところ高等学校の理科の一生徒にとつてはこの本は少々固すぎる胡桃であつた。含蓄が深すぎた。僅僅きんぎん数行に深刻な問題を指摘して見せるあの快筆には歯が立たなかつた。従つて当分は弁証法も唯物論もエンゲルスの説明する意味では咀嚼そしゃくしきれなかつた。『自然科学の諸成果を弁証法的に、すなわちそれ自身の相互連結の意味において把握する』とか、『自然の實在的連結を発見することによつて人為的に考え出された連結を葬り去ることが必要である。』といった言葉は、本能的に唯物論に傾向していた私に強く訴えたが、それにも増して私にはエンゲルスがあまりにも素朴な實在論者であるらしいことが不安であつた。マツハの経験批判論や新カント派の批判哲学の批判的精神をエンゲルスは一概に虚妄として無視してはなかつた。彼は独断的に自然科学に依拠して觀念論に衝突たいつしているが、批判的な認識論に対してはそうした事が無意味であるのを一向お構いなしに思っているのではなかつたか。自然科学自身が批判的に認識論的に反省されなければならぬことを忘れてはいないだろうか。こうした疑問を感じることによつて、私自身は、自ら本能的な反撥を感じていた流行哲学（いわゆる『科学概論』風の哲学もこめて）の影響に無意識のうちにとらわれていることを示したのであつた。そして、カントやヒュームの思想は、自然科学の發展や実地経験が多年にわたり事実上反駁しているところであつて、そのことを看取せず、何等かの形でそれを復活させようという試みがあるとすれば、それは学問上からは一つ

の退歩である、という意味のエンゲルスの言葉は真面目な学問的な批判ではなくただ彼の機智を示すに過ぎないように思われた。全くレーニンの指摘した如く『確固たる哲学的基礎がなければ』——すなわち首尾一貫した唯物論たる弁証法的唯物論がなければ——唯物論的傾向の自然科学者もブルジョアの流行哲学の影響を克服することは決してできない。

こうして未だエンゲルスから必要な援助を汲み出しえる程成長していなかった私は、デボーリンの『戦闘的唯物論』（物理学的認識論を扱っているので、近づきやすかった）に、だが特にエンゲルスよりも更にマルクスの精神を体得せる『マルクスのマルクス主義者』に援助を求めることになった。つまり福本イズムの亜流末輩の一人となつたのである。福本氏が、自然それ自身の必然的連関を闡明することによって従来の哲学上の諸観念を克服するというエンゲルスの『独断的』行き方を転向して、自然認識の有産者の様式を批判し無産者の認識様式の水準にまで揚棄することによって自然の真実の認識にいたる行き方を高唱したとき、私の『批判的精神』は全く満足を覚えた。

右のような自然科学問題の関心が一般的に漸次培われつつあったことは、翌大正十五年の春私が高等学校を卒業したころ、京大社会科学研究会の新生歓迎のテーブル・スピーチで工学部のM君が、自然科学者といえども階級対立の外にあるものではないと弁じたことによつても知れる。しかしながら、『マルクス的方法』によつて自然科学批判を遂行しようという問題はまだまだどこからも提起されていない。学連の学生達も、まだ既述『レーニンの弁証法』や『空想から科学へ』、それにブハーリン『史的唯物論の理論』の独訳、エンゲルス『反デューリング論』の原書等をひもといて、弁証法の個々の法則が自然科学的事例によつて説明されているのに大いに興味を覚えながら、運動および発展の見地、相互依存的関連、内的矛盾、生成と消滅、対立物の統一、量の質への転化、否定の否定等々の考え方を会得しつつあった程度であった。こういう風に例証的に会得することは、弁証法的見方への最も手早い入門であった。弁証法の個々の法則をそれ自身としてこんな風に理解することはルカチ・福本的な立場からはどうか

と思われるのであるが、しかしまだ『マルクスの弁証法』の精神がわれわれをさらってしまっていないときであった。とはいえ、自然過程の弁証法性というものが、まだまだマルクス主義者の一般的な観念になっていなかったことはつぎのような挿話からも伺うことができる。その年の夏、東大某助教授——Y氏だったか——が京大の研究会で話をしたが、レーニンの覚書に、世界の発展を弁証法的にすなわち内的展開において『自己運動』において認識するための条件は、それを対立物の統一において見ることだとの関連して、なるほど社会は自己運動をするが、風がカーテンを動かすのは自己運動ではない、自然の運動は自己運動だろうか、自然に弁証法が行われているだろうか、という疑問を提出した。『M君もそれには反対している。僕も反対だ。君はどう思うか』とそのことを知らせてくれたある友人の手紙は書いていた。反対論者達のいろいろな主張はもう忘れてしまったが、坂をころがる石塊を例にとったりして、力学的運動を対立物の統一として示すべく智慧をしぼったものであったかに記憶する。

そのころ私を悩ました哲学問題は、なおやはり、例の客観的実在を証明する問題であり、唯物論を独断論から解放して批判的に仕上げる問題であった。この問題はその後も随分私を悩ましたのであったが、さしあたってのころデボーリンの『戦闘的唯物論者レーニン』から教えられて『唯物論と唯心論は二つの階級イデオロギーの表現形態である。唯心論は生産の実践から分離した階級のそれである。唯物論は生産階級、すなわちその本質上実践的階級たるものの世界観の表現である』という説明に承服した。否、この問題の本来的な解決が当時の私にはあまりに困難だったので、そうした見解に妥協するより外解決の道がなかったのである。観念論的認識論に対していわれた『空想から科学へ』の英語版序文の有名な一句、『かかる理論は、確かに単なる論証の方法によってはなかなか打破りえないものである。しかしながら人間は論証する以前に実践していた』うんぬんは私を不安にした。われわれの感官が知覚している諸印象の外側に物自体があつてわれわれはそれを認識するのであるということを論証しえないとすればどうなるだろうか。論証しえないが実践によって知るとは何のことか。単なる感覚的現実性をそのまま知

覚の外に横わる実在と見る事か——だが、そういう素朴な独断を認めえるか。それとも感覺的確實性を依拠点として、何らかの方法で物自体の存在とその認識可能性を論証することをいうのであろうか。すなわち『論証のみでは』といったのは概念の先験的な演繹えんえきによっては不可能であることをいつているのに過ぎず、もちろん経験的確實性に基いて物自体を証明し、かつ觀念論や不可知論の支持しえないことを論証できなければならぬということをおぼれているのではあるまいか。だが、経験的感覺的確實性に依拠して客観的な物自体を立証しえるだろうか。そうしえなかつたがゆえにこそ、カント主義やマツハ主義の主張が生れたのではなかつたか。ところで、これはその後だんだんに会得して行つたことだが、弁証法的唯物論の認識論こそ、人間の思惟は経験的確實性に基いて物自体、客観的実在をせんめい闡明しつつかある、ということの論証だったのである。換言すれば、われわれの思惟がこれまで認識しきつた成果に基いて、われわれは何を認識しつつかあるのかということ（つまりわれわれの思惟が認識しつつかあるのは思惟から独立した存在自体であること）を論証できるのである。かかる論証の展開自体が弁証法的唯物論の認識理論である。その展開がなされない限り、福本イズム流に『問題を転向』しなければ結着がつかなくなるのはやむをえない。すなわち、客観的実在は理論的に論証しえるものではなく、従つてそれを認める認めないはその人の社会的立場、実践上の態度によつてきまつてくるのであつて、その人がどんな哲学を持つかは、その人の立場できまる。という風に、『論証するよりも前に実践する階級——プロレタリアートがそういう階級と見なされた訳だ——は唯物論の立場をとる。で僕もまたプロレタリアートの立場に立つものとして唯物論をとるのである。物が客観的に実在することを主張するのである。で、私は何か偉大な発見をして偉くなつたような気がした。

ここで充分注意深い読者は、さきに空想と科学との相違について述べたことを想いだされるだろう。科学が、すなわち、唯物論的な認識方法が、歴史の客観的な発展を、従つて無産者階級の客観的な地位と特質とを明かにしたと。問題は転倒された。無産者階級の認識が実は唯物論すなわち真正の科学だったのである。こういう背景の下に、

私が、なぜプロレタリアートは弁証法という認識方法をとるのであるかという風に問題を起こしたとしても、格別不思議ではない。『かの唯物論的に理解されたヘーゲルの弁証法』についてレーニンは『戦闘的唯物論の意義』のなかでこういった、『この弁証法はマルクスが「資本論」並びに歴史的的政治的に適用して頗る成功しているところであって』歴史の進行はその成果の正しさを証明する、と、——そしてこの模範に従って『吾人』は自然科学者もまた唯物論的弁証法をその研究に応用しえるように彼等を援助することを知らねばならぬともいったが、外ならぬこの唯物論的弁証法こそは、いまや判明したところでは、プロレタリアートの社会的歴史的地位の特質に照応し適応して形成さるるにいたった認識方法だったのである。そういうことを、私は福本氏の著書『社会の構成並びに変革の過程』や論文『欧州における無産階級政党問題』で教えられた。そして実際に福本氏の天才は——われわれは氏を偉大な画期的天才と想っていたのであったが——無産者階級の認識としての弁証法の簡潔な定式を見せてくれたのであった（前記四ヶ条を参照）。

無産階級の立場で世界を認識するところに唯物論的弁証法が成立するのだ。エンゲルスは科学が客観的な正しさを保持して進めば進む程プロレタリアートの利益と要求に一致するようになる」と説明した。逆は必ずしも真ならず、ではない——いまや逆の方が寧ろ真であると闡明された訳である。すなわちプロレタリアートの利益と要求に一致して進めば進む程、科学は正しくなるのである、と。それ自身歴史的に批判され歴史的に解体さるべき有産者階級の立場を守って事物を認識しようとするれば、事物を媒介的、發展的、全体性的に、また理論と実践との統一において捉ええず、形而上学的観念論や形而上学的唯物論か弁証法的観念論の認識様式をとることになる。こういう直観的説明は、それ自身如何に難点を含んでいようと、われわれの未熟な直観的な頭脳にはしつくりと入る説明であった——その難点については後に次第に触れていくが。

福本氏は、ついで大正十五年六月個人雑誌『マルキシズムの旗の下に』に『今日におけるいわゆる左右両翼の対

立』を発表したが、その第三節『認識論におけるこの対立』はつぎの主張のためにわれわれの注意を喚起した。すなわち、かつての左翼の理論的強敵たりし櫛田民蔵氏が『唯物弁証法ということが日本でも研究せられつつある。もしそういう理論が事実を解釈する正しい論理だというならば、それは人間生活の実際がすでに弁証法的発展であるためでないならば』といわれたことを引用し、氏はつぎのように応酬した。『われわれのここに見る所のものは、疑もなく、素朴なる唯物論と、従ってまた唯物弁証法に対するシニカルな嘲笑とではないか。「それは人間生活の実際がすでに弁証法的発展であるがためでないならば」というそれ自体はあやまりではない。だが、それだけでは足りない。氏がマルキシズムの意識的、行為的、方面——政治的、戦術的方面——の把握において失敗せらるるの、ないしこの方面に比較的無関心であらるるものはその理論的根拠をここにもつ。マルキシストは、「事実の弁証法的性質に、弁証法的思考の法則の意識（エントゲンブリンゲン）を折合わせ」なければならぬから。』

弁証法的唯物論者ではないが徹底した唯物論者（と、そう福本氏は彼を規定した）たる櫛田氏に対するこの批評は全く同感であった。しかも『弁証法の意識』を了得しうるものはプロレタリアートのみであるという命題は、善かれ悪かれ、もはや常識となっていたのである。すでに何度も述べたように、デボーリンの『戦闘的唯物論者レーニン』は『唯物論と経験批判論』の紹介書であつて、絶対真理としての物自体あるいは客観的实在の承認、人類の知識はその反映であり、益々深くそれに接近して行く相対的真理であること、知識のこの弁証法的性質に対する無智が、観念論や形而上学やまた理論をおっぱり出して四つばいになった経験主義や実証論やまた批判哲学や経験批判論等の雑多なものを生むのだということ、を説明してわれわれに相当深刻な影響を与えた書であつたが、その外に本書は『近代哲学は、二千年前から哲学がそうであつたように、正に政治的である』という命題をわれわれに教えた。今日われわれはこのレーニンの命題を『……党派である』という訳語で知っているが、本書の独訳がポリチッシュと誤解したので、それに拠つた邦訳本も『政治的』となつたのだ。しかし『党派の』とあつたところで、

われわれの解釈は大して変つていなかっただろうことは疑ない。この命題の真の意味は、あらゆる哲学はそれがいかに粉飾された形態を持つとも、『常に例外なく、問題解決上の二つの根本系統、二つの根本方向、二大陣営』すなわち唯物論と観念論なる対立する二党派のいずれかに帰着するもので、その対立をまぎらせ、それを超越したるが如き「新」系統や「新」方向は、結局は観念論の変種にすぎない、という点にある。レーニンが哲学は党派的であるというとき、彼はこの『二つの根源的な認識論的方向』以上のことも以下のこともいっていない。自然科学は（一般に科学は）唯物論的方向を進む。外界は客観的実在的であつてわれわれの意識はそれを反映するという信念は自然科学者（一般に科学者）が期せずしてこれをいだいている。いな一般の民衆は日常的にこの信念をいだいている。観念論は唯物論とは逆に、こういう信念を自覚的ならしめかつ確証する代りに、これを切り崩して宗教や信仰主義に門を開く。

もちろん哲学上のこの二つの党派の対立はその社会的意義を持つている。すなわち唯物論が人類の大衆に客観的真理を啓蒙するとき、観念論は大衆の前に客観的真理がそのままに通用しないように働きかける宗教や信仰主義の助手をつとめる。そこに哲学の上の党派の闘争が進歩と反動の社会的闘争を反映し、相闘う諸階級の傾向とイデオロギーを反映する根拠がある。しかしわれわれの不幸は、この党派性の命題にレーニン等の思いも寄らなかつたであろうような特殊な意味をつけ加えて理解した点にある。すなわち、かかるがゆえに唯物論はプロレタリア階級の党派的立場に立つ哲学であり、観念論はブルジョア階級の党派的立場に立つ哲学であると。ゆえにプロレタリア階級の立場に立つ哲学、その立場に立つ認識論的方向は唯物論であるうんぬん。——という訳で諸種の問題の処理において『哲学的に終始一貫して党派的であること』（すなわちレーニンの意味では『唯物論の首尾一貫』を維持すること、『唯物論と経験批判論』下一二三頁は、認識の問題においてプロレタリアートの立場を首尾一貫するということと一致した、むしろ、ということに還元された。つまり『哲学は党派的』とは『哲学は政党的』の意に解さ

れたのだ。こういう考え方の中に巧妙なに隠蔽された錯誤はもちろんその当時には分らなかつた。

だがプロレタリアートの社会的政治的立場に沿そうて現われる意識は、その理由によつて、これを哲学的に見るとき唯物論的である——とはいえない。『唯物論の首尾一貫』のためにはそれ自身の条件が要るのであつて（例えば経験事実の集積、唯物論的思惟材料、実地検証等）、階級的政治的立場がこれを可能にする根本条件ではない。否、一定の政治的「傾向」から独立して客観的な経験事実もとに基づくことこそが、唯物論を一貫する条件ですらある。そればかりでない。かえつて唯物論を一貫することこそプロレタリアートの立場を首尾一貫するための不可欠の前提なのである。何故なにゆえなら、そのためには、そのための客観的な実在条件を科学的に、すなわち唯物論的に闡明せんめいしなければならぬから。その翌年いたに至つて私がこのことに気付いたときには自分で自分にびつくりしたほどである。そうした次第で、いよいよ前掲福本氏の雑誌にデボーリンの『唯物論的弁証法と自然科学』が訳載され始めたときわれわれには、少くとも私には、一定の階級的立場に立つ認識の図式なるものが出来上できあつていた。

弁証法については、通常ルカチ・福本の観念はデボーリン的観念と一致しないものといわれている。しかし、一見対極をなしているこの両説は、どこやら相補足する面を持つていて、デボーリン説の窪みへ福本説を嵌入かんにゅうすることができし、福本説の額縁がくぶちにデボーリン説の絵を入れることもできる。これはデボーリンの右の論文を調べて見ればわかる。

『唯物論的弁証法と自然科学』は、最初に自然科学を正面から問題にした点で、われわれ自然科学に關係の深かつたものには実に強い印象を与えたのであつたが、この論文の精神はやはり最初に述べた三分法的体系によつて、体系としての弁証法的唯物論から方法としての唯物論的弁証法という研究部門を独立して見せた点にある。われわれはそれまで多かれ少かれこの二つの熟語を同意味に使つていた。否、別いなして考える必要を深くは感じなかつた。われわれははまだこういう問題に対してそれほど、分析的になつていず、プロレタリア的世界観という一般的な名目の

下に雑多な問題を一からげに表象していた傾向があつたのだ。ともかく、デボーリンの論文は、ちょうど機械論的傾向との哲学的闘争の時期を背景に書かれたので、特に方法的理論的思惟としての弁証法を強調したせいもあつたのだろうが、われわれにとつては、『主体的能動性』の高揚のときで、『粗雑なる経験主義』や『ずるずるべつたりな現実追従主義』や『素朴なる唯物論』に対し、『現実の弁証法的特質に弁証法の意識を折り合わせて把握し、実践する』ことが問題になっているときなので、方法的思惟としての弁証法の強調は大いに時宜を得たものであつた。そして『弁証法が社会科学を掴んだ以上は今度は自然科学をも占領しなければならぬ』という仕方でもつて、魅力のある理論を開示してみせたのであつた。

ソ連邦における機械的唯物論者と弁証法的唯物論者（その中心はデボーリン）との論争はステパノフの『史的唯物論と現代自然科学』を契機としてすでに一九二四年から表面化していたが、当時われわれにはその事情はあまり知られていなかった。ドイツ語版『マルクス主義の旗の下に』第三冊に、右のチミリヤーゼフの論文『エンゲルスの「自然弁証法」と近代物理学』に対して、氏の機械論的見解には反対であるという編集部の註があるのを怪訝に思ったが、その『機械論』の何処がどう間違っているかは、その論文を読んでも遂に当時のわれわれには分らなかつた。この論争は一九二九年にデボーリン一派の勝利をもつて一応終結した。この事情は唯物論全書『自然弁証法』あるいはデボーリンの論集『弁証法と自然科学』（邦訳は上下二冊、笹川正考訳昭和五年三月・六月白揚社刊）の訳者序文に紹介されている。論争の内容はストリャロフ『機械論と弁証法的唯物論』（笹川訳同年九月同社刊）にまとまっている。機械論者の特徴の一つは哲学の独自の意義、意識的な弁証法的思考の意義を否定して、弁証法的唯物論を自然科学の結論に解消してしまう点にあるとのことで、そのおかげで、この論争中に戦闘的唯物論者協会は、特に戦闘的唯物弁証法論者協会と看板を変えた。

もつとも、この論文は、『自然科学の弁証法的唯物論理論』を展開、または『自然科学を弁証法的立場から改造』

しているのではなく、そういう課題自体を描いているのである。デボーリンはこの課題を彼の『唯物論的弁証法』の理論に従って表象した。

恐らくは既出のレーニンの提唱を想い浮べつつ、デボーリンも『マルクス主義者は思うになお極めて重要な一つの任務を履行すべきである。すなわちマルクス、エンゲルス、ブレハノフ、レーニンの労作に立脚するところの唯物論的弁証法の理論、これである。この理論は同時にまたヘーゲルに立脚すべきである』ことを唱導する。彼はその『唯物論的弁証法』をつぎのように説明した、——合法的相互関係の学、実在世界の一般的な連結および連繋の学、その一般的な運動法則および運動形態の抽象的科学、従って論理学および認識論を包含する一般的方法論。一般的方法または抽象的範疇はんちゆうとしての弁証法は、実在の個々の分野において特殊的に発現する。弁証法の特殊の範疇はんちゆう（自然の弁証法、歴史の弁証法）はいわばその一般的範疇はんちゆうの特殊な発現形態である。それゆえこの方法の正しさが幾多の事実の上に確証され、益々ますます広大な事実をその内的連絡の発見によって説明しえるようになるにつれて、方法は具体的な理論となる。かかる自然科学の理論、社会科学の理論は、弁証法の一般的理論（それは同時に人間の理論的思惟の法則を対象とする一つの特殊科学としての哲学である）とともに弁証法的唯物論』という統一的世界観をなす。

自然科学は哲学と絶縁してやうて行くことはできぬ。自然科学の発見する事実や法則の相互の内的関係を見抜くのは理論的思惟の仕事である。哲学を意識的に研究して、最高形態たる弁証法を究めない限り、人びとは自ら知らずして最も憐れな哲学の虜となり、事実の山なかの中にあつてオリエンテーションを失つて荒唐無稽に迷い込む。経験は理論によつて貫かれ、その内的連絡において把握されなければならぬ。しかしこのことは内的連絡を外から持ち込んで経験的具体的事実におしつける意味に解してはならぬ。『内的連絡はむしろ客観的に存在しているのであつて、従つてわれわれの任務は、単にこの連絡の発見のために必要な能動性、を展開することにある。』

さてルカチ・福本的表象における『マルクスの弁証的』^{ドイマ}はプロレタリアートの階級的地位、その批判者の立場に根源的に照応せる意識として規定され、まず社会科学（社会の構成および変革過程の科学）として限定された。『客観的に存在する連絡の発見のために必要な能動性』はここに備わっている。この弁証法は、その本質において従来の諸理論の批判であり、またその本質において媒介的、生成的、全体的考察であり、さらにその本質において既存の諸理論、またはかかる考察に対する反動的諸理論の社会的根拠をあばき、この根拠の変革においてその理論が変革さるべきことを、内包している。この弁証法をデボーリン的コースに従って適用することは何等デボーリンの主張に抵触せず、かえってそれを補足するというものである。デボーリン自ら自己の提起する『唯物論的弁証法』を屢々^{しばしば}プロレタリア階級の方法論として限定した。このデボーリン的弁証法が『マルクスの弁証法』と異るところは、前者は実在のどういう場面にも適用される普遍的——その意味で客観的——法則であるのに対し、後者はプロレタリアートの批判的実践に期してのみ定立される法則である。普遍的な弁証法なるものは、一つの抽象であり、動的なものを静的に固定することであり、批判的活動からの超越化であり、実践的科学を純粹科学化するものと、後者の系統の人びとは考えた。そして『マルクスの弁証法』の真髄を失うことなしには、普遍化されえないとした。然るにデボーリン自身は、プロレタリアートの革命的实践に直接的に照応した『実践的弁証法』（つまりいわゆる『マルクスの弁証法』と同質のもの）を自己の『唯物論的弁証法』の根底に認めながら（『革命的弁証法』としてのレーニン』第一部）、両者の關係を把握することができなかった。従って前者の基礎から後者すなわち一般的普遍的思考法則としての弁証法を導き出すことができなかった。彼は弁証法的法則をとり出してそれを説明するのみで、それを固有の基礎から展開することについては語らなかつた。だがそれこそが問題だ。成程^{なるほど}エンゲルスの指示に従って、哲学の二千五百年の発達の成果を預有すること（『自然弁証法』下巻三三六頁）、人間思惟の歴史的発展道程すなわち外界の一般的相互關係についての種々の時代に出現した見解に通暁すること（『自然弁証法』上巻二〇七頁）、

が挙げられえ。しかし、それらの知識をただ雑多に学んでも仕方がないと誰しも考えるだろう。批判的に摂取しなければなるまい。デボーリンは必要に応じて盛にヘーゲルを引用する。しかしその引用が無批判的であつてよいはずがない。いかなる基準に基いて批判的に摂取し、我々の弁証法を鍛え上ぐべきかがやはり問題ではないか。マルクスの行ったようにというのは異議なしとしても、それが果してどういうものであつたらうか。それがやはり分らないままに人びとは批判的摂取の基準をプロレタリアート、その批判的実践そのものの弁証法性というところに求めた。そして、結局、思惟法則としての弁証法の展開は分らずに終つた。そして『実践的弁証法』ないし『マルクスの弁証法』と一般的な『唯物論的弁証法』の法則の間に何かある相似点、同一性が直観されることでもつと満足した。

ルカチとデボーリンの折衷については、次節以下でも述べる。前者の精神で後者を理解する試みは繰り返えし現われた。デボーリンの『弁証法的唯物論と自然科学』が知られた年（大正十五年）の秋『社会科学（唯物史観研究号）』に大森義太郎氏は『無産者科学の客観性』なる論文を寄せ、この傾向からルカチの弁証法を賛成的に紹介しつつしかもそれを自然科学の方へも拡張し、自然科学方法論の唯物弁証法的改造によつてプロレタリア自然科学を成立せしめえることを論じている。氏もまた科学の魂を方法に求め、認識方法の対立によつて一切の科学を無産者的と有産者的との対立に分解した。しかし、もちろん氏はプロレタリア自然科学の方法なるものを展ひらげて見せることはしなかつた。そういうものが盛んに論ぜられるには昭和八年まで待たねばならなかつた。階級闘争を基礎としての自然科学の変革の思想にはルカチもコルシユも一向対立していない、むしろその思想の開拓者である。また個々の自然科学の研究対象へ弁証法則を応用する、その応用を否定していない、ただそういう純客観的応用は抽象的だといったまでである。しかしこういう法則に対する関心は『マルクスの弁証法』的関心と並行して益々高ますまつて行つた。三年後の昭和四年には三木清氏（これまでやはり『抽象的』なことに対立して具体的——すなわち歴史

的社会的弁証法の使徒であつた)も『社会と自然』という論文を書いて、抽象的応用そのものを具体的な社会的基礎の弁証法から説明しようとしている。さらにその三年後の昭和七年に戸坂潤氏が『唯物論研究』創刊号に『社会における自然科学の役割』を書いて、プロレタリアートと唯物弁証法的論理と社会科学と自然科学との間の範疇的同一性を直観的に示唆しようと試みている。最後に昭和十年秋には岡邦雄、永田広志等の人びとによって、自然科学への弁証法の適用は、唯物史観(社会科学における弁証法)を前段階として必然的に予想するという定理が立てられた(例えば『唯研』十月号)。もちろん前者から後者を展開しようとする三木氏流のやり方はすでに克服され、適用される弁証法を自然そのものの反映と見る見方がすでに昭和七年から強調されてはいるが、やはり反映するための能動的なものとして『実践の弁証法』を立て、それを介しての反映であるという視角を根源的として固守した。

私自身は昭和二年のはじめごろまで、実際問題として、私は自分の頭の中なかにある幾多な論理的概念を、そのころ私の頭の中なかにあつたプロレタリア的实践の表象に関係(リファア)付けて陶汰したり、変形したり、確認したり、という仕方なで、『唯物論的弁証法』の展開にいそしんだ。福本氏の四ヶ条定式と並んで同氏の政治論文に引用されたレーニンがある機会に展開した有名な弁証法論理の特徴付けは、深い印象を与えた。かくの如ごとき論理の力強い取扱いは、革命的実践からなればこそ生れるのであるとうという一層深い感慨をともした。私は主観的には自然科学者、少くも自然弁証法の理論家、たらんと志し、そのための正しきオリエンションとしての弁証法の真珠を求めて、益々ますます深く政論に頭をつきこみ、その方でもかちかちの福本イストとなつた。弁証法的論理の真実、唯物論的な取上げ方、すなわち、それを自然科学(一般に科学)の発展そのものによつて経験的に検証される思惟法則として批判的に取上げること、もしくはヘーゲル流に展開されたところを『運動一般の性質に関する、われわれの経験的基礎の上に立つ理論的知識の展開』(『自然弁証法』下巻三六頁)として批判的に取上げることなどは未だ思いも及ばなかつた。何よりもカント主義やヒューム主義の影響(若もしくは、その影響を受けるに相ふ応せしいわれわれの未熟さ)

から経験を何か種々雑多な解釈を容れえる不定なものとのみ考え、その経験からのみ必然的な普遍的な判断が生れることの行程がわれわれにはまだ分らなかつたのである。

レーニンの有名な言葉は、『再び労働組合、現在のモメント、同志ブハーリン及びトロツキーの誤謬について』（一九二二）の一節である。

『同志ブハーリンが犯している誤謬の理論的内容は、彼が政治と経済との弁証法的交互関係（これはマルキシズムがわれわれに教えるところである）を折衷主義に置き換えている点にある。「一方では……他方では……」——これが彼の理論的命題である。これこそ正しく折衷主義だ。弁証法は交互関係をその具体的発達において全面的に討究することを要求するが、これから一片を、彼れから一片を抜き取ることを要求するものではない。』

『弁証法論理は、われわれが形式論理を越えて前進することを要求する。対象を真実に認識せんがためには、そのすべての方面、すべての連関と『媒介性』が理解され探究されねばならぬ。われわれは決してこれを完全にはなしえないであろうが、しかし全面性の要求は誤謬と硬化からわれわれを救う。第二に、弁証法的唯物論は対象がその発展において、その『自己運動』（ヘーゲルが屢々しばしばいつたごとく）において、その変動において把握されることを要求する。第三に、人間的実践の全体が対象の「定義」の中なかにとり込まれねばならぬ。真理の批判としても、また人間の必要とその対象物とを連関つける実践的規定としても。第四に、弁証法的論理は、故ブレハノフがヘーゲルを引いて好んで述べたごとく「抽象的真理というものはない。真理は常に具体的である」ことを教える。』

デボーリンは、『唯物論的弁証法』が鍛えあげらるべき諸条件を示さず、ただそれを具体的科学に適用することをのみ述べたのを念頭において、私はずっと後に自然弁証法の訳序でこう書いたことがある。『従来自然弁証法に関して、それが唯物論的弁証法の自然認識への具体的適用であるという点のみが専ら注意せられたにすぎない。そしてこの唯物論的弁証法自体がいかなる哲学史的、実在的前提をもっているかに関しては何んら真面目な研究が

発展しなかった。』もちろん彼はその論文にも、哲学が個別科学の成果に立脚していること(第二節)、また哲学的思惟は、実践的態度を媒介として思惟が存在に統一される過程の成果であることを述べている(第三節を見よ。人間社会の生産力の発展は自然の支配を高める。最初の支配は自然の個々の事物と、その個々の性質に限られているが、更に自然力を相互に対して操ることににより、自然そのもの、自然の一般的なるものをも我が物としてゆく。われわれの技術全体がそのことを証明する、うんぬん)。しかし彼においては、こういう考察はどこまでも言葉の上だけの弁解であり、根本視点にまで仕上げられていない。彼においては、唯物論弁証法はどこまでも、無前提な、現実から遊離した、それ自体においてある何か図式的なものであった。彼自身は言葉では繰返し思惟が発展的流動的であることをいいながら、かつ理論的思惟が形成さるべき基礎を一応言葉の上では知っていないながら、実際に、その基礎の上で思惟が形成されるなら、それは如何なる内部的行程においてであるか、またかかるものとして、その思惟は如何なる規定と内容と意義とを持つべきものなるかを実際には知らなかったのである。すなわち哲学という一個の科学を、実際にはまだ展開しえずにいた訳なのだ。彼は科学の成果の総括によつてではなく、それ自身として理解された近世哲学史における論理的範疇の変遷(その際哲学者はみんな多かれ少かれ唯物弁証法論者と見えた)やヘーゲル論理学およびマルクス・エンゲルス・プレハノフ・レーニン等の弁証法についての概念や命題の摂取から論理的概念の相互序列の系統図(『唯物弁証法』の図式)を作り上げ、これに現実世界の発展過程に内在する魂であり神経であるという意義を付与した。すなわちその神経をつかんで全実在世界を手繰り上げることのできる底のものとして提示された(『弁証法を我が物とすることは、実在を我が物とすることを意味する』)。こういう図式は、もはや理論的思惟の法則としての論理学ではない。認識がそれに従つて得らるべき法則を規定する方法としての論理学ではない。全実在世界の魂であるところの論理学である。すなわちこの論理的範疇は実在する! これは実在する図式であり、現実世界を構成するところの内在的範疇である。何のことはないカントのカテゴリ論の蒸し返し

だ。これは一九三〇年以降ミーチン一派の批判者によって手痛く攻撃されたところである。いずれにしろ、われわれは弁証法をどこから切り取^とってくるのではなく、何かから『展開』することを考えねばならなかったのだが、『唯物論的基礎から』ということの意味がまだまだわれわれ一般に徹底していなかった。自然科学の成果の総括から弁証法を導出することは一応考えられないではなかったが、自然科学のためにこそ、その諸成果の総括のためにこそ理論的思惟を必要とする、相互関係の科学たる弁証法を必要とするという逆の命題の方がもつと根本的な深い問題だと思われた。われわれにはルカチ・福本的弁証法以上に批判的な方法はないと思われた。そしてわれわれは漸次意識的無意識的にマルクス主義の世界観を一般的な唯物論の地盤から、社会的地盤（プロレタリアートの立場）へ移して理解すべきであるという考え方に支配されて行つた。思惟よりも存在が、精神よりも自然が先だという唯物論と、階級闘争の意識から展開された唯物論との間に、何の関係があるかとすべての人が考えた。そして、その後の理論的課題は、実に、この両者の間を関係付けて、マルクス主義を統一的に、再理解することにあつたのである。デボーリン説の影響するところは広範かつ深刻であるので、やや詳しく批判をかかげておこう。

上述のことからも分る通り、デボーリン的方法の秘密は、その形式性、抽象性にある。ところで一般的形式的な思想というものは世界の現実的内容を實際に把握する過程においてでなければ仲々克服し難いものである。デボーリン哲学の本質はその『唯物論的弁証法』説にあることを見たが、それは『自然、社会、思惟に均^{ひと}しくあてはまる一般的運動法則および運動形態』『総体的實在を包括する範疇^{はんちゆう}』『あらゆる知識の基礎を成す範疇^{はんちゆう}の研究に局限される。』『換言すれば一定の個別の場合に対する特殊の適用を度外視して、範疇^{はんちゆう}の一般的論理的分析を以て満足する』のである。彼が如何^{いか}にしてこういう『弁証法』を定立したかの事情は明かでないが、エンゲルスのつぎのような立言によって根拠^{こた}付けられているように見える。

『これによって（唯物論的立場をとることによって）弁証法は外的世界と人間思惟の運動の一般的法則の学に

還元された。この二系列の法則は実質から見れば同一であるが、表現から見れば、一方は人間の頭脳によって意識的に適用されるが、他方は自然および歴史において外見的偶然のなかを貫いているのだという点では異っている』（『フオイエルバッハ論』、第四節）

（自然および歴史の唯物論）、すなわち『実証科学によって、並びに実証科学の成果を弁証法的・思惟を以て総括する方法によって到達しえる相対真理』（同上第一節）『自然および歴史から駆逐された哲学に残るところは——残っているものがあるとするれば——純粹思惟の領域だけである。思惟行程の法則の学、すなわち形式論理学および弁証法である。』（同上）『弁証法の諸法則は自然および人間社会の歴史から抽出されるのだ。しかし、それらは歴史的発展のこれら兩段階並びに思惟の最も一般的な法則である。そして根本において次の三法則に帰着する、すなわち量から質への転化、及びその逆の法則、対立物の滲透の法則、否定の否定の法則』（『自然弁証法』下巻八一頁）『私が本書の自然科学の部で問題とするところは、個々の場合について——一般の場合にもう分っているのだが——弁証法的運動が無数の変化の錯綜のなかを貫いていることの実証である。』（『反デューリング論』第二版序文）

こうして、一般的運動法則としての唯物論的弁証法の定立には充分の理由がある。もしデボーリンにおいて非難さるべき点があるとすれば、恐らく、その一般法則を、特殊的に個々の場合に適用することを度外視して、それ自身で論理的抽象的に分析しえると考えた点にあるのだろう。一寸考えれば、太陽や資本主義社会の研究に対して発展一般（すなわち対立の統一における自己運動）の研究は可能であるように見える。しかし、そういう法則は、現実のあらゆる運動形態が特殊的に研究されるに従って、それから抽出されて形成化されるのだ。それゆえ、彼の如く『実在の個別の分野の範疇は弁証法の一般的法則に従うが、しかし、一般的範疇の特殊の発現形態としての特殊運動法則を有する』と考えるはならぬ。この一般的法則が特殊な形で発現するのではない。この点は非常に大切

な点で観念論的弁証法と唯物論的弁証法の差異の標識たるものだから注意を要する。すこし前、『弁証法の具体化』という標語が唱えられ、解決なくして終ったのも、実はこの点がいまだに理解されていない端的な証拠である。いまこうした抽象的範疇の意味を明かにするために、マルクスが歴史研究についていった事柄を顧みよう。『人間の歴史的発展の観察から抽象されるところの最も一般的な結論の総括』についてマルクスはこういつている。

『この抽象の結果えられたものは、……歴史的資料の整理を容易にしたり、各時代の順序を暗示したりすることに役立つだけである。しかしながらそれは形而上学的な哲学のように、それにさえ従えば歴史上の諸時代を整頓しえるというような、処方箋または図式を与えるものでは決してない。寧ろ反対に、……われわれが資料の観察及び整理、すなわち歴史の現実的な説述にたずさわるとき、初めて困難が始まるのである。この困難を除去する方法はここでは指摘できない。それは各時代の個人の現実的な生活過程と行動との研究の結果を俟って始めて判明するところの諸前提によらねばならぬ。』（ナウカ社坂『ドイツ・イデオロギー』一七頁）

すなわちデボーリンの考えとは反対に、一般的抽象的範疇を我が物とすることは、実在を我が物とすることを意味しない。実在を我が物とせんとするときにはじめて困難が始まるのだ。実在は実在それ自身の諸前提が闡明された上で始めて捉えられるのであって、一般的範疇はその把握の仕方に暗示を与えるだけである。

エンゲルス流に言えば、実証的事実や個々の認識を内部関連に應じて関係付ける際に弁証法の一般法則はその『類比（アナーロゴン）、従って説明の方法（エルクレールングス・メトデー）（『自然弁証法』上巻二〇七頁）を与えるにすぎない。要するに、この法則が実在世界を一貫しているということは、実在の自己運動がこの法則を体現しているということであって、この法則に従って運動する一般的な実在が根底となつて特殊な実在を特殊的に運動させているということではない。従つてこの法則が個々の実在分野に働いて、その分野の特殊の弁証法則を成立せしめているのではない。エンゲルスが『反デューリング論』でやったところ（前記引用参照）も、この一般法則

が、個々の場合にいかに特殊化され具体化されて発現しているかを提示することではなく、世界の一般的な発展のみでなく個々の特殊領域の発展もまたそれを分析してみるとこの一般法則を体现しているというこの確認であった（『反デューリング論』上巻二三八および二四八・九）。その眼目は、ヘーゲルがはじめて体系化し、思惟法則として定立した弁証法が、実は実在の全体にわたる発展法則の抽象であること、そして、かかるものとして再吟味し、かかるものとして定立し、かかるものとしていい表わせば、弁証法の法則は全く簡単自明なものとなることを明かにすることであった。——これが唯物論的弁証法の一般的論理的分析といえないこともない課題である。ところがデボーリンはまさにこのことを弁証法の『具体的適用』だと考えている。このことによって、彼は実際の研究に適用するに当って始めて生ずる困難を意識しなかった。まして、この困難をほぐす方法、およびそれをほぐして実在の（自然および歴史）弁証法を思惟に取得せしむべき、有効な類比としての弁証法をわれわれに提供することができなかった。彼の哲学は全体として哲学すなわち唯物論的弁証法の意義を説教し、その個々の法則を説明するに終わった。だから彼の哲学は、人を範疇研究はんちゆうに引っぱり込んだが、現実世界の研究には導かなかつた。この事情は一九二〇年デボーリン一派が公然と批判の前に立たされるに至いたつてから、大分変つてきたが、しかし弁証法の法則はまだ利用されるに必要な形態にまで形成されていない。ソヴェト大百科事典の『弁証法的唯物論』（邦訳ナウカ社刊）には弁証法の諸法則と認識の過程との二つの章が設けられてあるが、実のところ、弁証法の諸法則は、認識の過程において研究対象に適用さるべき類比として説明されるとき、はじめてその本質がわれわれに真に明かとなる底のものである。弁証法の諸法則を外世界および思惟の一般的運動法則として、簡単自明な『合理的形態』において闡明せんめいすることは一つの前段的な必要事である。しかしこれらの諸法則がバラバラに積み上げられたとて、われわれの認識にとつて、大して意義を生ずるものでないことは、さきごろの『弁証法の例題』の問題をとつて見れば分る。ここでは、簡単な数学的物理学的事例に対し、弁証法の法則がどんな風にあてはめらるべきものかについて無限の混

乱が起つたのであつた。総じて、弁証法則を直接的に個々の事例にあてはめることは、その法則に一致するものをあらゆる諸側面において分析さるべき自然から拾い上げることであつて、前記の如くこの法則自身の理解には資するところがあるかも知れないが、自然そのものの認識には大して意義はない。われわれが意識的に適用しえるものとして簡潔な定式にまとめ上げた諸法則なるものは、もはや『形式から見れば』實在の弁証法とは異なるものである。それは『純粹思惟（すなわち理論的思惟）の法則』となつたのである。しかし純粹思惟の法則としての弁証法（形式論理学はしばらく論外として）は、量と質、対立矛盾の統一、否定の否定、また形式と内容、本質と現象、偶然と必然、可能と現実等の法則の総和ではない。これらの範疇的^{はんちゆう}法則は客觀的實在が漸次に思惟に到達する行程（認識行程）の或段階、或側面において、思惟が適応的に行使用する（もしくは、行使せざるをえない）法則なのであり、一個の認識過程において内的に関連したものである。これら諸法則の相通性、内部連関性が分つていなければ意識的適用は不可能である。これら諸法則が認識行程において相通性において闡明^{せんめい}されず、個々に説明されて並べられるとき、どんな機械的^{しやくしじようぎ}な杓子定規な結果が起るか、ある人のつぎのような回想に現われている。

『七・八年前「自然弁証法」が出版された当時のことを思い出す。私はすっかりこれに没頭し種々の知識を対立の統一の例、否定の否定の例、量から質への例といった具合に分類した。そして「今までの自然科学は煩瑣^{はんさ}な論理、面倒な数学化形式化等々によつたブルジョア自然科学である。自分は労働者にも理解できるプロレタリアの自然科学たる自然弁証法を造るのだ。」といつて数学のできない連中を喜ばした事があつたが、後に諸種の哲学を勉強し殊にカントを読んだとき井然^{せいぜん}とした、自然を全般の関連の下に把持した深刻な（？）この体系に一たまりもなく魅せられてしまった。前の自然弁証法が実につまらない馬鹿氣たナンセンスに思った。これらは単なる分類であつて如何^{いか}に多くの例証の集積を造つても一歩も前進しないし、何ら自然に対してより深く透入するとも思えなかつた。

『例証主義は自然科学者外の啓蒙に使うにはあるいはよい。が自然科学者は噴飯と冷笑をもつてこれから去る事となるう。』（『唯物論研究』、第四〇号、一二三頁、谷沢和夫氏）

もちろんここには、逆説的な戯画された誇張があるのだろう。しかし類似の経験は誰しも持っているだろう。いうまでもなく、量から質への転化、対立の相互透入の法則は、カントの十二範疇はんちゆうをその内部連関において統一する法則である。これらの法則が、例証を与えられ、形式的に個々に排列されたのみでは、われわれはそれらをどう利用してよいか分らない。しかし、認識行程において適用されきたった、また適用されえる形態で、従つて科学の歴史が立証する形態で（レーニン『弁証法の問題に寄せて』首部参照）、弁証法を説明することができるならば、それは直ちに自然科学研究の実際と結びつくであろう。『フオイエルバッハ論』（またある意味では『唯物論と経験批判論』も）の如きは、数少いこの種の文献の一つであるが、それも僅にその端緒を与えているに過ぎぬ。われわれはまだ、『自然科学者がそれを求めるものとして、またわれわれが彼等を援助しえるものとして』という既出のレーニンの言葉のうち、『われわれ』の方の任務を果していない。『科学としての弁証法の一般的性質』を述べた章で、エンゲルスは書いている、——われわれはいま弁証法の手引書を編むつもりはない。ただ弁証法は自然の現実的發展法則であり、従つて理論的自然科学に対しても応用できることを証明するのみである。それゆえ、それら諸法則相互の内部連関に立入る訳にはいかない（『自然弁証法』下巻八二頁）。しかし、科学研究者のために手引書を編む者はそれに立入らねばならぬ。しかも、その内部連関は科学の歴史なかの中に立証されて与えられているのである。科学の歴史（現実世界の理論的認識の歴史）は純粹思惟（理論的思惟）の全範囲、形式論理学と弁証法の法則が実際に使用されきたった固有の場面である。理論的思惟そのものにも矢張り内部法則があつて、その過程と条件とを飛び越えて、自分勝手に自分の思惟を目的物に対し行使することはできないということ、この認識は、私をして福本氏やデボーリンから離脱せしめるにいたらしめた導線であつた。

さて、これからの叙述はいかにして（福本氏の）（編者）『マルクスの弁証法』の立場が止揚しやうされねばならなかったか、またいかにしてプロレタリアートの歴史的社会的存在様式に還元された弁証法が、真実の唯物論的基礎の上に置かれ、唯物論的認識の理論として形成されねばならなかったかの内部的問題に関係する。

本節では、先まず、一通り目ぼしい事柄の年代記を与えて置こう。

大正十五年の終りごろには、マルクス主義の通俗冊子が普及した結果として、『社会科学に引用されたる自然科学の二、三に就いて』（『自然科学』第三冊改造社）といったきわもの際物記事が現われるようになった。

自分の専門の事柄が専門外で問題にされているのをみると好奇心が湧わき神経が鋭敏になるのは誰しも経験するところであろう。筆者奥氏は東大物理学科を途中でよされ京大経済科に転じ、そのころ石原純博士の紹介で原子構造か何かに関する研究を日独の学界に発表された方で、ちょうどこうした記事を書いて見なくなる条件にあったのだろうと思う。内容は例えば河上博士が『現象形態と事物の本質とが直接に一致しておれば一切の科学は無用である』というマルクスの言葉の説明にコペルニクスの地動説を持つてきたのに対し、天動説必ずしも現象でなく地動説必ずしも本質でなく、相対運動が本質であると突き込んだり、デボーリンがその『レーニンの戦闘的唯物論』においておかしな相対性理論に対する無知な誤解を指摘したり、同じく同書で観念論者は客観的実在を抽象化し微分方程式で置き代えたところに対し、微分方程式は積分常数を含み始原条件によって積分常数を決定すれば、具体的運動が得えられるのだから、現実的具体的だと抗議したりしたものだったと記憶する。筆者とは、原子物理学に熱中していた私の亡友を介して、当時個人的に面識があったので、長い批判文を差上げたが、それに対する応答のお約束は果されなかった。同氏の記事そのものはマルクス主義に対する別に深い意味のない揚あげ足あしとりすぎず、おまけに相当散漫で真面目には読めない点もあったが、しかし、この方面の関心が別の処でもっと真面目な形態で高ま

りつつあったことの象徴とみることができる。

それからちょうど一年たって、岡邦雄氏はそのレーニンのマツハ主義批判に疑問を提出した批評文で『社会科学の哲学的論究において自然科学上の現象なり理論なりが引用あるいは批判される場合についてはあまり注意されなかった』といい、わずかにその一例として奥氏のこの一文を挙げておられるが、もちろんそれはどこまでも表面上のことであった。

なるほど奥氏から岡氏までの一年間誰もがこの問題について書かなかつたのは事実である。左翼理論家にとつては政治的躍進の時期で慨して特殊な理論的問題に携わる余裕はなかつた。哲学研究家の間に社会科学への関心を持ち込んだ三木清氏一派は最初から自然科学を無視し、自説を自然科学的唯物論と対立した史的唯物論として定立していた。

しかし、社会科学は若い自然科学の学生の関心をも捉えつつあったのであって、ことに昭和二年におけるおびただしい哲学文献の翻訳は、自然科学の唯物論的弁証法的反省を促進したことは疑えない。ただこの問題が必然的な課題として、われわれの具体的な言葉で（デボーリンの一般的な暗示的な考察のようにではなく）いい表わされる必要があつたのだ。何よりも自然科学者自身が興味を感じ積極性を感じる形態で、彼等自身の実際的な問題に関連して、弁証法的唯物論の問題が提起される必要があつた。この点でレーニンの『唯物論と経験批判論』は極めて大きな役割を果たしたものといわねばならぬ。残念ながらこの書は、その著作の目的上、認識の唯物論性と弁証法性に限定され自然現象の弁証法性そのものには論及していない。その方面では『反デューリング論』と殊に『フオイエルバッハ論』は深い導標を与えていたのであるが、レーニンの著書（それ自身ある意味では右の二書の認識論的方面の見解の祖述敷衍と見えるものであるが）に比し、一般的にいつて少し固すぎる胡桃であったようだ。具体的な理論の内容に立入ることは、一般的方法的考察と違って簡単にはまいらなかつた。

自然科学研究の中へ弁証法的唯物論を積極的に導入する課題が熟しつつあった一面、その後もそうであったように、その当時にも消極的否定的な態度があったことはいうまでもない。積極家はすべて社会主義の意識と結合し、この方面から促進されつつ、『唯物弁証法』の合理的導入の契機と形態とを求めつつあったのに対し、消極家は社会主義意識からの自然科学の独立性（科学の超階級性）だとか、田辺元、桑木或雄^{あや}、石原純等の人びとの努力に負う批判哲学的科学論の影響による唯物論の一般的不満だとか、『科学の哲学』、科学認識論、哲学的なるもの一般に對して本能的な反撥を感じつつ、実験殊に細心な観察を重んずる傾向だとかといった諸動機によつて動いていたがこれらの疑問に満足な解答を与えるには唯物論文献はまだまだ具体性と説得性との点で難色があったといえなくもない。殊にデボーリンの相対性理論に對する非常識のようなひどいものは論外としても、諸文献には、いろんな意味で自然科学者の興醒め^{きようせいめ}をもたらすような没趣味や無意味さが感じられないではなかった。第一、自然過程を弁証法的に意味付けて（ドイテン）見ても、それはただそう見ることもできる位のこと、それが専門の研究にそれほど意味があるとは思えない。また、弁証法を意識的に採用することなしには自然科学は前進しえなくなつたとか、それに類する立言が具体的に現在の自然科学のいかなる特徴を指しているのか、一向痛切なものを感じさせなかつた。それで結局これらの議論は自然科学外の哲学や認識論、人生觀や一般世界觀が問題になる範圍で、いわば社会主義的世界觀を弁証し弁護するのに必要なだけで、自然科学自身には意味のないものだと思わせた。理論物理学上の觀念論的な認識論なども、好事家は一般教養として熱中するかも知れないが、各自の専門研究にそんな影響をしのび込ませる問題は考えもしなければ考えられもしない。理論物理学の数学化から数関係のみを實在的と考えるような觀念論が哲学者によつて提唱されようと、専門の物理学者の間では、殊に物理教育では、数式の物理学の意味（フイジカル・ミーニング）を考へるといふことは耳にタコの出るほどいわれている。物理的過程に数式を適用することは、弁証法の物珍らしげな諸法則を適用する以上に具体的であり、現に効果をあげたことなのだ。そ

れに翻つて考えれば、弁証法的見方にしても、実験観察的研究がそれ相当に熟しさえすれば、いつでも別な名前で具体的合理的な市民権のある形態で採用されきたつたし、採用されつつあるのであって、それ以外の方法で効能書たくさん沢山の弁証法を意識的に採用せよといわれても途方に迷まよう。およそこういういたた事が、弁証法に対する消極性の根拠であつた。こういう疑問は弁証法の積極的支持者をも不安にしえたものである。

これについては二つの方便が考えられる。第一は、弁証法的思惟の積極的な体系的展開を企てること。体系はそれ自身が吸引力である。これがなければ、いかにその効能を述べても、肝心の本尊が不明なのだから、雲をつかむようで結局誰も見向かないだろう。そこで人びとは哲学の一般的効用を啓蒙されるとともにカントやヘーゲルにくくにしても、さて唯物論的弁証法はとなると、そこばくの法則を統一なく覚え込む以外、具体的には何もまとまつた表象はもたないというようなことになる。この事情は既にふれたようにいまだに改善されていない。

第二は、自然科学の学説史を系統的に分析し弁証法的考え方を了得していないために、実験観察事例を人びとがいかにもてあまし、また概念を新しい事情に適合させえないで結論が一面性や混乱に陥り、観念論で片をつけたり、発展性のある方向を見逃したりしている例を摘発して、弁証法の意識的導入の契機と形態を示すこと。アインシュタインの相対原理がマッハの力学論に示唆されたこととか、われわれに親しい例では故寺田博士がルクレティウス（『事物の本性について』）の現代原子論量子論における意義を発見しておられること（岩波講座『世界思潮』昭和三年）だとかは、いろんな意味で弁証法論者の反省を促している。ルクレチウス、マッハのみならず、デュエム、ポアンカレ、プランク等の著作の魅力なども、その哲学的立場そのものにあるのではなく、新しい知見がもたらす具体的な自然科学理論の『問題』を自ら解決し、血路を見出さんとした実際の努力の所産だという点にある。自然科学につき、哲学、方法論、認識論の方面で、弁証法と唯物論に対立する見解を消極的に批判することは寧ろ容易であるが、それが自然科学そのものの進歩にどれだけ積極的意義があるかは疑わしい。その点で、積極的（実証的）

事象そのものに基いて自然科学の前に『問題』を提起すること以上に、自然科学者の消極性を打破る有効な方便はない。この方便では最近ぼつぼつ注目に価するらしい文献もでてきたようであるが、最初のうちはその五十年前の歴史的形態における『自然弁証法』が唯一の文献であった。

この『問題』の問題に関連して、一言註しておこう。大抵の**人びとは**、自然科学が問題を提起し、弁証法的理論がこれに解答を与えるという命題を受容れるが、それを分析的に考えない。むしろ意識されずにある（もしくは正しく意識されずにある）問題を真に発見することこそが弁証法的思惟の最大の任務なのである。問題は種々な形態で種々な仕方**で意識されえよう**。しかし、自然科学が客観的に提起している『問題』をその正しい**本来的な意義**において捉えるのは、理論的解決の基礎である。問題が提起された諸条件のなかに、解決の諸条件もまた準備されるということは、正に弁証法の教えるところ。一般に理論は実践が提起する問題に解決を与えるものだと**レーニン**の命題（『人民の友とは何か』）は、屢々特殊な意味に牽強付会されるが、問題とは、単に人びとに意識された形態においてだけあるのではない。それはただ**本来客観的に提起されている問題の主観的な反映**にすぎぬ。問題の理論的解決（すなわち実践的、実験的）、経験的解決（の理論的指針）が与えられるためには、まず、その問題が真の客観的意義において発見し直され提起され直すことが必要なのだ。

岡邦雄氏の論文に言及する前に『自然弁証法』が出るまでの当時の翻訳文献を一通り摘記して見よう。

大正十五年十二月には**デボーリン**『カントにおける弁証法』（宮川実訳弘文堂）が出た。これはカントの自然認識の範疇と**先験的弁証法**とを分析して、思惟過程の固有な論理性をわれわれに明かにした点で画期的な意義があった。そのころ概してわれわれは思惟が一定の認識主観の立場に即して形成されるという風には**ばかり考えていた**が、その主観から相対的に独立した法則性を分析するという問題がたて得られることは一寸**考えつか**なかつたのだ。なお、彼がカントの天体論の根本思想を引力と斥力との對抗に基く発展の観念、すなわち機械論的弁証法と特徴付けたの

は印象的であつた。それまでのわれわれの常識では機械論と弁証法は両極的対立であつた。佐野学のそのころの解説論文『唯物論哲学としてのマルクス主義』（昭和二年九月『中央公論』、後翌年三月増補の上単行）を見ても、機械論と形而上学と非歴史性とを等置している（第四章六つの克服）。しかし本当はカントは機械論的過程（ニュートン力学の世界）へ自然的發展の弁証法を導入したのである。ヘーゲルにおいては機械性は、化学性、有機性とともに、事象の交互作用の形態の三段階の一つとして評価されている。エンゲルスは機械論を非歴史性とは別個の規定として、右のヘーゲルのと同じ仕方でも説明している（『フォイエルバッハ論』第二節）。機械論に対するかかる反省を開いたのはシエリングであつた。（私が『自然弁証法』訳序でこのことを指摘したのに対し、岡邦雄氏は、私がこの二人の『荒唐な自然哲学』を過重評価しているという——『自然弁証法と唯物史観』唯物論研究三六号。どうだか。）

昭和二年の五月には『唯物弁証法と自然科学』の単行訳本（大山一郎訳弘文堂）が出た。この論文が一般の読者に知られかつ読まれたのは、これからであろう。四月には同じ著者の『ルカチと彼のマルクス主義批評』（稲村順三訳叢文閣、雑誌『我等』一―三月号に載つたもの）が出て、ルカチの所説が自然科学的唯物論を拒否し、自然への弁証法の適用を拒否し、かくして弁証法を観念論化するものと批判した。これはここでは詳説しておられないが、ルカチ（或意味では福本氏）の問題にしようとした主体的批判的行為なるものの観念論的理解に、その唯物論的理解を対置するという積極性を欠き（これはデボーリン哲学に直観的唯物論の傾向があるためかも知れない）、無力な感もし、喰い違つたような感もあり福本イストは多くは承服せず、日和見主義だと極言するものもあつたが、しかし一応の唯物論的批判たりえたには相違ない。

同じく五月にはいよいよ待望の『唯物論と経験批判論』が出た。この書の解放的影響は既に述べた。続いて六月にはエンゲルスの『反デューリング論』。この書の一般的影響については語るべきものを持たない。それはむしろ

地味な目立たない緩慢な影響ではなかったかと思う。

八月には『唯物弁証法と自然科学』の別の訳本や『レーニンの戦闘的唯物論』の改訳が出た（いずれも希望閣刊）。ついで十月にはエンゲルス『猿の人間化における労働の寄与』（黒田房雄訳、叢文閣）。これは、人間社会の弁証法を自然科学的前提から明かにしたものととして、自然科学的唯物論蔑視の傾向にあった当時の文献に、一味清新の気を注いだ。これは、その後三木氏が、やはり氏自身の立場においてではあったが、唯物史観がそれ自身において自然科学的基礎付けを必要とするこの認容に転向されたとき、その一つの機縁となった（前掲『社会と自然』）。もつとも、既に大正十五年五・六月号の『我等』には『ドイチエ・イデオロギー』のフォイエルバッハの部（リヤザノフ編、森戸・櫛田訳）が記載され、歴史を自然的基礎から観察する方向が指摘されたのだが（『一切の歴史記述は、これらの自然的基礎から、並びに歴史の過程において人間の行動によつてそれらの基礎に加えられる変化から出発しなければならぬ。』——なお同年九月叢文閣刊宮川実新訳『経済学批判』序説四参照、『出発点は当然自然的規定性から』）そうした唯物論は当分は継子^{ままこ}であった。

その他、関係のある一般哲学文献としてはデボーリン『弁証法的唯物論哲学入門』の二種の訳本（井上満訳白揚社刊、永田・川内共訳叢文閣刊）、プレハノフ『近代唯物論史』（榎本訳同人社刊）、プレハノフ『唯物論と弁証法の根本観念』（永田訳、南宋書院刊）、『フォイエルバッハ論』の露訳に附した序文とカント主義に関する註釈とを訳編したものの）等がこの年に出ている。つぎの年には、『唯物論と経験批判論』の新訳の他に、おわり頃になってタールハイマア『弁証法的唯物論』の二種の訳本（入門書として相当広く普及した）、プレハノフ『史的二元論』（川内唯彦訳、南宋書院刊）、クノー・フィシャー『ヘーゲル哲学解説』（坂上絢一郎、白揚社刊）。更に昭和四年に入ると、ヘーゲル小論理学の翻訳が雑誌に現われ始め（前年十一月創刊の『新興科学』には原著第三版、一月創刊三枝博音氏主宰の『ヘーゲル及弁証法研』には初版の訳が）、後、単行本となった。ヘーゲル流行はむしろマルクス主義に

刺戟された在来の哲学者社会からもたらされた。十月にはレーニンの哲学ノートの一部で一九二五年にデボーリンが解説発表した『ヘーゲル「論理の科学」大綱』の訳（川内訳、叢文閣刊）、更に翌五年五月にはデボーリン『弁証法』（ヘーゲル「小論理学」露訳序文、川内訳、鉄塔書院刊）が出、ついで前記三枝氏の雑誌にヘーゲル「自然哲学」（グロクナ版）の一部が訳載された。

昭和四年にはこの外、二月にデイーツゲンの哲学論文の改版および新刊が、改造文庫で出版されたが、ロシア文献に圧倒されて、真面目な注意が注がれなかったのは残念であった。唯物論的認識の性質を分析したこの篤学な論文は、もつともつと、殊に自然科学者の側から顧慮されてよいものである。

ついで七月号の『国際文化』には前出チミリヤゼフ『エンゲルス「自然弁証法」と近代物理学』が記載され、最後に十二月には、いよいよ待望の『自然弁証法』上巻（岩波文庫）が出た。（原著ドイツ版は一九二七年十一月記念出版で同年末、これも待望の『唯物論と経験批判論』の最初の独訳本と同じころ入荷したと記憶する。）この翻訳がかくも後れたのは全く私の責任で申訳ないが、しかしまた後で述べるように、ちょうどよいときに出たともいえる。なおそれ以前にも部分的な翻訳はあった。例えば第四章『反デューリング論旧序文』（『マルクス・エンゲルス全集』第十二卷昭和三年八月）第八章『科学としての弁証法の一般的本性』（『ヘーゲル及弁証法研究』、昭和四年五月号）等。

この後者に対して『一無名化学者』氏が早速化学上の誤訳を指摘しておられる。文中『日本でも明治の初年に英国に留学した化学者でシヨールレンメルに就いて研究した人があります。杉浦重剛氏は元來化学者ですがシヨ氏の指導を受けたと自ら話されたのを聞きました。今では記憶が十年も以前のことですから薄らぎましたが杉浦氏はその談話のなかでシヨ氏の学識・人物性行の偉大なるを揚げられました』等の言葉もあり、そのころ既に弁証法に対する関心が、いかなる人びとをまで捉えていたかを推測する一資料として面白い。

『自然弁証法』の全訳は翌五年『マル・エン全集』に載った。岩波文庫版は——再びお詫びを繰返すが——やつと七年に下巻が出て完結した。全集版は、その蕪雑さにかかわらず、専門の方面で意外に適確な名訳が見られて参考になる点が多いのは、恐らく専門家の正しい下訳に素人が不手際な仕上げをほどこしたせいかとも思える。）

以上の翻訳目録のうち、チミリヤゼフの論文には一言触れて置きたい。氏の機械論的偏向うんぬんは別個の問題として、私には『自然弁証法』に対する専門物理学者的な読み取り方にいまでも興味をもっている。われわれの間にあつては、まだエンゲルスが当時の自然科学の理論的内容なかの中から如何なる問題いかを如何なる仕方いかで掘り起したかについての研究が少いようだが、これは前述せとの如く自然科学者の弁証法に対する消極性を打破する上にも、弁証法の研究者の自己向上のためにも、絶対に必要なことだ。後になってわれわれは不満足ながらテ・ゴルンシュテイン女史『エンゲルスの自然弁証法（通俗的体系的概説）』（相馬大野共訳『弁証法的自然科学概論』昭和八年八月白揚社刊）を持つにいたつたが、しかし、エンゲルスの諸断案や思考過程を学説史の背景の下にせんめい闡明することは今後に残された一課題である。

チ氏は、物理学の範囲だけでいえば、かつ細かい問題を度外に置けば、『自然弁証法』においてエンゲルスが当時の物理学の中なかに看取した問題は、つぎのような物理現象諸部門の弁証法的相互推移（架橋）にあると考える。すなわち一、『物体運動』（可視物質の運動）と『分子運動』、二、可逆行程とエントロピー増大の不可逆行程、三、電磁気現象と『物体運動』および『分子運動』、四、物理学と化学、電気と化学、（『自然弁証法』下巻、一三六頁）。第一の問題はエネルギー転化および運動学的気体論の成果を評価する問題であつた。

第一の問題について、チ氏はエンゲルスの評価の意義を当時のオストワルト者流の消極的エネルギーゲチーク的現象主義的評価に対せしめているが、しかし大事なものは、エンゲルスが、熱、光、電磁気を質量なき特殊な物素とみなす考え方に対して、それらを物体の属性、特殊な種類の運動としてせんめい闡明した点に注目し、そこに物理学の本道を見

んとしたことであつて、彼はエーテル微粒子の力学の樹立を予想し、電氣的運動と分子運動（熱）および物体運動の力学との間に、力学的当量を通じて、相互推移の關係が確立されることに意義を置いている。（『自然弁証法』下巻一五九頁）（エンゲルスがドイツの当時の物理学者の電氣流体説に対してイギリスの媒質理論に軍配をあげたのは著しいことで、このことは『フオイエルバッハ論』にも現われる。なおチ氏は『自然弁証法』下巻一五九―六一頁を引照し、エンゲルスが既にマクスウエルの一八六五年に報告された『電磁場の力学的理論』に関する一八六四年の研究を評価していたことを指摘して、エンゲルスには、マクスウエルの意義がまだはつきりしていなかつたという見解（『自然弁証法』上巻七三頁）を駁している。あるいはリャザーノフの解題の末部は、その前年二四年に表面化した機械論者と弁証法論者との哲学論争を反映しているのかも知れない。ステパーノフは現代自然科学の発達に関連してエンゲルスの唯物論のいかなる形態を修正すべきかという風に問題を立てていた。）

これが確定されると直ちに第二の問題が起らざるをえない。宇宙が熱平衡に達するという考え方の一面性と形而上学説を指摘したエンゲルスの第二の問題への考察後、ボルツマンやスモルホフスキー（後者は一七年に死んだロシア物理学者で、アインシュタインとともにブラウン運動の理論の確立者。ブラウン運動いわゆる不可逆運動の可逆性に関する計算を行ったが、オストワルド・クラシケルにも収まっているその研究をチ氏は同じ号で紹介している）は、この問題に接近する統計力学的手法がかりを与えたが、チ氏の考えた如くそれによって問題が解決されたのではなく、はじめて物理学の問題として提出されたのだ。エンゲルスの予想した輻射された熱が偶然に内在する必然性によって再び灼熱せる天体を生み出す物理学的過程を跡付けける課題は、宇宙進化論の根本問題として今後に残された問題である。この過程が分子運動の確率の内部で説明されると考えることはもちろんできない。かえつてこの過程の必然性・合法性が明かにされるに従つて、統計的法則性の意味する実在的内容は理解できるのであろう。（『自然弁証法』上巻第一章六八、七四、八三、下巻二五・九頁）。面白く思えるのは、チ氏が機械論者としての面目

から『エーテル微粒子の力学』を擁護し、エーテル否定説をば、光や電磁気を物体の特権な運動（属性）としてでなく『空虚』の属性として見る観念的見方だと評している点で、氏はその引合に同年一九二五年のデイトン・シ・ミリアの実験（エーテルに対する地球および太陽系の相対速度を測定した）を挙げて空間を填充するエーテル微粒子の媒質を主張している（もっともその後の諸実験から見ても一般にミラーの実験には疑問があるとされている）。

エンゲルスは『ニュートンの引力および遠心力は形而上学的思考の一例。問題は解決されたのではない。提出されただけだ。しかもこれが解決だとして教えられている。クラウジウスの熱の減衰（熱力学第二則、またはエントロピー増大の法則）についても同様』（『自然弁証法』上巻八三頁）といっているが、千氏はこれに加えて『重力の場は単なる座標系の変化によって作りえる』という理論に関するアインシュタインの言葉を形而上学的思考の例として引用している。千氏は一切の物理現象を微分子の運動から説明しないこと、従つて遠隔力といった空の空間を通じての作用を形而上学的要素と考えているらしい。ニュートン自身は重力を何らかの媒質による近接作用から説明する意図であつたということによつて、ニュートンを弁護している。しかしエンゲルスが問題にしたのは、ニュートンが天体運動において中心力（引力）の外に切線力を仮定し、かくて（神による）『最初の衝撃』を導入するに至つているという点である。『ニュートンの引力説は遊星運動の現状を説明しない、ただそれを直観化したにすぎぬ』（『自然弁証法』上巻一〇二頁）なお本節に遠心力とあるのは切線力の誤訳、附録修正表）。切線力はカントが試みた如く中心力に基く回転運動から説明されるのである（『自然弁証法』下巻九七頁）。引力がいかなる根拠から生れたかは、力学の問題ではない。力学は運動の原因を問うことなしに、ただその諸作用を分析する（『自然弁証法』下巻一一六）。重力や電気をエーテル的媒質から説明せんとする現実的手がかりがあるなら、お好きにだけやればよい。しかし、空間は時間とともに運動する物体の存在形式である。なるほど空間は種々の規定をそれ自身に備えている（属性を持つている）。例えば三次元であるとか、連続であるとか。しかし、これらの規定は空間（空

虚)の規定(属性)ではない。この規定そのものが空間なのである。この規定は實在の運動の規定なのだ。空間とは、實在の運動の一規定(または一側面)なのである。従って、空間の規定を運動する實在を捨象してしまつたあとの空虚の属性と考え、属性がある限りは、その基体たる空間充填物がなければならぬと考え、エーテル的媒質を表象するとすれば、それは全く奇妙なことだ。それこそ形而上学的思考の好見本である。そしてなおその上、エーテル的媒質の近接作用によつて、遠隔作用を説明せんとすることは、物体の運動形態を、その一規定に外ならぬ空間規定の結果とみなすことであつて、いよいよ奇妙である。空間は物体の運動の現実的な解剖から理解されるべきであつて、前者から後者が理解されるべきではない。相対性原理がエーテル仮説を破棄してその代りに空間を置いたのは、観念論的な形而上学的な迷誤を正當な軌道に復したわけである。もちろん、物理学的世界の幾何学的表示はその世界を直観化したのが、それによつてその世界自体の成立が説明されたのではない。数学的に座標の変換によつて重力の場を作るといふいい表しは、實在的に場を成立せしめる謂いであつてはならない。實在的には物体の運動のうちにおいて成立つているのであつて力学は質量や速度の概念や数学的手段でそれを模写する、つまり計量するものに外ならない。

エンゲルスの時代に、すなわちマックスウエルのころに、人びとがエーテルを仮定したところのうちには大きな理由があり、それ相当の必然性と發展性が含まれていた。力学的熱論が熱を不可秤量的な物素とする観念を打破し、当量關係によつて力学的運動に転化し、かつそれによつて測定しえる一つの運動として確定したように、電気をも力学的運動に転化し、かつ力学的運動によつて測定しえる一つの運動として把握したことは本質的な前進であつた。エンゲルスは電磁場を流体の渦運動になぞらえたマックスウエルの試みを、この意味で高く評価している。だが、物体熱の作用場において分子が運動しているように、電気的作用場において何が運動しているか。物体熱の諸作用形態が多くなるとによつて分析された後、それが分子の運動として闡明されたように、マックスウエルの方程式

によつて示される電氣的作用は何の運動なのであるか。そして、それが実際に発見されない以上は、仮説的に假定されるより外なかつた。しかも電氣波が光と同性質の運動であることが分つたとき、光の媒質として考えられていたエーテルが、電氣作用の基体として導入されたのは当然であつた。光と同様、電氣もまたエーテルの波運動と推定された。この波運動が物体分子に作用し伝達されるところに物体の電氣現象が現われ、かつ、この物体の運動によつて測定される。ここにおいて電氣的運動のない手、基体、エーテル微粒子は、従来知られたる物体（天体、地上物体、分子、化学原子）の外部に表象されることになつた。エンゲルスもこの見解を分有する外なかつた。（『自然弁証法』下巻一六〇頁）。しかしながら、物体熱が物体内における分子の運動であつたように、物体の電氣現象が、物体内の（分子や化学原子内の）微分子の運動であらうという表象が、当時何故生れなかつたかといふことは、私には全く不思議に思える。かつまたそれ以来このことを不思議に思う人びとがないので、私には益々不思議に思える。しかし、電氣の基体が分つていず、作用のみが考察され、しかも作用場が物体内のみならず真空にもわたつてゐることが知られていたのだから、それも止むをえなかつたであらう。とまれ、エーテル微分子の仮説は、それが合理的な核心を含んでいる限りにおいて、物質の構成要素としての電子および原子核として発見されたのだといつても大した反対は受けないであらう。原子物理学的研究はマックスウエルのエーテルの合理的実在的内容（運動する物体）を益々明かにしつつあるように見える。そして、それが合理的でなかつた限りは、それを物体として意味付けんとするあらゆる試みが当然失敗に歸した後、廃棄されて空間そのもの（場）に還元された。エーテル説からは、『電氣學説は誤りを意識しながら提出されているような表現を避けえないだろう』といふエンゲルスの言を（『自然弁証法』下巻一六一頁）、チ氏もゴルンシュテインも注意していない。われわれは、現在、原子核と電子のほかに、その外部にエネルギーを担う波動（ガンマ線から可視光線を経て電波まで）を表象している。しかし、われわれ

れには、これらの運動の基体として、核と電子の外部にあるエーテル的媒質や運動物体を考えたり、これらの運動をそれ自身として何かある物素的なものを考える何等の手がかりも与えられていない。われわれは光や放射熱やX線や電波において外ならぬ電子（と核と）の運動（その相互作用）を見ているのである。少くとも現在、われわれは原子を構成する諸要素の運動のみではそれらは説明されえないであろうという予測を必要ならしめる何等の事情も持っていない。恐らく今後の実験と理論は電子や核（とその要素——プロトン、電子、中性子）、陽電子等の構造を明かにし、また諸種の物体要素を明るみに出すであろう。またそれらの要素の運動形態を益々ますますせんめい闡明するであろう。ド・ブローイーが波動性を電子やプロトン一般や物質に対立せしめる見解を打破して、物質そのものの固有な存在形態として明かにしたのは、チ氏がこの論文を執筆したすぐ前の年であった。この物質波が光波のようなエネルギー波（それらの波動がもつエネルギーの粒子性、作用量子の観念は今世紀以来確立されている。）とどう関係付けられるかの立入った点はいまのところは、不明である。しかし、一般的につきのことだけは確かなように思われる。それは、エネルギー波動の諸作用を確定し、力学的に測定することもできるが、そのことによって、われわれは物質要素の運動の一形態（または物質要素の運動の作用場の性質）を研究しているのであって、その要素と別な何かある物素的なものを研究しているのではない。遠隔作用という観念に不安を感じて、その間に媒質を考えたり、その遠隔作用の起る原因をその媒質に求めたりすることは、人間の思惟と認識の性質に対する反省をもとうとしない哲学蔑視者・経験主義者が陥る無批判な形而上学的な観念論的な考え方の一例である。媒質による近接作用の考え方は、媒質が物質そのものではなく空間であるという相対性理論によつて出発点へねじもどされた訳である。そして今度は、その空間を物質（波）の存在形式（運動形態の一規定）として再発見することが問題となったのである。

チ氏の論文は、前記の如く、デボーリン派に対する機械論派の主張を代表するものとし否定的評価を与えられて

いるが、機械論派の最も著しい特徴は、自然界の一切の質的变化を量的変化に、物質の多様を物質の統一に『還元』せんとするところにある。現代自然科学は決定的にそれを成し遂げたのであって唯物論者はその自然科学の法則によって世界を説明するばかりだ、弁証法は観念性を脱し自然法則として実現されたのであるというのがその主張である（なお『自然弁証法』上巻一〇四頁、一二四〜九頁参照）。これについてチ氏は、エンゲルスからの二つの引用を対立させている。一つは一八七八年のもの『物理学、殊に化学においては、量的変化による不断の質的变化（量の質への転化）が起こるのみでなく、量的変化による被制約性を示しえない多くの質的变化も認めえる』（『自然弁証法』上巻二二五頁）、いま一つは一八八〇年ごろのもの『自然においては、いずれの個々の場合に対しても精密に確定できるように、質的变化はただ物質または運動の量的増加もしくは量的減少によってのみ起りえる。……物質あるいは運動の増加が、もしくは減少なくしては、すなわち当該物体の量的変化なくしては、その質を変化することは不可能である』（『自然弁証法』下巻八二・三頁）。チ氏によれば、エンゲルスにこの見解の相違をきたさしめたのは、その間において彼がメンデレーエフの周期律を知ったためである（『自然弁証法』上巻五四頁参照）。これは機械論者とデボーリン派との論争点となった問題で、もちろんチ氏の誤解であろうが、一見もつともらしく思わせる。質の量への転化ないし還元、また測定されえる本質を分析すること、適当な単位を発見すること等は、科学にとって必然的な契機で精密科学の成立しえる根拠である。科学は日毎に、事象の質的变化の量的被制約性、多様な質の基体たり本質たる単純な要素の量的関係を掘り起して行く。しかし、エンゲルスが量的変化による被制約性の示されざる質的变化を云為したのは、未だメンデレーエフを知らなかったためではない。ロータール・マイエルを知っておれば充分である（『自然弁証法』上巻二二六頁）。エンゲルスにとって大事な点は、質は益々量に分解され、量的決定性の下に闡明せんめいされてゆくであろうが、この量によってその質を汲み尽し、説明し尽すことはできないということである。質を量に關係くわい付け、量の側面（量的契機）において捉とらえることは、その質を実際的に支配す

る媒介である（運動の測定可能性は力の範疇に価値を与える『自然弁証法』上巻九四頁）。だが、熱現象の本質が¹ mv^2 をもって測定しえる分子の力学的運動だとしても、それは量の側面で捉えられた限りの熱であり、熱現象の一契機であるが、熱という質の他の諸側面をそれから説明し尽すことはできぬ。例えば熱伝導の非可逆行程は、個々の分子の運動を支配する力学法則からは説明されえず、従って² mv^2 からは説明されえず、ただ全体としての分子の上へのみ統計的に現われてくる運動として、その法則性の依つてきたる根拠は別個に考察されねばならぬ。諸元素の性質を核外電子の数と配位に帰したとしても、それによつて諸元素が生体のなかで演ずる質（生理機能）まで説明できぬ。生理現象において諸化学物質は原子的分子的構造に対応した諸性質を契機または側面として保持するとしても、これらの諸性質が生理現象という特殊の過程の中に総合され上揚されて開現する質は、かかるものとして別個に考察されねばならぬ。恐らくかかる質はその生体の進化過程の法則からのみ解明されるであろう。実在世界におけるすべての事象は一定の過程を経て成立しているのであつて、事象をこの展開過程、史的展開、相互関連から抽象して、ただそれだけで考察すると、その事象に特有な質（属性、具体性、現実性）の法則性と根拠とは理解されない。そして結局事象が、その構成の寄せ集めとして、機械を組立てるようにそれらの要素から組立てられたものとして理解されることになる。これが機械論である。機械論は要素の量とそれらの配合（均衡、バランス）とで世界を説明しようとするものである。この考え方を徹底させれば、世界の一切の要素を結局、もはや質の差別を持たない、従つてもはや分解しえない物質単元に帰着せしめることが（ギリシャ自然哲学以来の）機械論の理想である。しかし『量が質に転化するとともに質もまた量に転化する』（『自然弁証法』上巻二二六頁）。われわれが質を分解して量に帰着せしめる方向を押し進めて行けば、どこまででも進めて行くことができる。だがわれわれの到達するいかなる量もそのなかに一定の質の複合を蔵している。量的にのみ取扱われる対象も、それが実在するものである限りは、質の過程から生成したものである。化学元素の統一的基体としての原子から電子や原子核に到達

しても、後者自身がまだ複雑な構成を持つていたのであって、それ自身ある過程を通じて成立したものとして考察することを禁ずる理由はない。物質の絶対的な質的同一性への還元についていえば、『われわれはまだそこまで進んでいない』といい、『経験的には反駁も証明もできない』（『自然弁証法』上巻二二七頁）というのは全く相対的でない一方で、本質的には、そこまで進むことはないし、そもそもそういう境地が実在の中なかにあるはずもない。それは思惟の上での抽象であり一面的な思惟の中にのみ成り立つ観念上の表象なのである。チ氏は、自分の父親とメンデレーエフとの対話を引照し、後者が物質の帰一性を認めなかったことを不満としている。

チ氏はなお機械論派の面目から、近代物理学には既に理論的思惟（弁証法的思惟）の無視という事情が存在していないことを、エンゲルスは軽視したのではあるまいかと疑っている。近代物理学が事象の弁証法性を益々ますます開示してゆくとするれば、われわれはそれによつて弁証法的思惟を顧る必要がなくなるのではない。否、概念を事象いに対して単に行使するだけでなく、益々ますます反省的に、すなわち意識的に行使する必要が生じてくるのだ。「反省されたる概念」としての弁証法（『自然弁証法』上巻一三七頁、下巻二二六頁）の研究が必要となるのだ。エンゲルスは自己の労作が不用となるかも知れないと考えた。それは弁証法的思惟を研究する必要がなくなると考えたからでなく、エンゲルスの指摘がなくとも、自然科学の弁証法的内容は、自然科学者に形而上学的概念の批判的反省と弁証法の研究の必要を意識せしめるであろうと考えたゆえである。物理学の発展の中なかに客観的に確立されつつある弁証法概念は、必ずしも意識的にもたらされたものではないから、常に反省され、意識化されないと、チ氏のこの論文のように意識が偏狭となり一面的となつて、物理学そのものの状態と喰いちがつてくる。以上が多少ともわれわれに關係のあつた翻訳文献の目録である。

さて、さきに私は奥氏から岡氏まで誰も何も発表しなかったと書いたが、実は、この間に注目されずに終つた注目すべき力作があつた。昭和二年の八月(?)に『プロレタリア科学』に載つた『生物学と自然弁証法』で、恐らく

『反デューリング論』の影響から生れたものと思われるが、弁証法の論理の立場から自然科学的事象を論じた最初の文献である。筆者は編集後記に依れば意気に燃えた専門の生物学者とのこと。第一節は、『組織培養法と弁証法第一法則』として、この組織学上の一新方法によつて、量から質への転化の法則を例証したものであったと記憶する。第二節に『悉無律と質量転換の法則』を約束してあったが、この雑誌は創刊号だけで、あとが出なかつた。これは、昭和四年に創刊されたプロレタリア科学研究所の同名の機関誌とは別のもので、二三の好事家の同人雑誌、しかも文学的な雑誌であつた。

岡邦雄氏の『唯物論と物理学（レーニン「唯物論と経験批判論」第五章を読む）』は『太陽』昭和二年十一月号に載つた。これは二つの意味で非常に特徴のある論文であつた。第一に、当時の氏の社会科学（マルクス主義）に対する考え方がある一つの典型をなしていた点において、第二に、知識または認識の相対性の事實は決して観念論を是認するものでなく、弁証法的唯物論の認識論の確認であるというレーニンの眼目的命題を理解せず、従つてそれを検討することをしないで、相対性の事實から観念論を主張しているという喰い違いにおいて。第二の点は第一の点（すなわちマルクス主義の唯物論に対する先入的偏見）をもつてレーニンを律し、従つてレーニンを研究しなかつたことに由来する。当時氏は弁証法の適用を社会（歴史）に限り、社会科学にのみ弁証法的唯物論は妥当すると考えておられたが、もちろん個人的な特徴はありながら、考え方の根本は福本氏三木氏の哲学その他直観的に『プロレタリア的立場』に立っていた当時の多くの知識層などの観念と共通している。すなわち、この観念においては社会科学が科学として確固たる認識論的基礎の上に把握されず、弁証法的唯物論が実践を認識する科学の方法としてでなく、実践そのものの方法、実践する方法すなわち実践理念として解されている。実践することとこの実践を認識すること、実践過程とその実践の認識過程とが、直観的に重ね合わせられるものと見なされ、後者は前者の対応的表現として表象されている。岡氏は自然科学と社会科学との間に共通の出发点、境界領域を認める。感覚、物質、外

部世界、客観的実在といったような世界、これである。この世界の上に人間の生活があり、社会の組織がある。社会、自然両科学は、この領域を中なかに挿んで初めに実践ないし実験があり、理論がそれに追隨する特質によつて、一つはひろく人間的現実、価値と実践の世界に進み、他は直ちにせまく自らを相対的現象に局限しつつその相互關係を求め、没価値の物理的世界を構成しようとする。マツハヤポアンカレの指摘している自然科学の方法は、最初から客観的実在を放棄してかかっているのではなく、それから出立して構成に進んでいるのだ。物理的世界はわれらの構成し、われらがこれを自然に与えたもので、意識外の実在ではない。ところでレーニンは、この『物理的世界』こそ人類の頭脳への客観的実在の相対的反映、この実在に対する人類の実践的交渉の経験に基いて、益々ますますこの実在を正確に全面的に写してゆく、相対的反映像であるということを、弁証的唯物論の認識論の名において主張しているのだが。岡氏はそこがレーニンの論点だということに一向気がつかず、この見解をプランクに帰し（一）、レーニンを知識の相対性を認めない形而上学的唯物論者、素朴実在論者として扱い、極めて非常識な読み違いの引用をやっている。そして、曰く、物理学の認識論上の議論がどうあろうと、客観的実在が『社会的実践の基礎として充分な確実性を有つことは』認められねばならぬ、と。岡氏は、まさにこの実践こそが、思惟のなかで構成された物理的世界と客観的世界との一致不一致、その世界の実在性の程度を証明するという命題に注目しなかつたと同時に、社会科学に対しては一つの素朴実在論的認識論（対象はあるがままに見え、見えるがままに実在する）を指定したのである。従つてもはや社会科学においては認識の問題は問題とならない。ただ客観的実在の上に、素朴実在論的意識をもつて実践し、価値（理想）を実現することが問題とならぬ。しかし、『唯物論と経験批判論』のつぎの第六章は、人間の知識が発展する自然の相対的反映であるように、人間の実践意識、社会意識は発展しつつある客観的な社会的実践の益々ますます正確となり行く相対的反映であることを主張している。岡氏にあつては実践そのものを対象的に認識する問題は全然問題になりようがない。そして結局どうしてもこんな風になろう——実践は社会

意識にのぼっているがままに行われているのであり、行われているがままに社会意識にのぼっているのである、と。そして結局どうしても社会的実践の動きは、それぞれの実践主体の自己意識（価値実現）の過程に還元されることになる。ここまで来れば、完全なルカチ・福本・三木の観念である。さらに、かかる観念での社会意識を社会科学と考える立場に立つと、極めて自然に、それぞれの実践主体（例えば階級）の意識に応じて、それぞれの階級的科学、科学の階級性が結論されるにいたる。これに反し、社会科学が主体の自己意識であり、各自の価値（例えば階級的合目的性）実現の実践に素朴実在論の精神で追隨する理論だとしても、自然科学が没価値の物理世界を構成する理論ならば、それには階級性はないだろうということになる。そこで読者諸君は、法則定立的没価値的自然科学と個性記述的価値的文化科学を分けた新カント派が、『階級科学、階級的認識論』説の御親類であることを知るだろう。自然科学に階級性がなく、社会科学にはあると唱えた人びとは、すべて社会は自然とは違った風に、すなわち価値的に価値判断的にのみ捕捉されると考えた人びとであったのだ。（後の田辺博士の階級性論も）すなわち有産者階級は観念的価値の中に自己の存在の反映をみ、無産者階級は物質的価値の生産労働の解放のなかに自己をみる。価値の転換は科学の転換をもたらず、と。——こういう考え方はすべて弁証法的唯物論の認識論を理解せず従って客観的実在を認識せず、従って直観的表象に訴えて、現実を理解せんとするものである。

当時『太陽』の編集は平林初之輔氏がやっておられて、岡氏の反批判を書かせて頂くお約束をしておいたのだが、岡氏への反批判を徹底化させようと思うと、どうしても当時の定説だった福本説を根底的に批判せざるをえず、益々後者の体系的批判の仕事の方にひかれお義理を欠いている間に、『太陽』は廃刊することになったが、しかし、廃刊号（翌三年二月）には高橋庄治氏の『自然科学方法論の唯物論的理解』という反批判論文が載って大いに意を強くしたのであった。この論文の内容はいま記憶にない。かつまた遂に再読の便宜もえられなかったので、ご紹介できないのを筆者高橋氏と読者とに深くお詫びしたい。氏の付記によれば、氏は岡氏と親しく会談され岡氏も

見解が変ったことをいわれたそうである。その後の岡氏がどういう道を歩ゆまれたかはここに記す必要を認める。昭和二年には、終りごろに東大新人会関係の医学者の手で社会医学に関する本が出ている。私は読まなかったし、この方面の事情は、私もあまり語るべきものを持っていない。いずれ独立の題目たるべきものであろう。

また同年なかごろから翌年なかごろまでに十二冊を配本した『無産者自由大学講座』（南宋書院）のなかには、『天文・地理』（堺利彦）、『生物・人類』（山本宣治）、『生理・心理』（安田徳太郎）、『物理・化学』（伊藤靖）と、自然科学に関するものが四冊入っているが、これも残念ながら、稿了までにみる機会をえなかった。ただし『生物・人類』は『無産者生物学』中に収められていることは前述した。（前述、山宣や安田氏の周囲に、「自然科学とマルクス主義」の研究団体の案が起ったのはこのごろ（つぎの年のはじめ）であった）。立場の上では、福本流のまたデボーリン流の方法論的形式主義とは凡そ無縁で、これらの影響がわれわれの頭を支配する以前の時期に属せしめた方が妥当に見える。

しかし流石に執筆の時期が時期だけに（恐らく昭和二年の初めか）、唯物弁証法という術語も使われており、もしかもそれが対象を関連、運動、相互作用、生きて全体において認識する意味に理解されていて、この名称のもとに移入せられた特徴的な方法論癖（弁証法を討論術や論証術にかえる傾向）は一向にみられない。ある論者は『人類進化もまた唯物弁証法的に行われた。すなわち生物学にも唯物史観が適用される』（『無産者生物学』一四三頁）の一句を引用して、ことほど左様に素朴なものであったと苦もなく片付けているが（唯物論全書『自然弁証法』一五三頁、因みに引用では生物学的的の的が落ちてゐる）、この評言は軽率である。この引用は『環境要件と生物の現象形態との相互作用はここにも見るべく、人類進化もまたうんぬん』と続くのであって、生物学的にもすなわち生物学が明かにした限りにおいても、人間の発展は唯物史観の諸前提を立証していることをいおうとしたものだ（次頁には『人類進化の歴史はもちろん社会進化の前途を暗示する』と結ばれている）。そしてこの点の闡明の中に無

産者階級にとつての生物学意義の一つを見んとするのが、山宣の思想たることは前記の通りである。

ただ山宣において遺憾な点は『人類の進化は特に頭脳的能力展開がその特徴である』という考察で、この点でまだ観念論的説明の偏見を残している。何故なら、人類の今日の地位を、樹上から地上に降りて直立生活をはじめたこと、頭脳による身体諸器官の活用統制宜しきをえたことに帰しているが、直立歩行と意識の発展を促したもので、労働であり社会的労働であることを未だ明確にしてはいない。この執筆と配本はエンゲルスの『猿の人間化における労働の寄与』が訳出される前であつたらう。しかし、その以前といえども労働の意義に想到することがそれほどあるとは考えられない。ボグダノフ者流にいわせれば、山宣が労働する階級の立場から科学を組織ないし展開しないで、特権階級の立場で考えたからだということに成るかも知れぬ。なるほど、山宣には客観主義的誤謬が精算されずにいると批評している人もある（『唯研』第七号九六頁、なお客観主義とは、科学は一定の階級やその党派の観点からのみ展開されえるものだという考え方に対し、科学は対象を客観的に分析するところに成立つという主張である）。山宣は客観主義を誤謬でなく正道だと考えていた。そしてその科学的結論としての生物進化説が、思想的社会的に如何なる影響をもつたかを欧米および日本について述べている。このあたりは該書の圧巻で、生彩に富み、現在のわれわれにも生いきと迫るものがある。実にレーニンが指摘した如く、哲学思想は最初から党派的である。宗教（信仰主義）と科学、観念論と唯物論その中間の道はない。截然とこの二つの陣営に分割される思想闘争はそれぞれに一定の社会的影響を有ち結局において、その時代時代の対抗階級の思想的傾向に照応せざるをえない。しかしレーニンも山宣も科学すなわち唯物論的認識が階級的観点から展開されるとは考えなかつた。レーニンも山宣も経験を通じて益々正確な客観的実在の模写に接近してゆく立場、あるいは『科学的態度』からのあらゆる逸脱が直ちに坊主主義と統治階級の利益に転用されることを述べているが、いな更に科学的真理の弁護論的歪曲や『御用科学』について述べ、事実の結論の前にたじろがざる理論的傾向は、現代において結局無産者階級の傾向

に照応することを述べているが、科学的唯物論的精神の本質が無産者の階級性に還元できるだとか、その階級的傾向から生れるなどという機械的な直観的な断定は夢にも思いつかなかった。

前記の論者は、山宣はまだ客観主義を精算し切っていないが、『しかし生物学の階級性、及びイデオロギーとしての生物学に関して堂々と述べている』と指摘しておられる。とはいえ、その階級性、階級思想性は、レーニンなどの考えていた形態のもので、福本的、三木的、デボーリン的形態や昭和八年ごろの党派性論者の形態のものではない。

山宣が人類の生物学的進化の根底にも労働の事実が横わっていること、かくて一層高い意味で、生物学的にも唯物史観が妥当することを明確に表象するにいたらなかったのは、彼が客観主義を通じて、労働から遊離し、労働を蔑視する階級思想の立場を混入していたためではない。かえって当時にあつては労働が何らか階級思想的なもの、として表象される傾向が一般的で、この労働を現実的なもの、科学の対象として取扱ひ、その諸形態を分析し発展を跡付けるといふ研究が未発達であり、山宣にとつては自己の理論のギャップをちょうど補填するに必要な知識が見出せなかったというのが事の真相であろう。以上の点は別として、何さま生物学的知識の民衆化の天才が書いたこの著作のことで、科学の大衆化通俗化の観点からも種々面白い問題を持つている。もちろん目的は生物の進化過程を講座の読者に理解させるにあるのだが、その際山宣は概念や過程を『直観的に明瞭ならしめるために』小作争議や労働運動上のよく知られた事実を例にとつたり比喩に用いたりして説明している。科学の通俗化にあつては、読者や聴講者がいかなる概念や考え方に慣れているかを知ることが最も大切で、前提や比喩を常にそこからとるの積極的な利益がある。しかしそれと同時に比喩の過度の使用はかえって理解を混雑させる。ある過程まで当該事象をそれ自身として把握する弁証法的思考に慣らせるのは絶対的に必要なことだ。極言する人は自然科学的啓蒙においては事実の知識よりも科学的考え方の習練こそが大事だという。が、こんな偏向は論外としても、総じて科学的

成果がえられた手続き、あるいはその成果の自然的関連から切離して、比喩や類推を用いて成果だけを含み込ませることには、悪影響が伴わないではない。山宣は専門の生物学者で、社会的な比喩や比論を駆使し、また学説の社会的意義を剔抉しながら（ちなみに科学理論の——階級的、思想的、実用的意義——の指摘もまた通俗化の一大要素である）、しかし最後には生物進化の過程を実証的事実に基く論証によって読者に理解せしめることを忘れなかった。

私は山宣の方法と、三木清氏の『社会と自然』（『思想』昭和四年八月）のなかの見解とを一寸対比しておきたい。三木氏は社会的意識が常に科学に認識の型あるいは理念を提供すると考える。ダーウィン説はイギリス市民社会の自由競争の意識たるマルサス人口論の理念を生物学に適用したもので、自由競争華かなりし古典資本主義社会が他の形態に推移するとともに生物進化説も他の理念（無産者的な）によつて見直され改革されねばならぬ。こういう社会意識の眼鏡がなければ、生物過程が発見できないという考え方をエンゲルスがどんなに突ったかは『反デュリング論』の読者は知っている。マルサス説は生存闘争による進化過程を直観的に明瞭化して表象する上に（いわばこの過程を自己自身に通俗化する上に）好都合な手段であつたらうが、これによつて進化過程を発見しかつ説明したのだなどといったら、ダーウィンはびっくりしたであろう。しかも三木氏はそうしたゆき方こそ科学に本質的なのだと考えている。

昭和二年の終りにあたって、福本氏の『マルクスの弁証法』の理論は、政論の方面で破綻が摘発されたが、その哲學的根本思想は決して単に氏個人の名と結びついたものではなく、本質においては一般の左翼傾向のイデオロギーに論理表式を与えたものに外ならなかつたので、類似の思想は福本イズムの形式的凋落とは運命をともにしなかつた。そして時に応じて各種の形態で表面化し、屢々その後の政論も侵蝕した。福本イズムのヘゲモニーの瓦解の後、レーニンの『唯物論と経験批判論』およびデボーリンの諸書から直接的に影響された傾向が表面を支配したが、『マ

ルクス弁証法』的表象は依然として人びとの頭に残った。この年に始つた三木清氏の進出は、哲学的に無力化され美文学に墮していたとはいへ、やはり科学理論におけるそれと類似の表象の宣伝であった。これを一極とし、『唯物論と経験批判論』を他極としデボーリン説を両極の疎水として、二、三年のうちにあらゆる段階と色彩と系統の哲学思想が弁証法的唯物論哲学の名の下に散開するにいたつた。

三木氏の自然弁証法に対する極めて特徴的な立場は是非紹介しておかねばならぬ。いわく——『いわゆる自然弁証法の問題を論ずるに当たつても、弁証法が果して自然をその固有なる地盤としているか否かは最も吟味を要するであろう。総じて自然弁証法を唯物史観の根底に据えようとする立場は、左の問題を十分に考慮すべきであろう。一、自然弁証法を除いても弁証法的なる史的唯物論は独立に成立しないか否か。二、弁証法の成立する固有なる領域は自然であるか否か。三、自然科学はいわゆるイデオロギー的要素を含まぬか否か。四、最も進歩した自然科学は現実に弁証法を支持しているか否か。かくして最後に問題は根本に還ってくる、弁証法とは何であるか。』(『唯物史観と現代の意識』九八頁)。この定式は『あらゆる概念についてその由来する固有なる地盤が認識されることは大切である。……概念をその由来に従つて知らないならば、われわれはただ概念に引ずりまわされるのみであつて、これを支配する優越なる位置に立つことはできぬであろう』という主張の註として書かれたものである。三木氏が理解しなかつたことは、科学的概念の最も根源的な由来は客観的実在にあるということ、概念自身はその相対的な模写として、それに照応するものであるという点である。氏は、概念を、典型的に分類できるさまざまな歴史的社会的人間存在形態への照応という側面においてのみしか評価できなかつた。その後氏は客観的実在の反映ないし模写の観点を取り入れられたが、主体の存在の『存在の仕方』に適應した理念の眼鏡を通じてのみ反映するのであつて、この眼鏡を取り代えるところに科学の發展、より高い反映があると考えた。氏が前記『自然と社会』で、エンゲルスの前掲書を指摘して、唯物史観の自然科学的基礎付けの必然的意義を認容することに転向したときも、その理由

は、唯物史観の人間学には人間を一方において自然的所産と見る解釈が含まれているというにあった。人類の生物学的進化が客観的實在に照応する真理ならば、それによって唯物史観を深め、豊富にし、強固化すること、唯物論者のこういう任務は氏の意識には上りようがなかった。

福本氏の哲学の没落後、最初にその精算を行い、『唯物論と経験批判論』やデボーリンの精神で左翼哲学を定式化し、あわせて三木氏等の「新進哲学」や河野密氏その他の社会民主主義者の哲学傾向に対する態度を明かにしたのは、『マルクス主義講座』第十一・十二卷（昭和三年十一月十二月刊）における服部之総氏の『唯物弁証法と唯物史観』であった。この内容についてはここには触れる必要を見ない。昭和五年の夏プロレタリア科学研究所が三木氏との哲学的提携を絶ち、三木哲学を棄却したとき、氏の見解（この関係においては私自身の見解も当時氏と同質と見られていたが）もまたあわせて克服されることとなった。これに反し、同十二卷における竹村文夫氏『弁証唯物論と自然科学』については若干述べる必要がある。

この題目はその前年における講座のプランには入っていなかったもので、ここに一つの関心の推移発展が見られる。（この問題への関心といえば、同じ昭和三年春、左翼系統の学者を総動員して五社連盟のマルクス・エンゲルス全集が計画されたことがあったが、その夏だったか、私は『自然弁証法』が『編集技術上』全集から除外されることになったという通知を受けたのを想い出す。）竹村氏の論文もやはり『唯物論と経験批判論』、『反デューリング論』等を背景とするもので、数学および物理学の場合について唯物論的認識の正当性を論じ、外国の物理学者の観念論的考察や『わが国における自然科学の哲学的考察——田辺元、桑木或雄あや、石原純の諸著述を初め、岡邦雄、平林初之輔（同氏には田辺氏の『科学概論』を簡略化した解説書の著がある）に及ぶ——』を論断している。行論は簡潔、断定は概して正確、当時のものとしてはなかなか傑作である。面白いのは、『認識論の階級性』の観念、すなわち元来唯物弁証法なるものは——福本氏の表現を借りれば——『有産者社会の自己批判者（プロレタリアート）

の理論上の根本見地、方法論、認識論である』という立場、からの考察が、全然見出せないことである。最後の節『自然科学の社会性』において筆者は、『科学の目的は矢張第一に「真理の発見」にあるが、その科学的真理をあらゆる社会的障害を除去して活用する必要がある』という風に考察を進めている。——真理のための科学であると同時に人類（一般無産階級）のための科学でなければならぬ。社会科学においては『真理のための科学』すらも弾圧されている。自然科学に保証されている『研究の自由』の裏にも『富国強兵』なるブルジョア階級の意図が隠されてはいないか。そして筆者はプロレタリアートと社会的盲目から覚めた自然科学者との提携を暗示して筆を結んでいる。科学の社会性に対するかかる考察はこれをもつてしばらく跡を絶った。その後の科学の社会性（および階級性）の考察は、すべて、いかに社会性（すなわち生産、技術、階級、階級意識等の諸要素）が科学的認識を条件付けるかという認識問題に傾向した。

とんで昭和四年には柘植秀臣『自然弁証法と生物学』（『新興科学』八月号）が現れた。これもまた福本・三木の観念とは無縁で、自然研究者の常識が前面に出ている。ところで、竹村氏の所論にあつては、認識の唯物論性、弁証法性が専ら問題であつたが、ここでは対象の性質上生物的自然的弁証法性があわせて問題とならざるをえなかつた。そして必然にいわゆる弁証法の法則が問題となつてゐる。だがまさにこの点に弁証法をこなすことに對する自然科学者の、もしくは当時の一般的な、哲学的未熟さが現われている。この論文の目的は『生物現象から導き出されたところの自然弁証法の理解と、反動的な生物学者の思想の非科学性を追跡究明する』にあるが、氏は例えばその自然弁証法を三つのテーゼに要約している。すなわち、無機物質と有機物質との絶対的差異を認めぬこと、生物の発生および変異における質と量との飛躍的転化の存在を認めること、生物体を常に発展と変化の段階にある具体的統一体として（一方面のみを抽象することなく）理解すること。そしてこの三テーゼがそれぞれ、弁証法の三根本法則、対立の融合、量と質の相互移行、否定の否定に對応することを指摘している。しかしながら、現実には複雑で

あり、その思惟的反映も複雑であるから、自分の思惟方法を反省してかかる抽象的法則に対応するものを見出そうとすれば、いくらでも見出せるだろう。だからといって自分の思惟方法が弁証法的であると必ずしもいいえない。そうした法則は問題にぶつかった折、いわば試誤法（エラー・メソッド）といった風に、種々考え方を変えて見るときの手引として役立つにすぎない。筆者は主題を三つに分け、最初に生物学的概念を社会事象におしつける試みを批判し、ついで生氣論および目的論を批判しつつ、生命機械論、機械論的発生説、發育機制学等に正しい方向を求めている。現在の読者は機械論という言葉に耳触りに感ずるが、ソヴェト連邦の機械論派対弁証法派の論争は一般的にはやっと思昭和五年に紹介されたのであり、それがエンゲルスの機械論批判は少くとも『自然弁証法』が訳出されるまでは一般的でなかったのだ。いうまでもなく、筆者は機械論という術語を幾分不正確に使用したのであって、物質過程から一元的に生命の過程を、しかも量的変化が質的变化をもたらす仕方、説明すること以外の意味ではない。しかし、恐らくは現代の実験生物学的な偏見から、氏は生物の発生と発展の史的過程からその機構を抽象して、過程を生物体制内部において分析される物理化学的要因のみに帰し、外界との相互反応が生物体の上に生み出す変化を捨象して表象するという機械論に陥っている。従って氏は『ラマルクがダルウインより優れたる見解を抱いておった生物学者と思』つておられる。このことによつて、氏は部分的に『自然弁証法』を原書で利用もしているにかかわらず、理論生物学の最大の問題を逸している。なお筆者が『将来の生物学は単なる学としての生物学の存在は許されず、それは応用生物学の範疇にまで高まり、社会事象に対する諸問題との交互作用の中に入り込むのである』となし、正しい人口問題、人種問題に対する寄与を想像したりしているのは、表現の不正確、不明瞭な点はあるが、生物学の階級性を唯物史観とのチーム・ワークの中に認めていることが覗われるのは興味がある。同年同月『思想』誌上に、前掲三木氏の『社会と自然』と並んで、小倉金之助博士『階級社会の算術』が現れた。博士の数学教育、実用数学の唱導には、われわれ、高校時代大いに共鳴もし、尊敬していたので、この論文は深い関

心をもって読んだのであった。内容はプレハーノフの『階級社会の芸術』（蔵原詔昭和三年九月叢文閣刊）に示唆され、ルネッサンス期の寺院の算術と商工階級の算術との内容上の差異は単に学派的な、学説上の、対立として解釈しえず、ただそれぞれの階級の要求および趣味を反映するという意味での階級性からのみ説明しえることを、当時の算術書から実証的に結論したものである。もちろん『天才が発見した算術上の法則それ自身は、社会関係から独立している。』、寺院においても商工階級においても二と三の和は五である。『しかしながら天才の予備知識が如何にして蘊蓄うんちくされたか、また天才の注意がいずれの方面に向けられたかに対して、社会階級は重大なる役割を演じた。』ところで、後でも述べるが、そのころ私は、理論の本性とその固有の発展条件をせんめい闡明するに無力な（あるいはそれを歪曲する）歴史的社会的考察、階級的考察、なるものに一般的に反感を持っていたので、正直なところ殆んど感銘を覚えなかった。ただ、四則算まで階級的解釈に従わせなかったのが助かりものだ位のところだった。もつともこれには反対もあった。

同年十二月号の『プロレタリア科学』で大川豹之介氏が『純然たる数学的の論理や法則それ自身』もまたやはり社会的歴史的法則に従うのだという命題をもって登場した。当時はこんな命題でもが格別奇妙に感じられないような一種の心理状態、もしくは病理状態が唯物論信奉者の間に相当浸潤していた。実に、論者自身自分でいっていることが自分にわかっていない底の命題なのだ。当時は理論や認識の客観性の問題が明瞭に理解されていず、そうした問題をも階級的被決定性から割り切ろうとする風があった。

博士が階級的制約性で割り切れない要因を数学の中に残したのは、実証的な数学者的態度が然らしめたのである。それはちょうど生物の進化を物理化学的条件のみで割り切ることができないのと似ている。そしてこの割り切れない固有の要因のせんめい闡明の中にそれぞれの科学の本来的な課題がある。その意味で博士の考察はいまだ数学そのものの発展の必然的な法則を照明する試みではない。であればあるだけ、階級性によって照明されえる範囲には一定

の限界があることを意識せざるをえないのは当然であつたろう。ところが大川氏は、博士が数学を応用数学と純粋数学とに分け、前者は階級的だが後者は超階級的自立的に発展すると断定しているかのようによに表象した。真理の客観性という、機械的に、いつでもそれが無前提的超越的に超人間的な現実の外のどこかで育成されるように錯覚するのは、科学の歴史的階級的被制約性万能者の裏返しにされた姿である。大川氏の非難とは反対に、博士の研究は、純粋数学の組織やその応用、応用数学やその純粋原理の知識が、いかに階級的な実践生活に適應した仕方、伝承され蘊蓄うんちくされ発見され発展せしめられ、秩序立てられるかを明かにするものに外ならぬ。しかしながら、かく発見された事物の数学的関係の法則が客観性を含み、単にその階級のなかでのみしか通用しないというような性格から独立した意義を持ち、これを歴史的階級的形態から剥いで、完全な、単純化した、普遍妥当的な形態において取上げることができること、このことを博士は当然疑っていないのだ。それは、かかるものとして既に社会的人類の共有財産となつたのであり、レーニン流に言えば、それを通じて益々客観的真理の認識に深まる段階である。認識せしめるものは一定の事情の必要である。しかし、必要は、事物の客観的法則を認識せしめるのである。

こういう唯物論的認識理論の立場で知識の堆積を整理するという事柄自身が根本的にはいかなる実践的必要性に相応あいおうするものであるかは、いまのところ暫く問しばわずとするも、こういう課題に直面するや否や、われわれは小倉博士が残しておいた数学法則それ自身の領域、すなわち数学上の論理や諸法則の弁証法的な相互連関、その史的展開の必然的関連性の分析に進むことになるのは明かだ。数学史は、諸法則が単に発見され堆積されるのみでなく、それらは更に必然性をもって発展し、従つて学説の歴史的展開は同時に数学の理論的体系の論理的展開と相互に対応するのだということを示している。大川氏は数学史からこのことを学ぶべきだった。数学は（一般に科学は）歴史的社会的制約性の下に発展するが、しかしそれ自身の法則性でもって発展する。その法則性の一つの契機は、数学的知識は現実世界の数学的相互関係の反映または模写として必然的段階を踏んで深化するということである。数

学の対象たる現実の諸関係は、人類の実践がその思惟する頭脳の前にこれを堆積するのであって、それは常に歴史的社会的に限定されている。しかしながら、この見地においては、思惟する頭脳が必ずしも常に階級的に限定されているとは限らないことが明かとなる。何故なら、少くとも身分制度や社会的孤立から解放された社会においては、あらゆる方面の実験や経験や研究を広範に収集し、従って自己の見解を移行させる可能性が相当に開けたのだから。しかし、小倉博士は数学の階級性の考察を、専ら「階級や社会層はそれぞれの必要・趣味・意識を規定し、これが科学に反映され表現される」という公式から行ったために、数学史の本質的な道行きを相当程度に不明ならしめた点がありはしないかと思える。

博士は同じ系統の研究を引続き発表されたが（『数学史研究』第一集岩波書店刊に集録）、例えば翌年のフランス数学史の一連の研究のなかで、デザルグやデカルトの業績を、新興ブルジョアジーの意識ないし心理としての生産技術的機械的理念において幾何学と代数学を更新せるもの、すなわち図形や記号のメカニズムとして作り上げたもの、と評価しているが（上掲書一二三頁以下）、これによってわれわれは射影幾何学と計量幾何学の二系統の形成について、また前者の一時的忘却について何等の概念をえることもできない。いうまでもなく、幾何学や算術的知識の蓄積、産業的および兵術的技術上の必要、透視法、力学、星学的諸問題、こういった関連から切り離して、階級的イデオロギーの特徴から学説を性格付けることは、決して学説そのものの本質をも本来の意義をも発展をも明かにする所以^{ゆえん}ではない。階級性による説明が従来冒しきった特徴的な誤りは、歴史の諸現象をその現実的諸関係から展開せずして、時代意識とか、社会的理念によつて説明すると同様な観念論に偏向したことである。科学を説明するものは、やはり基本的には一定の生産段階とそれに結びついた産業上、交通上、軍事上、社会上の技術的課題である。社会的諸階級や諸階層はその相互関係のうちにおいて、主観的意識的に若しくは客観的必然的に、この生産を促進させたり、停滞あるいは絶滅させることを通じてのみ、科学に作用するのだということとは忘れられては

ならぬ。少くとも科学の発展を説明する場合はそうである。殊に技術的課題の科学的処理は、過去および同時代の科学的諸研究や、その生産段階がもたらす実践的諸経験の理論的総括に基いてのみ遂行しえるとすれば、そしてまた実際に自然科学者はその意識でやってきたのだから、これらの媒介を捨象して、科学を直接階級性や階級意識から説明できないのは当然である。

同じ論文で小倉博士は、十九世紀の純粹数学を、ブルジョアジーの勝利と反動保守思想、職業的数学教師層の形成と数学のための数学、新人文主義の意識等から説明しておられるが、それらを通じて赤い糸のように数学の発展を貫いているものは、産業と自然科学の異常な成長の事実であつて、数学的知識の促進が基本的に要求されればされるほど、数学的諸概念の分析、数理の基礎の反省も必然的たらざるをえない。この課題がいかなる層の人びとにより、いかなる動機や意識で遂行されたとしても、それは多かれ少かれ社会的偶然に属することであつて、それぞれの哲学的理念や社会的意識において実は時代の生産的課題に協力しているのだ。もしその場合に欠けているものがあるとすれば、それはこのこと、この意識である。すなわちそのことを意識し、意識的合目的にその客観的課題に沿うことである。歴史的時代が提供する産業と実践の経験の整理から、また整理された経験を新しい課題に適用することから、科学は発展するのだということ、そしてこの科学の発展の中に客観世界の法則の認識が深まってゆくのだということ、このことが確定されえた上では、これは今後の科学の開拓の指標であるとともに、また従来の科学史の秘密を開く鍵である。『人間の解剖は猿の解剖に対する一つの鍵であり、』（『経済学批判』序説第三節）いわゆる『市民社会』が従来の社会の解剖の鍵であるように。科学の成果と育成とが、一方では特殊な観念で意味付けられたり、他方では特殊な方向に脱線せしめられたり、時代の豊富な経験から孤立せしめられたりする側面において、階級イデオロギーや社会層の理念は少なからぬ役割を演じている。が逆にその事実こそ、まさに、社会的人類の生産力の一定の発展段階と、それに対応する社会的人類の実証的経験の成長および研究者における、その経験摂取

の全面性と偏極性との基礎の上でのみ演ぜられるのであり、この契機の媒介なしには充分に説明されえない。これが科学の発展の必然的、本質的な脈管だからである。

小倉博士は『階級社会の数学』を、『フランス数学の歴史は、「社会的力の一定の結合の発生、変化及び破壊の影響を受けて起る観念連合の発生、変化及び破壊から、極めてよく説明される』』という言葉で結んでおられるが、結局においてそれは数学の歴史の最も本質的なものを保留しての話である。科学の発展は、生産力——階級——階級意識（要求、思考形式）——科学という公式で行われるのではない。生産力——経験材料とその処理——科学という系列が、それと別個の過程で形成される観念的イデオロギー的要素との交互作用のなかで、それを駆逐しつつ行われるのである。これがまたエンゲルスが自然科学史を評価する場合の一貫した立場であったことは、『自然弁証法』への旧序説』その他を読む者には明らかであろう。これがまた唯物論と観念論、科学と信仰主義の闘争の根源であり、それが結局階級の必要と結びつくのである。これからして、科学が階級の必要によって階級なかの中から生れるという考え方の不正確さ（一面性）、および階級の必要から生れ、階級意識を反映するがゆえに科学には階級性があるという判断の皮相さが判然する。従つて例えば唯物論や弁証法的科学はプロレタリアートの意識の反映であるという巷間流布こうかんの命題も、皮相の直感たるを免れない。プロレタリアートは自己の課題を正確に把握し、国民生産の指導に当るには、唯物論すなわち科学および技術学の最高の成果と結ばねばならぬ、というのが事の真相である。その時代が提供しうる実証的経験材料を、与う限り広範に整理するということが、一切の科学の第一原理であるとの見地は、科学における本質的必然的なものと然らざるもの、認識の発展の契機たるべきものと単なる認識の遊戯たるべきもの、との間を判別する可能性を与える。そして、その整理の過程に導入された法則や原理は、経験素材によって飽和され終るまでは止揚しやうされず、飽和されれば必ず止揚しやうされるという必然性に従いつつ、それ自身また客観世界の必然法則を自己なかの中に映して行く。そしてこのことの中に科学の発展と体系的関連との内的必然性、時

代の理念から、階級の意識から原理的に独立した法則性がある。

これにつき、前掲『数学史研究』の序言で、博士は方法論上の問題に触れ、モロドシー『数学の起源及び発展要因に関するエンゲルスの所説』（『科学と技術の問題』昭和九年白揚社刊）なる論文を挙げ、『数学の発展は合則的である。科学的な数学史の課題は、これらの合法則性を剔抉し、数学の発展過程をその必然性において示すことにある』という一句を引用される所があった。ただし、博士はこの問題について、『ただ実際上の困難は、その必然的発展形式を、具体的に発見する点に係っている』とだけしかいっておられない。博士の今後のご努力を期待するとして、私は、一般に数学体系そのものが、数学の発展形態をある意味で最も手軽に示唆していることを指摘しておきたい。なおまたカントの直観形式論やヘーゲルの数学論、また現代の数学基礎論のごときは、その観念論的な抽象化、現実世界と認識の歴史から超越した一面的な論理化にかかわらず、数学理論の内部連関、数学的思惟の必然的展開の分析の『試み』たるを失わない。人間の解剖は猿の解剖の鍵であると同様に、これらの研究の唯物論的合理的核心は、数学史の必然的展開の理解の一つの鍵でもあるのだ。（ちなみにヘーゲルについては『自然弁証法』上巻三〇頁ランゲ宛エンゲルスの手紙参照。なおマルクスの数学手稿の一つは『微分学の基礎と弁証法』として昭和九年橘書店刊）。

モロドシーの論文の日付は一九三三年となっているが、その年すなわち昭和八年は私に一つの会合を思い出させる。二月ごろだったと思うが、そのとき今野武雄氏の口から、自分は数学史の論理的必然的な展開を研究する積りですという意味の言葉を聞いた。唯物弁証法の流行以来科学的理論そのものの弁証法的発展について考えている人に接したのは私にはこれが最初であって、実にうれしかったのを覚えている。氏の近著『数学論』（唯物論全書、昭和十年刊）に『出来上った論理体系を数学に適用するのではなく、反対に数学の中から論理的なものを取出すことが問題なのだと考えた時、私は自分の態度に確信を抱くようになった。その中なかに今までの夢（氏が数学研究の

中に求めてこられた理想)のすべてが統括せられているように感ずる』という意味深い言葉が見出される(八頁)。
『取出す』というのは、ある意識の反映として科学を見るのではなく、数学諸理論の相互関係を一貫する弁証法を発見することの意味に外ならないが、この弁証法は同時に数学史の内的展開の弁証法を自己の中に止揚しやうしているわけである。もちろん氏と私の考え方には相違もあろうが、それはいまの問題ではない。

その前に、伊豆公夫氏も小倉博士その他を念頭において、『唯物史観によつて、ただ発生の社会史的根拠を見出されただけでは、内的必然性における自然科学の発展が把握できない。ここにおいてか、自然科学それ自身の方法、すなわち自然弁証法の適用によつて、われわれは自然科学の内容にまで立ち入ることができるであらう。』ことを力説し、『現代自然科学の弁証法による反省』昭型六年同人社刊後編八八頁)、(『エンゲルスの用いた論理的考察と歴史的考察の統一』を指摘している。(二〇五頁)しかし氏自身は『自然科学の理論が当該社会における一般的方法論(哲学)によつて完全に制約せられている』というデボーリン主義によつてせつかくの問題を完全にぶちこわしておられる。(二〇二―二〇三頁)これこそ自然科学そのものの唯物史観的説明に道を開く入口である。)氏の著書は自然弁証法論の最初のまとまった書物であり、その前編の早い部分は昭和四年の始めに書かれている。なかなか才気煥発さいきかんぱつの書物ではあるが、自分でこしらえた方法論による高踏的な論断に急にして、学説や思想的材料の理解と評価に奥床おくゆかしさを欠き、努力的であるにかかわらず、多少雑然とした迫力の稀薄な印象を与えるのは残念である。しかし、自然科学史と現代自然科学を唯物論的、弁証法的哲学の立場から概観するという冒険的試みは多とすべきであつて、それ以後現在まで重ねてそれを試みる人がないのは淋しい気がする。

その当時特殊な関心から小倉博士の研究にたいして興味を覚えなかつたとはいへ、いま集録で拝見すると、興味津津しんしんとしてつきないものがある。文化形態としての数学の唯物史観的な研究がもたらす社会的教育的意義には益々ますます高い評価が捧げられねばならぬだろう。

小倉博士および三木清氏の論文を機縁にして田辺元博士が翌昭和五年一月号の『改造』に『いわゆる「科学の階級性」について』なる論説を発表されたのは、邦訳『自然弁証法』が現れたのと同時であった。博士は、数学並びに自然科学は術すなわち技術的形態においては階級的であるが、学そのものとしては階級的技術としての性格から純粋化されるところに成立するのであって、この点社会科学が理論・政策・歴史の結合によつて本質的に階級的であるのとは異なる、という意味の立言を提起され、あわせて自然弁証法の成立を否定されるところがあった。博士は現在では自然の弁証法的構造をある意味で認めておられなくもないが、その時には自然科学の目標を数学的理論の構成の中なかに見るといふ批判主義的『科学概論』風の意識から、自然弁証法に対し全く否定的態度をとられた。科学批判の哲学の開拓者として、博士は本質的にはかつての岡邦雄氏の考え方と同じ線に立つてこの論をなされたことが注目に値する。

昭和四年が進むにつれて、ヘーゲル弁証法の問題や科学を社会的階級的イデオロギーとして説明する試みとともに、唯物論の地盤も除々に築かれつつあった。『プロレタリア科学』十二月号に蔵西素助署名の『一九二九年度における我哲学界の趨勢』のなかでは、こんな風にいわれている。『だがイデオロギー論の前に（以下若干文章欠落）前記田辺博士の論説の波紋や、それとちょうど時を同じうして出た邦訳『自然弁証法』の影響によつて、自然弁証法の問題は昭和五年の哲学ジャーナリズムの関心の中心となった観があった。これには、従来自然弁証法に否定的な態度をとっていた（解釈学的イデオロギー論）三木哲学が唯物論の側から批判にのぼり、遂ついに左翼的思想界からの急激な転落を見た事情ももつれ合っていた。

* * *

これらの論議の種々相をお目につけよう。同年三月刊行の『岩波哲学小辞典』の唯物弁証法の項には、『唯物論によれば人間もまた自然の一部であり、最も発達した物質の一形態に外ならぬがゆえ、人間の存在し始める前に、

従つて彼等の社会とその歴史との始まる以前に自然があつた。それゆえに自然の弁証法は唯物弁証法の礎石であると考えられねばならぬ』とあり、また『思想』八月号では、服部之總氏が『生から独立した自然、人間なしに生成し、人間を生み、人間ののちまで発展するところの、かくてそれ自身の発展すなわち「自然の歴史」において存在するところの、そしてあらゆる唯物論哲学の母であるところの自然』を語っている（『唯物弁証法的世界観と自然』）。ところが戸坂潤氏は『唯物弁証法が唯物的であるがゆえに、その依り処を自然の内に、従つて自然の弁証法の内に、求めねばならぬというような考え方は、概念の何等かの混同から結果するもの』であると主張する（『自然弁証法』「理想」第十七号）。何故なら、氏によれば、弁証法は、最も根源的には、存在が思惟を決定するという関係の中なかにあり、こういう関係において在なることが実は存在なのであり、従つて弁証法は存在一般の根本規定なのであつて、思惟から独立して在る存在そのものを考えたり、その存在およびその存在の弁証法の思惟への反映を考へることは、形而上学的であり非弁証法的であるというわけだ。『自然弁証法は弁証法一般の依り処ではありえない。ただ自然もまた、弁証法的であるということの依り処（証明）に過ぎないであろう』からだ。『存在一般』の規定は自然へもあてはまるか。つまり、自然もまた思惟を決定するという関係において存在するか。つまり、自然もまた思惟の史的発展（自然科学、すなわち自然認識および自然的諸概念の史的展開）の中なかに自らの存在を実現するという関係において在るか。然しかり、と答えることによつて、戸坂氏は『具体的な』自然弁証法を成立せしめようとする。そして自然そのもの、あるいは、における、弁証法はその『具体的な』弁証法の抽象であり、形式化であるとする。もちろん、戸坂氏の考え方が、現実世界は感覚の複合体であり、その複合形態とその推移の中なかに現実の存在の具体的姿があり、感覚の外にある世界そのもの（物自体）は単なる形而上学的概念にすぎず、吾人が客観世界と呼ぶものは、実は知覚するものとの関係においてのみ存ぞんず、具体的感覚複合を、その関係から抽象化して表象したものであるうんぬん、というバークレー主義的、マツハ主義的な批判的経験論の剽窃ひょうせつであることはいうまでもない。存

在は思惟を決定するという関係においてのみあるのだという考え方は、レーニンが『唯物論と経験批判論』の第一章三節で嘲笑した原理的同格説に外ならぬ。すなわち思惟がそれに対応していないようなどんな存在もないということであり、従ってその存在は、思惟が知覚するところの感覚に外ならないからである。(感覚上の印象でも必しも知覚されるとは限らない。)

三枝博音氏は、自然弁証法について諸々の異見が帰趨するところを知らないのは、『自然の概念の把握の仕方』の「狭隘及び動揺」と『エンゲルスの自然弁証法問題提出の根本動機に対する旨目に由来する』となし(『自然弁証法問題の提出の意義』、「ヘーゲル及弁証法研究」八月号)、『エンゲルスの自然の概念の把握は「純粹の、それっきりの」自然科学者の自然のそれに踳躅きょくせきしていない』という。すなわち、『自然科学者も哲学者も一方に自然、他方に思惟を知るのみである。しかし、そのままの自然ではなく、人間による自然の変化こそ人間思惟の最も根本的直接的な基礎である』(『自然弁証法』上巻一〇一頁)という一句と、『いまでは自然全体もまた歴史の一部となった』(『自然弁証法』上巻九二頁)という一句とを引証して、『エンゲルスの自然の概念においては、自然は人間性に、自然は(人間の)歴史に、科学は人間に、思惟は行動に依拠せること』を主張する。これは戸坂氏の『人間発生以前の宇宙は現にわれわれ人間の知っているこの宇宙の過去であり、正に人間を生んだ限りの自然である』(前掲)との考え方と合致する。というのは何かといえば、人間が変化させた自然、人間実践(レーニン流に『観測や発見の実践』をも入れて)の規定の下で姿を現わしている限りでの自然、人間実践に関連して規定される限りでの自然、与えられた人間歴史からみてその『後方』への補足、『土台』として認容できる限りでの自然のことである。ところが唯物論が自己の依拠点としている自然はそれ自身においてある自然なのだ。思惟する人間の実践との関係することによって、論者のいわゆる『自然』として現象してくるところのもの自然、実践から独立し、実践を通じて認識される自然なのだ。この自然の規定としてわれわれの発見するものは、なるほど、論者の『自然』といっているもの

から、人間実践の歴史性に属する諸規定を捨象し、取去ることによって与えられる抽象規定の如く見える。しかし、この自然そのものは『自然』の抽象ではなく、『自然』の外にあるそれ自身具体的な存在である。そして人間の実践の歴史や人間の認識の歴史の中に成り立っている『自然』は、自然自身の持っている規定が、実践や認識過程に即して措定（ゼツツエン）（開頭）され、限定されたものにすぎぬ。かかる限定の中に切りとられた諸規定を独立に取上げたものが直ちに、自然そのものの規定なのではない。これらの限定された諸規定がその過程の進むにつれて漸次に総合されてゆくところに、自然そのものの規定が取上げられて行くのだ。唯物論の眼目は、この自然自身の規定（自然そのものの弁証法）を認識し、その展開として、自然と人間、存在と思惟の関係の弁証法、実践や認識過程の弁証法を認識し直おすことにある。人間の思惟は、実践や認識の歴史を通じてのみ次第に自然を把握するのであるが、しかし把握されるものは自然そのものであり、これが把握されるに依じて、変化された自然（技術、産業）や人間実践の歴史や認識の歴史もこれを対象的に把握し、支配する支持点ができてくるのである。この支持点なしに、別の関係からそれらを捉えようというのが観念論である。この自然そのものの認識が忘却されているところに、唯物論から偏倚した種々な異見が生れ、かつ生れるのである。

エンゲルスの問題提出は、客観的弁証法を確立して、唯物弁証法を基礎付け、プロレタリア階級解放に寄与せんとするにあつた、と三枝氏は考えるが、風が吹いて桶屋が繁盛するような話だ。実際エンゲルスの労作の目的は、自然科学の契機をなす理論的意識としての弁証法を説明することによって、当時の自然科学の発展に寄与せんとしたことであつた。自然科学の人間歴史、人間解放、労働階級解放に対する意義は、生産力の発展がそれらに対して持つ意義に対応するもので（『自然弁証法』上巻二二頁）、この要点を外してプロレタリア解放も何も無い。観念のなかで『解放闘争』を考えている人びとのみが、『実在世界をそれ自身の関連において捉えなないで』、ただ自己の実践意識や実践態度ないし自己の表象する『実践』を後方へ補足する尻尾としてのみ捉えんと骨折るのだ。実際に人間

解放を遂行せんとするものは、自然や歴史をそれ自身の関連において把握し、自己の限界を破つて、歴史の運動を前方へ補足せんとする実践を展開しなければならないのだ。

本多謙三氏は、『唯物論と実践』（『理想』三月号）のなかで、人間を自然の代表者となし、『だとすれば、人間に適用される法則（とりわけ新しい唯物論の生命とする弁証法）は無理なく大なる自然にもあてはまるはずである』と考察している。氏は人間の存在の仕方すなわち人間実践を『産業であり、生産であり、そこに土台する階級関係から必然に生ずる闘争の反映としての政治的行為』として捉え、弁証法的唯物論は実践を基準として精錬され、実践に係らしめて篩ふるいわけられてきた理論だと主張される。言葉だけ切り離せば、一見正しいようだ。にもかかわらず、そこから唯物論を展開することはできなかつた。何故なにゆえなら、氏は、『頭脳を成立させる物質が何であるかを知れば、われわれはまた直ちにあらゆる他の物質一般に関する明白な見解に到達する』というフオイエルバッハの言葉に対照させて、弁証法的唯物論は『考え、働く』物質・実践する人間・人間実践を定立し、それらに係らしめて世界一般に関する理論的見解を『正当化し、生かし、選択する』哲学だという風に問題を提起したからである。氏は唯物論を二種類に区別する。精密自然科学にまで系統を引く元子論と、『生活性ある物質（感覚、頭脳、人間行動等）を直ちに承認する一種の物活論』、これである。前者は機械論的唯物論、後者は感覚論的、人間学的（フオイエルバッハの）、弁証法的等の唯物論に代表される。後者は常に人生観や社会主義と関連している。『理說的抽象的には前者の方が斉合あるように思われるが、何が真なる唯物論であるかは理論的な一貫に懸っているのではなく、どれが実践への物質的力を持つもているかに従つて判断されねばならない。』——結局どうなるだろうか。人間実践は大なる自然の代表者である。しかも人間実践の指標、頂点、代表者は、階級的政治闘争の実践である。この実践『を直ちに承認する一種の物活論』（ないしは実践的唯物論）たる弁証法的唯物論は、この実践に代表されてあるように自然を規定しなければならぬ（ちようど、『外から形を与えられ、衝撃によつて初めて動く』形而上学的抽象

物たる元子の体系として自然を規定する、数理的自然科学的唯物論ないし機械論的唯物論に対抗して、『感覺する物質を直ちに承認する一種の物活論』たるフランスの感覺的唯物論は、『全ての物質がそれ自らに生活性を具えそれが有機体においては種々なる度合の心意性となつて現われる』という風に自然事物を規定した如く——と氏はいわれる。自然が果してさように規定されえるか否か、実践の弁証法則が自然にも、無理なくあてはまるか否か、これは弁証法的唯物論の死命を制する問題となる。これが氏の見解だ。こういう風に問題が立てられて見ると、折角正しく捉えられているように見えた自然（前記『哲学小辞典』）も実践（理論の精練の基準としての）も観念的に去勢されていることがわかる。

実践を基準にして理論の精練、認識の発展が行われるということは、実践によって理論や観念が客観的實在に適合しているか否かが検証され、実践によって實在そのものの性質についての経験が取得されるという事実を指しているのである。實在世界そのものの認識すなわち唯物論的理論は、人間の実践の発展、實在世界を対象として働きかけるあらゆる感性的活動の発展に依存して発展する。これを自然認識についていえば、自然科学は自然に向けられたあらゆる実践、すなわち産業的実践とそれから派生する科学的実験、観測、発見、探検等の活動に基いて発展する。何が真なる理論であるかは、もちろん、理論的斉合性といったような観念から判断されてはならない。その実践によって實際に實在的対象の上で検証されねばならぬ。しかし、實在の連関がこの仕方ですく認識され行くにつれて、個々の知識は次第に体系的に統一され斉合的となるであろう。本多氏は、実践を基準として、客観的實在（自然や歴史）そのものについて認識するただ与えられた（『直接に承認された』）実践へ適合せしめて自然や歴史の認識を認容し、生かし、取上げられることを考えるにすぎぬ。つまり、その実践（例えば、無産階級解放の実践）への物質的力となり促はつとなるような理論を、実践目的という意識に照らして篩い分けるのが『認識における実践の基準』である、と。しかしながら、自然に働きかける産業や実験、社会に働きかける社会生活や階級闘争、経営

や政治等の実践——これらの実践が、自然や歴史社会そのものに当りをつけ直接動かせてみて実証した諸法則こそが、その自然的歴史的対象を支配せんとする実践の最も力強い手段となるのである。指標となる（代表的）実践が後方へ補足できる風に、すなわちその段階を通じてその実践が開きでてくる風に、ないしその実践がちよと自分自身をその上に載せえる風に、マイ自科や実在一般を規（限）定する理論は、ただに『実在をそれ自身の連関、それ自身の合法性において把握する』唯物論的認識と全く相容れないのみならず、その指標たる実践を実在そのものの運動の連関から独立化させ、逆に実在をそれに依存せしめて考えるのと同様である。

自然が人間を生んだという唯物論の命題は、同時に、自然そのものの諸条件と法則の発展（自然の歴史）を前方へ延長補足するものとして人間歴史を把握し、またその人間歴史の延長展開として代表的実践を、把握し規定すべきことを要求しているのだ。これが、人間の総実践を通じて証明された実在の關係にそう認識である。自然が人間を生んだというのは、自然が人間の存立条件をなし、人間から独立したそれ自身の法則で人間を生み、人間に働きかけ、人間を貫いて運動している意である。人間の中なかに自然が内在していて、人間の実践の発展とともにそれが人間の外へ展開したり、後方へ確認されたりするのではない。自然のなかに人間が産出され、人間が自己の実践（生産労働）によつて、自然をかかえるものとして自己の下に支配し、自己の中なかへ転化するのである。この転化（生産）が人間実践の促進方の現実的根源であつて、あらゆる他の促進力はその派生である。いま、人間が、自然から代表者として選出される代りに、直接に（すなわち実在的前提なしに、代表關係から独立に）自己自身を先まず承認し、つぎに、唯物論者によれば自分は自然の代表者だそうであるから、汝自然は自分によつて代表されていなければならんぞと宣言するとき、本多氏の哲学が生れるのである。氏は、当時独ドイツ 喫ストリア の現代講壇哲学の影響からマルクス主義哲学に接近してきた一派のうちでは最も論理的な頭脳であつたが、氏もまたその一派の觀念論の限界を突破して
いない。

福本氏（氏もまたルカチを介してウエーバー等の現代ドイツ観念論哲学の系統を引いている）の新説以来、特定の実践の立場または指標的实践を先ず定立し、認識や理論は（人間の全実践の経験の総括によってではなく）この立場に適合して形成され、かつこの立場の実践の発展と関連してのみ、それぞれに発展するとす認識論が行われるようになったが、この認識論は、一方では自分をその指標的实践に関係付けて考えている一般の人びとの卒然たる直感（『自分の知識はこの実践の立場から生れたのだ』）と結びつき、他方では三木一派の哲学傾向と結びつき、根深い力となって人びとの頭を支配した。（この哲学傾向には、デイルタイの精神哲学、ウエーベル的社会学、哲学を『生』ないし人間的存在の存在の仕方の表現とみる解釈学、逆にいえば自覚的存在の自己反省のなかで存在の「存在の仕方」を把えようとする『存在論』、知識を専ら社会的事実ないし社会事情の反映とみる知識社会学、あるいはそういう意味でのイデオロギー論、科学階級性論、等々を十把一からげに数えることができる。既にみた如く人間の存在が彼の意識を決定するというマルクスの命題もそれ相当の無批判な歪曲的理解の下に引合に出された）この立場を克服し、認識を人間のあらゆる実践を通じての客観的实在の把握として評価し、かかるものとして取上げ、発展させ、この認識を手段として指標的实践の活動性と組織性とを、現実に高めよう（理論と実践との統一）とする問題提起はその後も決して充分にはなされなかった。認識を決定する指標的实践としてのプロレタリア階級性あるいは党派性の主張は、最初は福本氏の唯物弁証法説において、つぎにこの年昭和五年八月のプロレタリア科学研究の哲学テーゼにおいて、更に昭和八年の左翼哲学において強調されたところであった。これらの主張に共通する点はこうである——理論は実践に依存し、その立場に決定されている、ゆえに吾人もまた吾人の党派性（プロレタリア階級的实践）の立場において理論を展開しなければならぬ。すなわち、当面的实践目的に即して他階級のイデオロギーとの闘争（その階級性の暴露）において、自党派の理論の力を強化し、当面的实践段階の必要に応ぜる理論内容と理論分野を展開しなければならぬ。そしてこれらすべての展開は、その党派性に規定された方法論・

認識論（すなわち唯物弁証法）に従って行われねばならぬ。うんぬん。

この、認識のプロレタリア階級性・党派性の論に共通する欠陥は、つぎの点の忘却にある。――

この階級やそれを代表する政治党派は、実在世界（自然と歴史）の関連のなかで歴史の発展法則に従って形成され、成長する社会的現実である。この現実、この指標的実践は各人の意識に種々様々の形態で反映し、各種の意味と方向において理解されている。従ってこの実践の立場を反映し、それに決定された意識や理論といっても千差万別、種々雑多である。しかし結局においては階級やその党派の実践を、その客観的な条件と発展法則に従って伸長させることが、問題なのであろう。各人が階級党派の立場として意識しているもの、その立場の当面の課題として意識しているもの、それは、党派の客観的に置かれている立場そのもの、客観的に課せられている課題そのものの、意識への各種各様の反映にすぎない。従って、この立場の客観的課題は、現実の歴史関係の分析によつて発見され、かつその課題によつてきたる根拠とその課題を解決する条件も、その現実の歴史関係のなかで発見されねばならぬ。そのことによつてのみ、この立場を、客観的に現実的実践的に伸長させえるのだ。従って、われわれがこの立場の当面の課題として意識している、その意識に従って、必要と思われる各種の理論分野を研究するのが党派的な科学研究という風に表象しているとすれば、それは皮相の見方であつて、われわれは、意識している限りでの課題と解決条件および解決方を反省し、その意識を、現実のなかでこの立場が当面している客観的課題と、客観的に与えられているその現実的解決条件との把握にまで高めること――これが党派的な科学研究の核心なのだ。ただし、『人間には自ら解決しえる課題のみが課題となる、何故なにゆえというに、課題というものは、その解決に必要な物質的条件が既に存在しているか、少くとも生成の過程にあるときのみ、』（その事情が人間の意識に反映して、解決すべき課題として）『発生するものだから』（『経済学批判序文』）。つまり、右の党派の認識の主張者が、現実的課題に従つて理論を研究するといっていることは、その本質においては、意識されたる課題の現実上の歴史関係におけ

る意義と解決手段とを理論的に探究する以外のことであつてはならないことが分ろう。課題は、真の由来と意義と条件とにおいて正しく発見されたときにのみ、正しく解決される。

人間実践の課題が、各人において各様に意識されてあるがままに限定し定立さるべきでなく、真の課題は常にその現実的な解決条件とともに、現実の歴史関係のなかで探究され分析さるべきだとすれば、われわれはいかなる理論と闘い、いかなる理論を擁護し発展させねばならぬかが分明する。われわれの擁護すべきもの、それは実在世界の現実的關係にあてはめてその正しさが実践的に検証されている諸理論、すなわち、唯物論的理論である。この理論を通じてのみわれわれは自然現象や歴史過程の現実的關係を把握し、その中^{なか}に人類の諸課題を客観的に把握し、特定の階級や党派の客観的立場、すなわち現実的歴史の関連の中^{なか}に存立しているがままの意義と運動条件、その発展法則を把握しえるからである。この把握なくして、課題の解決諸条件を発見し支配し、この立場を伸長させることはできない。しかしながら、現実關係にあてはめて検証された諸理論は、ただプロレタリアートの立場が反映されている諸理論のみであるということがいえるだろうか。その立場およびその立場の中^{なか}に含まれているあらゆる諸条件は、各種各様の仕方^{かた}で反映され意識されているが、それらが現実關係にあてはめて検証されていない限りは、唯物論的でも何でもない。恐らくは、極めて多くのそういうイデオロギーが検証に耐ええずして淘汰されるであろう。これに反し、この階級の立場以外の諸階級や諸党派の立場を反映したイデオロギーといえども、それが実在世界の現実的連関にあてはめて検証されたものである限りは、すなわち唯物論的である限りは、その実在の認識の理論的支持点となるのである。特定のイデオロギーや理論の評価は、それがいかなる階級のいかなる必要（課題）に沿^そうて生みだされたかという方面から与えることができる。およそ理論とは常に何らかの立場の何らかの必要によって生みだされるのだから。しかし、われわれが実在世界を（自然を生産によつて、歴史を政治によつて）支配し、それをそれ自身の法則に従つて統御し、無産者階級と人類の解放を遂行せんとする立場に立つ限り、実在世界の法則

を正しく反映しているか否かという方面から理論を評価し、そのことが検証されている理論を取上げ、検証されなかった、またされえない理論（空想的観念論的理論）を克服しなければならない。

ブルジョアジーの歴史的存立条件が分解しつづつあることが実証されて以来、その階級の永続性を前提し、あるいは結論する諸理論の一切は誤謬たることが明かとなり、歴史の認識を遮断する御用学問となり下ったが、だからといって、ブルジョアジーの必要から生れた一切の理論が真理性を失ったのではない。それが現実についての経験をいい表わし、現実事象について検証されている限りは、現実世界の認識の支持点となるのである。現実世界の認識は、それらの理論を取り上げ、それに基くことなくしては普通不可能である。従って諸理論を、それが生みだされた諸階級の立場や必要から評価し、つまり階級の根拠を暴露し、それによつて分類し、他階級の実践に原由するものは排撃し、自階級の必要から生れた理論やイデオロギーはこれを真理として支持するということとは、一方では実証された理論をも洗い流し、他方では実証されない理論をも取上げることになるであろう。そして、そのことによつて、現実世界の認識に進む多くの理論的支点を失い、自己階級の立場を闡明し、自己階級の課題やその解決条件を闡明する理論的条件を失うであろう。それはまさに自己の敵対階級の利益に合致することではなからうか。

右の如く、理論や一般にイデオロギーをその階級的立場から評価し、かつそれに踟躇する哲学的考察は、イデオロギー論等の名前で呼ばれ、芸術社会学や科学階級性論・科学の社会性論の理念となり、この考え方の型を弁証法的唯物論に適用し、これをプロレタリアートの立場の必要から生まれ、かつそれに即して発展しゆくものという立場からのみ評価したものが、前記、認識のプロレタリア的党派性の説である。しかし、弁証法的唯物論はプロレタリアートと人類の解放のために、全人類の実践が自然および歴史の現実的關係について検証した諸認識の堆積に基いて、その関係を益々深く認識し、解放のあらゆる諸条件を闡明する理論である。認識のプロレタリア的党派性論は、この階級の実践が人類歴史の発展方向に合致し、いずれの階級の実践もが分解しつづつあるに反して、これのみ

は益々^{ますます}広範に展開するという点に、この階級の実践の必要から生れる認識が他の階級から発生した諸認識よりも一層高い真理性をもちえる可能性が横わることを主張する。しかしこれはあくまで可能性であって、この可能性の上に現実に唯物論的理論が発展しえるためには、全人類の実践が検証したあらゆる理論を踏み段としなければならぬのだ。唯物論的理論のこの、現実的展開の場面に入り込めば、ブルジョアジーの生んだ理論とプロレタリアートの生んだ理論という対置は意味を失い、観念論と唯物論と、実在世界の現実的連関に適応しない理論とそれから取上げられ、それにあてはめて検証された理論と、空想的知識と現実的科学的知識との対立において、一貫して後者の立場を維持し発展させることが問題となる（『唯物論と経験批判論』下巻一三三頁および『唯物論と経験批判論』上巻二〇三頁・『唯物論と経験批判論』下巻一五九頁）。この場面において、いかなる理由からにもせよ、後者の立場の貫徹から背馳^{はいち}するものは、信仰主義に場所をゆずるものであり、そのことによつて人類解放の現実的諸条件の認識を抹殺せんとする階級の利益を反映することとなる。

弁証法的唯物論、あるいは右の唯物論的立場に立つ科学的理論を、かかるものとして発展せしめる思惟条件、思惟法則（方法論・認識論としての唯物論的弁証法）は、従つて、認識のプロレタリアートの党派性論の規定する如く単にプロレタリアートの立場を反映し、それに決定された思惟様式であるとして評価し、そういうものとして限定するのみでは決してその本性は明かとならない。われわれは福本氏の弁証法においてその典型をみたのであった。『弁証法的思惟は概念そのものの本性の研究を前提する』（『自然弁証法』上巻一三七頁、なお『反デューリング論』第二版序文末段『概念を取扱う技術は経験的自然科学と同様の長い経験的歴史を有する現実的思惟を必要とする』および『哲学の二千五百年の発展の諸成果』『自然弁証法』下巻二二六頁を参照）。実在世界の実証されたる現実的関連をたどり、それを反映しながら自己を形成してゆく科学的概念の発展法則、この法則の分析からして、方法論・認識論としての唯物論的弁証法は与えられるのだ。そしてこの発展法則が深く認識されればされるほど、唯物論的

諸科学をそれ自身の發展条件と發展法則に従つて合目的に伸長させることが可能となつてくる訳である。唯物論的（科学的、理論的、概念的）思惟の諸様式・諸法則は、二千五百年の歴史を有する理論哲学（論理学と認識論）がこれを闡明してきた。この闡明が科学的概念の實際の發展法則を正しくいい表わしていることが検証される限り、その法則のより深い認識に進む支点となる。昭和五年の前記哲学テーゼは方法論・認識論としての唯物弁証法については何もいっていない。が、デボーリンの理論が一般的に承認されていた訳である。昭和八年に至つてこの方面の研究は大いに盛になつた。そして概念の連関や發展の省察はかなりの程度に行われ、唯物弁証法的思惟様式の規定も詳細となつたのであるが、しかしまだプロレタリアートの実践の立場に決定された思惟様式として限定する一面的見地に制約されて、その固有の展開は充分になされなかつた。従つて、例えば、この思惟様式は、その実践の立場が全面的普遍的なるに依つて、全面的普遍的であるという規定を与えられたが、しかしそれはあくまで可能性においての話であつて、全面的普遍的な思惟様式（概念的思惟の發展法則、認識論）を現実に展開するには、理論哲学の二千五百年の發展成果（わけてもヘーゲルの弁証法論理）に依拠して、現実に成長しきつた唯物論的諸科学上の諸概念の形成と發展との過程を忠実に実証的に分析すること以外に方法はないのである。

なお老婆心^{ろうぼしん}までに付言すれば、觀念論すなわち現実の世界^{なか}に関連にあてはめて検証されえない超現実的超感性的理念の下に包括された諸知識・諸理論といえども、その中には屢々^{しばしば}經驗的実証的な検証に耐ええる諸内容（唯物論的知識）があることは忘れられてはならない。エンゲルスが近代觀念論哲学の諸体系について『益々^{ますます}唯物論的内容を帯びてきたこと』そして『最後にヘーゲルの体系はその方法および内容上觀念論的に顛倒された唯物論たることを示している』と述べたこと（『フオイエルバッハ論』四九頁）は充分記憶されねばならぬ。すべて觀念論的理論の追放に際しては、その諸理論の与えられている觀念論的形式は批判的に打ち破るが、この形式の下に与えられている新しい現実的内容は——そういうものが有る限りは——これを救い出し（『フオイエルバッハ論』四四頁、第一

節の終)、唯物論的世界認識の富なかの中に加える用意がなければならぬ。いうまでもなく、益々ますます厚顔無恥となり、唯物論が実証的經驗的に闡明せんめいした諸内容を空想的に歪曲し一面化する以外に能がなく、美文学的空論家か小市民的俗物生活の説教者に成り下った現代觀念論哲学に、こういうことがあてはまることは、まず無いであろう。しかしながら実証的經驗的研究の極めて広い領域で、その成果がまだ必しも常に唯物論的見地から意識的に取上げられていない現状では、現実的諸内容と、それらを包括し限定している形式としての觀念的空想的なイデオロギーや諸理念とを区別し、後者を切開して前者を唯物論の中なかに取り入れることを知らねばならぬ。だが、新しい内容の受入れとともに、如何いかにわれわれは觀念的空想的形式に感染し易いことだろう。唯物論的見地の首尾一貫、その党派的貫徹を忘れた瞬間からわれわれは空想的思弁と信仰主義の誘惑に陥ることを覚悟せねばならぬ。

最後に、ここにみた如ごとく、指標的実践をまず定立し、それとの関連において限定されたのみ認識はとり上げられるとなす考え方は、結局、この実践をかかえるものとしてではなく、それが人びとに意識されてある形態のままに限定し、この意識形態の形式の下に現実的關係の認識内容を限定して取上げるといふ觀念論になつていのである。そして觀念論的な認識理念ないし認識図式の役割を与えられている右の意識形態は、福本氏以下、すべての場合において、指標的実践から極めて抽象的形式的な規定を象徴的に取出して固定したものにすぎない。それもそのはずである。実証された諸規定の漸次的総合の成果としてのみ現実的に把握さるべき指標的実践を、無前提的にすなわち直観的にまず限定し、これを一切の世界把握の前提概念にしようというのだから。かくて、プロレタリアートの実践は「社会発展の客観的傾向を代表し、それに合致する」とか、「従来の秩序の批判である」とか、「世界と実践的・変革的に交渉する」とかいう命題めいだいの中に限定されてしまうことになる。そして方法論・認識論としての唯物弁証法はそうした規定の展開ということになる。

これが、実在世界を意識の外にそれ自身の現実的連関においてあるものとして認め、その連関の弁証法を実践を

通じて経験されるままに実証的に跡付け（かつその連関に従って実在を支配し）ようとする唯物論の認識理念と異なるのはいうまでもない。（昭和八年）

* * *

イデオロギー論的、知識社会学的考察の一般的特徴は前記小倉博士の数学史論にもこれをみることができが、なお本多氏の機械論的唯物論に対する考え方についてうかがってみよう。氏はこれを数理的自然科学に結実した元子論として考えている。自然の審美的直観でなく、量的自然観、精密な函数関係の測定が重んぜられたのは、自然法則の技術的支配という新興ブルジョア階級の実践的要求が基準となったからである。確かに測定は物体の運動（力学的運動）を支配する不可欠の前提である（『自然弁証法』上巻九四頁）。そこで自然現象を数量的測定を許す最も単純な要素に分解し、それらの数量的組合せ、力の釣合いによる構成として、自然を把握する機械論的唯物論が生れた。エンゲルスは周知の如く、この唯物論の偏狭さは、化学的および有機的性質の諸事象や人間の歴史の法則等が唯物論的に研究され、画期的な発見が行われ、機械論的法則では割り切れないそれぞれの過程に固有な法則性と、それらの諸過程の相互転化とが実証されるにつれて克服されたと述べている（『フォイエルバッハ論』五二頁）。本多氏のイデオロギー論的考察は全く別の見方をするのである。この点は磯谷市郎署名『数理的自然科学の観念性』（『プロレタリア科学』四月号）に明かである。自然力支配の実践技術は、従って機械論的法則の取扱いは、自然科学の数理的原理の樹立を必然にする。その限りにおいて、この原理は技術的実践の目論見・予定表・仕事をなす上の仮説にすぎず、名目論的意味しか持たない（そしてミルにいたるまでのイギリスの論理学にとつては実際さうだったのである）。カントの哲学的偉大は、これらの基底となったブルジョア実践を観念の世界へ導入して組織した点にある——これが要点だ！ 彼が自然に対してその法則を指図〔六字分脱落〕先驗主義は、封建的文化への勝利を確実にしたブルジョアジーの自主精神の理論的な把握に外ならない。かくして現実的な階級実践は超越的意識に、

そして理論の関する限りでは純粹思惟にまで觀念化され、技術的實踐が生んだ自然科学の数理的原理は、純粹思惟の自らなる實現として展開された。

この考察には種々なことが含まれている。まず、一般に哲学的原理というのは、階級的實踐の觀念化された規定であるという点が明確にされている。この階級的實踐が哲学的原理化されることは、その階級のヘゲモニーの十全なイデオロギー的反映である、と。従つて唯物弁証法もまたプロレタリア階級の實踐の觀念化された規定たらねばならぬ、と。この考え方が福本イズム以来、連綿としてわが唯物弁証法論者の頭腦を一般的に占領していることは何度もいった。そしてこの考え方が、エンゲルスの考え方とは異つて、ブルジョアの哲学原理がプロレタリア的哲学原理すなわち唯物弁証法に交替することにより、数理自然科学の觀念化、機械論的・量的自然觀の絶対化の止揚しょう、新しい質的自然觀の生成がもたらされるという結論に行つたのは、当然だ（三木氏のダーウイン觀）。指標的實踐に適用される法則（その實踐の觀念化された規定、象徴的に抽出された規定、としての哲学原理）は無理なく大なる自然にもあてはまるという最初の本多氏の命題はこの意味である。そして唯物弁証法はブルジョア哲学原理に従つて絶対化された力学的な「均衡運動」に止らず、破壊的・創造的運動を社会においての如く、自然においても捉えとらえないだろうかという空想がなされている。前年一九三二年、ソヴェト經濟建設第一次五ヶ年計画の最初の年の進行中に、その政策の反立理論として登場したブハーリンの國民經濟諸要素間の「均衡」の理論が、スターリンによつて摘発され、ついでデボーリン等の哲學者の間にもブハーリンの機械論的考え方の批判が行われたのはちようどこのころであつた。

右のイデオロギー論的考え方が見落した点をいえば、第一、實在世界の諸過程にそれぞれ固有な發展法則の認識は、哲学原理の交替によつて産出されるのではなく、その過程の実証的經驗的分析から取上げられ、かつその過程について検証されてわれわれのものとなるのだ（ブハーリンの均衡論はソヴェト國民經濟の現実的な發展条件にあて

はまらないのである、その現実条件にあてはまる理論は均衡論でなく、マルクスの再生産理論である、これのみが近代社会の国民経済発展の根本法則として実証された唯一の理論だ——というのがスターリンの視角)。第二、カントの先験的思惟、思惟の自律性・自発自展の主張は、ブルジョアジーの自主的精神・進取的企業精神の觀念化された限定なのではない。経験的実証的科学研究に際しては、単に現実的連関が経験されるがままに頭脳に反映するのではない。現実の方からいえば頭脳へ反映するのだが、頭脳の方からいえば現実をかかるとして模写するのである、把握するのである、捉えるのである、限定し規定するのである。思惟は現実に関連される連関をば概念の論理的展開形式の中に包摂することによって認識するのである。かつまた現実には未だ経験されていない連関の形式や内容をも、自己の論理に従って規定することもできる。これは、思惟過程には、他の實在の諸過程の法則に解消されえない固有の法則性があることを証する。形式論理学はその法則性の抽象的一面的な限定であり、それに経験から超絶した妥当性を与えられたものであった。カントの哲学的偉大は、形式論理学を批判し、この思惟を経験に即してのみ展開するものとしてとらえ、その思惟の妥当性と法則性を限定せんと試みた点にある。カントにおいて始めて経験科学的思惟がかかるとして反省され、分析されるにいたったのである。これをもって現実の把握としての思惟の科学（認識論）が発足した。そして自然および歴史に関する現実的知識が発展すればするほど、この思惟に固有な法則は益々開示され、これをカントが先験的論理として限定したことの一面性を指摘しつつ、ヘーゲルは弁証法としてこれを限定したが、同時にこの法則に従って展開する思惟概念の過程の外部に實在する世界をそのままに認めず、概念の弁証法の下に限定された形態においてのみ承認したため、彼の目には實在が思惟の展開であり、反射であるかのように映った。

マルクス・エンゲルスにおいてはじめて、それが経験科学的思惟としてのその本来の地位と関連とにおいて反省されるにいたった。それが唯物論的弁証法として提示された思惟法則であり、認識理論である。唯物論とは、實在

世界を、経験され実証されるがままの関連において、弁証法的思惟なかの中に把握する実証科学である。かつて経験的実証科学は、自然および歴史の事象を個々別々に切り離して処理するしかできなかった。しかし細胞、生物進化、エネルギー転化、生産様式、階級対抗等の諸発見は、個々の事象の相互関連の全体をも経験的実証的に追跡することを可能にした。それで、もはや実在世界の関連を何等かの哲学原理に従って限定することは、その必要のない余計なことであるのみか、現実的な世界関連を抽象化し一面化するか、歪めるだけに過ぎないことが明かとなった。従来哲学と呼ばれてきた学問なかの中に、なお自然および歴史の実証科学に解消せずに残っているものがありとすれば、『それは純粹思惟の領域、すなわち思惟過程の法則に関する学（論理学と弁証法）』、別名認識論のみである（『フオイエルバツハ論』九八、『反デューリング論』、なお『空想から科学へ』第一章を見よ）。これが有名なエンゲルスの哲学終焉しゅうえん説である。つまり唯物論においてなお哲学が問題になるとすれば、ただ思惟の法則に関する経験的実証的な知識としてである。

エンゲルスは非常に屢々しばしば実証科学にとって哲学の必要を力説し、哲学的知識を欠いた経験科学がいかに荒唐無稽な無批判な考え方に陥り、科学の反対物たる観念論的、信仰主義的、超感性的、心靈的境涯にすら迷い込むかを説明した（『自然弁証法』上巻八一、八五、一一五、下巻四七、上巻第三章一八七・二〇〇以下、下巻三三二以下、『反デューリング論』第二版序文等。なおレーニンの前出『戦闘的唯物論の意義』を参照）。経験的実証的な科学研究にとって必然に要求される理論的思惟、思惟概念とそれを運用する技術とを、すなわち哲学の知識を欠けば、実証的経験的に取り上げられる諸内容が固有な思惟形式（科学的概念の発展形式）の下に限定されず、ただ個別的な内容が個々別々に知識なかの中に保存せられるのみとなる。そして個々の経験事象に囚われて、その事象が実在世界の相互関連なかの中に与えられている意義や条件が注意にのぼらない。従って、それらの事象の知識を実際理論的目的に使用する場合には、その内容に固有な現実上の相互関連の意義（科学的概念の弁証法的展開）に従ってではなく、そ

れらを自己流の観念論的な空想的な超越的な観念の下に限定し、そのことによつてそれらに別種の観念論的な意義や条件を投入して表象し、そうした表象に従つて扱ふことになる。唯物論と観念論は絶えざる闘争である。弁証法的思惟の意識を欠いた単なる経験主義や実証主義はイギリスのバークレーやヒュームの経験論、ドイツのマッハ等の経験批判論の例にみる如く、容易に観念論に転化する。かくの如きがエンゲルスの経験論や実証論に対する考え方で、彼は科学的概念の十分な反省を欠いた経験主義者が普通に意識している思惟規定、すなわち形式論理学や帰納法の一面性を絶えず指摘し（『自然弁証法』上巻一三七頁等）、そうした思惟規定によつて対象を限定せんとする仕方をヘーゲルにならつて偏狭な形而上学的思惟様式として特徴付けている（『フォイエルバッハ論』七九頁、『反デューリング論』序説または『空想から科学へ』第二章、『自然弁証法』上巻七九頁以下等）。

経験論や実証論が持っている右の欠陥は、経験的実証的な科学研究の過程でのみ克服されるのである。そして自然や歴史の個々の事象のみでなく、それらの事象の相互連関や発展および転化形態が経験的実証的に発見されてくるにつれて、形而上学的諸概念は止揚され、それをそのままに自己の中に把握する思惟概念が形成される。この概念をかかるとして、分析し反省し意識するところに弁証法の思惟様式が獲得されるのだ。

实在を相互連関的に把握する思惟概念の反省としての弁証法の哲学は、最初に古代ギリシャにおいて、ついで近世初期の数学およびその応用諸科学の発展を背景としてデカルト、スピノザにおいて、そして最後にカントからヘーゲルまでのドイツ古典哲学において、発展せしめられた（『自然弁証法』上巻二一〇頁以下、『反デューリング論』序説または『空想から科学へ』第二章）。経験科学が未発達であつた従来では、实在世界の連関について考えた思惟は、多かれ少かれ直観的で、実証的経験的に分析された諸事実^{しじつ}に依拠して把握を進めることが当然ながら不十分であつた。従つて実証的に個々の事実を把握する経験的・唯物論的思惟が帰納法論理と形而上学的概念の形で反省されている間に、連関と交互作用を思惟する諸概念は多かれ少かれ直観的な観念論的な形態の弁証法として反省さ

れたのは当然でもあった。しかし、この連関が実践的に検証された関係をたどって把握されえるようになった限りは、それを把握する思惟概念としての弁証法は、唯物論的・実証的なものに転化したのである。ここに人間思惟の最高の形態としての唯物論的弁証法がある。

唯物論的弁証法はかかるものとして理解され、かかるものとして現実の科学研究に意識的に応用されねばならぬ。(自然科学に応用さるべきかかる弁証法の知識は後編において紹介することにする)。カントの限定した思惟形式(先験的論理)が何等ブルジョアジーの実践または実践精神の観念的限定ではないように、唯物論的弁証法もまた何等プロレタリアートの実践または実践理念の直観的・観念的限定から展開されたものではないのである。いわゆるイデオロギー論的考察は、一切の思惟の成果すなわちイデオロギーを、階級の実践のある側面における限定、その精神的開展として考察するが、それによつて実在世界の唯物論的把握としての弁証法的思惟概念の本性は何事も明かにはならない。イデオロギー論的考察は、すでにマルクス・エンゲルス等によつてさきの如きものとして展開された弁証法を、ただプロレタリアートの実践の歴史的発展形態(それこそはじめてマルクスによつて歴史の、特に近代資本主義社会の歴史の実証的経験的、かつ弁証法概念の充分な意識の下に行われた科学的研究によつて具體的に分析され発見されたものである)の一般的特徴から『意味付け』を行つたものである。弁証法の意識の下に実証的に絶えず闡明さるべきものを、まず直観的に抽象化された規定において捉え、それによつて弁証法を判断し、解釈し、意味付けんとしたものである。すでに固有の条件と意義に従つて与えられてあるものを、その条件と意義とから理解し、その条件と意義とに従つてわれわれの理論的実践的目的に振り向ける代りに、イデオロギー論的考察はそれを別個の視角から一面的に限定し、若しくはそれに別種の解釈を与え、固有ならざる条件と意義とを投入して理解せんとするものである。これは人類の実践の経験とともに発展する諸科学の現実的な発展から人びとの意識をそらさせるものである。それは従つて人類の実践の歴史的発展の方向と意義と条件との科学的把握から人びと

の意識をそらさせることである。これは人類解放の先進的階級にとってどんな結果をもたらすであろうか。だから、『イデオロギー論の前にまだまだ唯物論的基礎が固められねばならぬ』と書いた人は、唯物論の基礎が置かれるためには、まずあらゆる形態のイデオロギー論的考察方法が克服されねばならないことを知らなかったのである。

もし、唯物論的弁証法、換言すれば科学的理論的思惟は何の反映であり、いかなる実在によって決定されている思惟であるかと問うならば、答はつぎの通りである——唯物論的弁証法は、内容的には、人類の実践が実在世界の現実的関連について実証的に経験するところの一切のものを、そしてそれを通じて漸次に実在世界の固有の法則を、反映する。また形式的には、直接実践的に対象世界に働きかけ、その自然的歴史的对象をそれ自身の現実的な発展法則に従って支配し処理せんとするあらゆる実践的態度の反映である。この態度はプロレタリアートの中なかにだけ内在するのでなく、全人類の行動の本質なのである。イデオロギー論的考察は対象世界の実践的支配でなく、その直観的解釈にとどまっている態度の反映である。

* * *

これより先、わが国最初のかつ現在までのところでは唯一のマルクス主義的科学研究機関プロレタリア科学研究所が創立され（昭和四年十月十三日）、雑誌『新興科学』に依よつていた三木氏を中心とする哲学派もこれに参加して、その哲学的主力をなした。当時のマルクス主義者は既に自己の哲学を意識しており、三木氏一流の哲学の中なかに小ブルジョア的ホルモンを嗅ぎつけることは知っていたが、まだ量的にも質的にも一派に結束できるほどの哲学的力を蓄積していなかったことが、アカデミー哲学の『新進』と雑居する事情を作り出したのである。

しかしいづれは訣別けつべつすべき運命にあった。そして五年四月以降服部之総、川内唯彦、寺島一夫等の諸氏が火ぶたを切った後、八月号の『哲学テーゼ』の発表とともに、研究所は自己の哲学的課題を定立し、そのなかで前記の如く哲学戦線の政治的党派性を強調した。三木哲学と研究所との訣別けつべつは純粹に理論的な動機や範囲でのみ行われたの

ではなかった。

それは何よりも、科学を現実的な階級闘争の手段として労農大衆の中へ持ち込み、左翼的闘争の方向に直接一致せしめようとする方向の急速な転換が、知識階級内の文化運動の埒らちを出いでえなかつたイデオロギーを克服したわけである。

テーゼはこの積極面とともに、消極面をも持っていた。科学の階級性・党派性に対する抽象的直観的な理解のために、唯物論的マルクス主義的諸科学の促進の哲学的理論的条件や実際の方策（科学インテリゲンチヤの組織形態・科学戦線の展開形態）の評価が著しく偏狭となったことがそれである。しかし、問題は研究所の科学政策のピントをどこへ合わすべきかにあつたのであつて、この問題をいかに解決すべきかとか、解決のための条件は何であるかとかの反省は二のつぎであつたといえよう。

世界経済恐慌がもたらした国際労働運動の急進化は、わが国の左翼文化運動にも滔々とうとうとして反映したのである。昭和七年十月の唯物論研究会の創立は、研究所（その少し前にプロレタリア科学同盟に改組した）が残して行つた戦線と組織範囲とを『補足』するような形であつた。

研究所が残した最大の問題の一つは自然科学と自然科学者の問題である。自然科学者としては数名の医師が漸次に所員に加わつたが、所内の活動は殆んどなかつた。自然科学の方面は、機関誌上の二三の論文に代表されていたにすぎぬ（前出の寺島氏の論文、磯谷市郎署名論文、同じ年の四月号寺島氏の『マルクス主義は精神分析学を撰取しえるか』）。これらの事情は、一方では専門の自然科学者の間にマルクス主義哲学の研究が潮流をなすまでに普及していなかつたためでもあり、他方では、研究所の活動形態と活動方向とが専門の自然科学者を吸収したり、それに働きかけるのに不適當だつたためでもあろう。

自然科学者とプロレタリアートないし社会主義者との結合について、当時の一般的な考え方が覗うかがいえられて面白

いのは、「プロレタリア科学」五月号質疑応答欄の「自然科学者との『同盟』は必要か」という記事である。解答は寺島一夫氏。

質問の大意——レーニンの提議するこの同盟は『今日の自然科学がプロレタリアートの文化の一部門としての自然科学へ移行しえるための本質的な方法ではない。(対外的な一つの戦術にすぎぬ)従って他に別により本質的な方策を必要とするように考えられるのですが如何でしょうか。』つまりブルジョア自然科学者に対立するプロレタリア自然科学者の出現と、その実践活動によってのみブルジョア学者の偽論を粉碎しえる。このことこそが、プロレタリア文化建設の本質的政策である。何故なら自然科学には階級性があり、『同盟』する相手のブルジョア自然科学者に『学問的利益』があるとしても(彼等は本質上弁証法を拒否するから、利益を受けるはずはないのだが)、それはブルジョア自然科学への利益であって、プロレタリアートにとっては意義がない。

解答の大意——『逆説的にいえば、むしろ一定の限度において発展の可能性をうばわれているという事自体が、ブルジョア自然科学をブル的と呼ばしめるのである。われわれがこれを受けつぐ(もちろんわれわれ流に)ことは、この行詰った、若しくは横道にそれた発展を打開する可能性を得る事であって、それゆえにまたプロレタリア科学の道である。』『自然科学に関する限りでは、われわれは一切を、ブルジョア自然科学者から学ばねばならぬ。彼等から必要なだけの知識を学びとるためには、われわれは』(われわれのヘゲモニーの下に、彼等に対して)『一定の譲歩や妥協を辞さない。「同盟」はとりも直さずこの種の妥協の一形態に外ならぬ。』質問者はヘゲモニーを学問的意味に解し、コムニストが自然科学の領域でブルジョア科学者を威服させる業をあげることが必要と考えているが、『これは自然科学に関する限りでは不可能でもあり、またある意味では不必要でもあるので、この意見は正しくない。ヘゲモニーは政治的意義に理解されなければならぬ。』

質問者は、これまで見てきたような誤った偏狭な観念的な科学階級性論をもって問題を考えたために、「プロレ

タリア自然科学」をプロレタリアートの手にて建設せよという結論にたどりついたのである。質問者のプロレタリア自然科学者というのは、労働者階級出身の自然科学者の意ではなく、（また（解答者の誤解した如く）階級的政治活動家出身の自然科学者の意でもなく、）プロレタリア階級闘争の観点に立った科学者、それも、自己の歴史的社会的地位の唯物史観的反省の上に立って、社会的に活動することを知っている科学者というよりは、寧ろイデオロギー論の立場から、ブルジョアの学問形態としての自然科学を批判し、その階級的地盤を暴露し、これを粉碎し、自然科学に「プロレタリア的思惟様式」としての唯物弁証法を適用することを知っている者のことであろう。これに対して寺島氏が「逆説」をもって答えたのは正当である。当時の一般的意識にはこれが逆説であったというのは面白いことだ。

レーニンは自然科学がそれ自身唯物論の支柱であり、観念論との闘争の武器であるゆえ、そのことを自覚せる科学者との同盟を提議したのである。自然科学はそれ自身の立場において、形而上学的思弁や観念論的理念に対立し、ブルジョアのイデオロギーによる解釈や意味付けに対立する社会的・哲学的本性を内包しているのである。われわれは自然科学に固有な弁証法的思惟法則の意識を与えることによって、何者にも奪われざる自然科学の合目的な理論的進行を図らねばならない。この進行がそのまま唯物論的世界観の発展なのである。戦闘的唯物論は一方ではこの自然科学に基いて観念論を粉碎し、他方ではこれを観念論の影響の下から戦いとして自己のものとするのである。

レーニンが「戦闘的唯物論の意義について」のなかで提議したのは唯物論的世界観のための闘争における同盟であって、例えば社会主義建設のためのプロレタリアートと自然科学者層との社会的同盟の問題ではなかった。この社会的同盟について注意すべきことは、自然科学者にプロレタリアートの事業を理解させその支持者たらしめることは、常に必要であるが、かくして成立する同盟は決して譲歩や妥協の形態ではない。ソヴェト同盟における産業

建設をみてわかる通り、自然科学者や技術家はその資格で益々社会主義の中へ組織されるのである。ソヴェト政権はかつての個人経営農民否富農（クラク）とすら『妥協』した。しかし富農はもちろん、個人農も、その資格では社会主義の中へは組織できない。結局は社会主義的共営農業の建設によって現在の如く彼等の社会的基礎を精算しえるまでの過渡的戦術にすぎぬ。しかし、資本主義社会が残した自然科学者を、社会主義建設の側に組織するのは闘争者間の妥協ではなく、また労働者出身の科学者が必要な数だけ養成されるまでの過渡的戦術でもない。それはそれ自身として社会主義建設の一つの力なのだ。それに肉体労働と精神労働との分業が止揚されるまでは、社会層としての自然科学者は残るであろう。（最近のスターリンの演説ではソヴェト社会の三つの階級として、農民・労働者・インテリを挙げている）。かつまた社会主義に組織され、社会主義を理解するにいたった自然科学者は、もはやその経歴によって『ブルジョア的』自然科学者と呼ぶことはできない。たとえ彼等が哲学観や自然科学観の中にブルジョアの観念論を多分に残しているという理由で『ブルジョアの自然科学』者と判断される場合でさえも、それは彼等が本質において『社会主義的』自然科学者たり『社会主義的自然科学』者たるをさまたげぬ。

——寺島氏の前出の所説と今の逆説を補いつつ、この問題に若干蛇足を加えると、自然科学は元来人類の生産的技術的活動の成果なのであって、そのブルジョアの占有とは氏の如く必然的関係なく、結局相容れないものである。ちょうど人間の社会的生産活動が生産手段および成果のブルジョアの占有と相容れない如く。そして社会主義が唯一の社会的生産者としての労働者階級の固有の地位の展開たると同様に、社会主義的産業に組織され社会化されることは、本来社会主義の力であるところの自然科学の内的な運命なのだ。ソヴェト同盟において、自然科学者が、その専門の自然科学的知識という一点によって社会主義に吸収されかつ益々その生活条件を向上して行く事実は、自然科学そのものの社会主義的性質を雄弁に語っている。『ブルジョアの自然科学』という用語に意味があるとすれば、それはブルジョアの占有の下における自然科学の意味である。そして労働者階級に、それ自身の反省

としての社会主義を意識せしめるのに長い闘争、組織、宣伝が必要であると全く同様に、自然科学者に科学の本来の社会性を自覚せしめることは、やはり長い困難な啓蒙活動を必要とする。

だが、(資本主義諸国において、ブルジョアの占有の思想的社会的な影響と自然科学との対立はそのあらゆる発現において自然科学の社会性を意識せしめる) 一方『プロレタリア的自然科学』という不細工な名称に意味があるとするれば、それは解放され社会化された自然科学、『社会主義的』自然科学の意味である。換言すれば、『ブルジョアの占有』に対置された『自然科学そのもの』である。ブルジョアジーに対抗してプロレタリアートが別の(例えば弁証法を了得せる)自然科学をもつ意味ではない。弁証法なるものは、プロレタリア意識の別名ではなく、元来自然科学(一般に科学)の理論的本性の反省なのであって、それを個々の科学者が意識しているか否かによって自然科学そのものの本質およびその現に置かれている現実の社会的地位が変わるものではない。昭和七年ごろだったと思うが、私は誰かが、某々はソヴエトの科学者(すなわち社会主義建設に参加している科学者)だから自然弁証法論者だといっている人があるのを聞いて驚いたことがあった。

自然科学者とプロレタリアートとの社会的同盟については、その翌年の伊豆氏の既出著書にも、興味ある筆致で論じられている。しかし、根底に方法論的差異が横わるものとして表象されるブルジョア自然科学(伊豆氏はその方法を経験主義、また別の人は機械的唯物論と特徴付けている。——前記本多氏の論を参照)とプロレタリア自然科学との理論的対立といったような観念をかの政治的社会的『同盟』に持ち込むことは根本的な誤謬である。政治的にも社会的にも、彼等の経験主義や自然主義的唯物論に譲歩して一向差支ない。弁証法はその理論的権威によって彼等の実際の自然研究の必要上から了得せしめることが肝要なのである。プロレタリアートの綱領が弁証法を了得した科学的理論家によって確立されたということから、プロレタリア的『自然科学者』は、自己の専門研究において弁証法の論理を採用する底の『プロレタリア的自然科学』者たらねばならぬと要求することは、一定の哲学的見

解を政略的に強うることであつて、肝心の弁証法そのものの研究の正しい發展方向をも阻害するであろう。この際大切なのは第一に、自然科学はそれ自身社会主義建設と人類解放の大いなる力なのだということの理解であり、更に自然科学の基礎となる人間の社会的実践、自然科学の社会性（社会的人間性）の理解である。これを自然科学的認識の理論的本性の反省（弁証法）と混同したり、とり違えてはならない。

弁証法は、経験科学と同様専門的に実証的に研究されねばならぬ思惟法則の科学なのであり、最大多数の自然科学者にとっては、それ自身弁証法的に、すなわち自らの専門的経験的研究の一つ一つの段階を通じてのみ、反省的に習得しえるにすぎないのである。経験科学と同様に経験的に研究されねばならぬ思惟法則の科学であること、それ自身自然科学と自然科学的認識理論の本性を、その社会性の理解にすり代えたり、混同してはならぬ。それは実用論、経験論の一変種であり、自ら理論を建設することを忘れた人間のすることだ。この数年来英仏等の自然科学者等が反資本主義的気分から、マルクス主義に関心をもちつつあることが屢々紹介せられ、また古い歴史をもつ *nature* 誌などにも（ちょうどわが国の『科学』誌にも見られたように）その事情が反映しているが、彼等の中には冷静にプロレタリアートの綱領と自然科学と自然科学者が現におかれている社会的地位とを理解し、組織的に提携せんと努力するかわりに、弁証法をむりやりに呑み込んで早く『プロレタリア自然科学』者となる道を選んだのではないかという印象を受けるものもある。しかしそうしたことは、自然科学の実証科学としての固有の性質を毀損することによつて、かえつて裏から形而上学的観念論へ飛び込むものではないかと思える。これは全く裏返えにされた『ブルジョア自然科学』であるように見える。しかしやがては彼等も弁証法というものは、弁証法的に、すなわち自己の経験的研究の一つ一つの段階を通じてのみ反省的に習得しえるものだということを悟るにいたるであらう。現在弁証法の理論家達は、その言辞の外見的な賑にぎやかさにもかかわらず、自然科学者をその実際研究において裨益ひえきしえるほどの科学的成果を挙げていないことを自覚せねばならぬ。

さて、昭和四年までに、自然弁証法について論じた自然科学者は概して福本イズムや三木哲学の影響がなく、経験科学者の唯物論的感覚から弁証法を自己の研究方法として消化せんとする努力が中心であった。

しかし、昭和五年に論究が哲学的文筆家の手に移ったとき、直接的な自然研究者の関心の立場は、自然科学の階級性（田辺博士対寺島氏その他）やその社会意識形態性、自然弁証法の論理的性格（戸坂『自然弁証法』『理想』十七号）や自然弁証法の問題提起の意義（三枝、『ヘーゲル及び弁証法研究』八月号）などのすなわち哲学的認識論的興味の立場に変化した。そして然るべき人がそれぞれ発言したあとで、ジャーナリズム場面からの唯物論哲学の一般的退潮とともに、翌六年から問題は再び自然科学者の層に移り、『科学』誌上で自然科学の階級性や唯物弁証法適用の可否が論争されたりした。また小倉博士の引続いでの研究（『思想』誌上「フランス数学の社会史」昭和五年）をはじめ、自然科学および数学を一つの文化形態として、唯物史観を適用したイデオロギー論的研究もこのごろ数種現われている。（岩波講座『哲学』中の岡邦雄、イデオロギーの発生、理論社『イデオロギ論』中の岡、伊藤至郎氏の論文）その中には、昭和七年、『日本資本主義発達史講座』中の小倉博士および岡邦雄氏の明治維新後の数学史・自然科学史の研究もあった。（同年六月岡氏は『岩波講座「哲学」』のなかで『自然弁証法』を発表された。）こうした間に自然科学の問題にマルクス主義を結びつけることに関心をいだく人びとは、その数を益々増大して行った。自然弁証法論の新しい段階は昭和七年十月の唯物論研究会の創立と結びついている。

以上を通じて、論究は殆ど自然弁証法の哲学的方法論的問題や科学のイデオロギー（社会的意識形態）性の問題に限られていた。自然科学の個々の学説の内容に立入ってその弁証法を明かにすること、自然科学の当面の諸問題の弁証法的性質を明かにすること等の試みは、先ずなかつたといつてよい。昭和六年伊豆氏の前掲書や同じ時に『プロレリア科学研究』第一集に載った『弁証法と微積分学』（高村英夫氏）の如きも、その僅かな例ではあったが、科学理論そのものに対する考察というよりは、理論の個々の側面を拾い上げることによって、自己の持っている弁証

論理的表象を満足せしめる試みという感があつて、科学理論の發展の本質的な契機に沿つて問題を提起したものはなかつた。何よりもその契機が探られない限り、考察は結局現実の自然科学の發展から遊離し、弁証論的表象のなかで思想の遊戯を試みているのと変らなくなる。それでは弁証法論理をより豊富な形でとり上げて展開することも不可能であろう。この点は昭和九年から問題になつた「自然弁証法の具体化」においても充分に考慮されねばならぬ焦点である。

この方面ではむしろ昭和五年から現われ始めた翻訳文献を挙げねばならぬ。デボーリン『弁証法と自然科学』上巻中の『エンゲルスと生物学における弁証法』などその最初の例であろう。その年から『マルクス主義の旗の下に』が白揚社とプロレタリア科学研究所から別々に創刊され、後合同して昭和九年までに二十七集を出したが、その中にはこの方面の論文が多少は紹介された。これらは大抵ロシアの戦闘的唯物論者協会の月刊機関誌『マルクス主義の旗の下に』（一九二二年創刊、レーニンが『戦闘的唯物論の意義について』を寄せたのはこの雑誌である。）およびそのドイツにおける姉妹誌『マルクス主義の旗の下に』（一九二五年創刊）からの翻訳である。最初わが国の弁証法研究を促す上に影響が深かつたのはドイツ版の方で、河上博士訳『レーニンの弁証法』、デボーリン『弁証法と自然科学』等はそれから訳された。昭和五年に本多謙三氏が『理想』でルダスの新力学に関する論文を、寺島一夫氏が『プロレタリア科学』でユリネツ、ライヒ等の精神分析学についての論文を同誌から紹介検討している。ロシア版の方の諸論文に接したのは主としてプロレタリア科学研究所ソヴェト科学研究会の諸君の力にまつ。この系列の最も重要な文献としては、一九三四年の同誌から訳出された論文集『現代科学の基礎』（永田広志訳、昭和十一年白揚社刊）を挙げねばならぬ。現代の主要な物理学者の認識論的傾向、量子力学と関連せる因果律やエネルギー保存則の現段階、ニュートリノ仮説をも含めて原子核の最新の問題等が分析されている。この最後の問題は一九三三年の後期に開かれたソルヴェイの原子核会議を思い出させる。なお、一九三二年夏ロンドンで開かれた国際

科学史、技術学史会議へのソヴェト代表の講演草稿を集めた『サイエンス・アート・ザ・クロスロード』は国際的に相当注目されたもので翌七年にはその邦訳『新興自然科学論叢』がでた（後『岐路に立つ自然科学』として唯物論研究会が改訳を出している）。

その他の翻訳文献および昭和八、九年ごろからわれわれの間にも現われ始めたこの方向の論文や著書のあるものは既に述べた。外にも、主として唯研誌上に、（数学について吉田欽、今野武雄、伊藤至郎、世田、物理学について岡邦雄、郷一、篠原道夫、生物学について石原辰郎、石井友幸等の諸氏の）多少の試論があるにはあるが、注目すべき弁証法上の発見とか、発展的な問題を含んでいるものはあまり見られない（今後の研究の基礎となるような力作はなかったといつてよい。何かの点で考慮にのぼる限りのものは、以下機会に応じて関説しよう）。

なお、昭和五年以後からは自然弁証法文献を列挙することを差し控えるが、必要のある読者は、唯物論全書『自然弁証法』に便利な文献目録があるから参照されたい。（ただしこの目録には『唯物論研究』誌上の論文は含まれていない。）注意を要することは、自然弁証法という学問は、元来、唯物論的弁証法という思惟規範がどこかで、何らかの立場で設定されて、その規範ないし理念から自然認識を判断するという学問ではなく、ただ経験的自然の内的発展や相互連関の把握として、またその把握方法の反省として定立されるものであるから、弁証法的唯物論の立場にあると規定している人、規定されている人びとの言、必ずしも自然弁証法的思想を表明しているとは限らない。これに反し、特に唯物弁証法を意識していない人びとの論文や研究の中なかにも、自然法則や自然の認識における弁証法が反省されていないとはいえないかも知れない。われわれの問題、史的手引は本当はそれらをも分析すべきなのであろうが、いまは便宜上、自然弁証法という旗印をめぐって、賛成的にか反対的にか意識化された研究の分析のみに限る。

ここで私は、昭和四年の『自然弁証法』上巻訳序、および本来翌五年十月に書いて置いた下巻跋文の二つに関連

して前節の終りに『その後の理論的課題』と述べたところのもの、すなわち本節のはじめにおいて『マルクスの弁証法』の立場の止揚』として挙げた問題に立帰えろう。(を概括して置こう。)

果して、物質とか存在とかが精神や思惟よりも根本であるという命題は、階級闘争の理論や社会思想と無関係であつたらうか。この命題が肯定されようと否定されようと、それがプロレタリア的意識にはどんな影響があるだろうか。この問題が大正の最後の年を通じて私を苦しめた。まず、こんな風にも考えられる——問題は世界を解釈することではなくて改変することである。この立場にある限り、思惟や精神の前に現実的に存在する社会的物質的条件の問題がいつも根本とならねばならぬ。物質的基礎あつての精神である。精神的事柄を整えるには物質的条件を処分しなければならぬ。世界を改変するものすなわちプロレタリアートは唯物論に基いて世界を考えねばならぬ、と。が、ここにこそ問題があつた。

『問題は改変である(という意味での『プロの立場』にある)』がゆえに、それに適応して精神は物質の所産だと認める見方というのは結局、主観がそう観るのであつて、事柄がそう在ることにはならない。精神は自然の所産であるとの命題はこの立場による以外それ自身としては証拠立てられないのか。また精神は自然の所産であるということ自身が、一層深い反省においては、思惟の表象であり構成であるという近代認識論説は、『立場』の力によって打破る以外方法はないのか。そう考えることは、他の一切の事柄を索然たらしめるに足るこの『立場』の魅力にもかかわらず、私の理論的常識を満足させなかつた。

またその一方では、存在が思惟を生んだという『プロレタリアートの立場』をそれ自身として、自然科学的命題から独立せしめる傾向も馬鹿にはならなかつた。否、哲学入門者の洗礼の水であつた新カント派的批判主義的認識論が、自然科学的知識を批判的に疑うことを一般的に教えていた際、精神は自然の所産だというのが如き自然科学的素朴的命題からの絶縁を宣言して、自らの権利を自立的に主張することが、かえつて『プロレタリアートの立場』

に哲学的強味を与え、かたがた認識論派の哲学からも解放される所以ゆえんでもあるのだとさえ思われた。

唯物論は実践階級を、『批判的』認識論派の哲学は生産的社会的実践から遊離した階級の考え方を、表現するといふ命題はそれ自身革命的に見え、すべてを説明するに充分に見えた。そして、その後もあらゆる哲学思想を、何等かの仕方でも『階級的基礎』をあげて、それに帰属せしめることをもつて、能事とする試み（いわゆるイデオロギー論的考え方）はずっと残っている。だがエンゲルスやレーニンの強調した、「それらの哲学思想は、かかるものとして人類の思惟が、世界の認識に歴史的につき進んで行く必然的段階、契機、結節点（あるいはそれから咲いたむだ花）をなすものである」との考え方は、まだまだそのころ消化されなかった。しかし、マルクスやことにエンゲルスが、自己の世界観の『基礎』として、思惟に対する存在の、精神に対する自然の先在性の命題を持ち出したからには、『基礎』の上で展開された結果によつてでなく、それ自身として、是認さるべき核心をもたねばならぬ。しかし、それを素朴的独断的にでなく、多少とも批判的に妥当せしめるにはどうしても、新カント派やマツハの経験批判論の認識論を誰の目にも反証を人れる余地のない論証によつて打破するだけの認識理論をもたねばならないと思われた。ご多分に漏れず、私もまたマルクス主義哲学は近代の精緻な認識論以前の素朴なものであるという印象を受けたものだ。だが、われわれの認識の性質を反省すればするだけ、つまり哲学の問題が私に明かとなればなるだけ、素朴と思われたものがその後光輝を放ってくるのに自分ながら驚いた次第である。

先まず、外界が思惟の現象であり、思惟の構成であり、感覚の複合体であるとしたところで、その外界に関する自然科学が、思惟し感覚する精神を自然の所産と結論してしまつたとき、事柄はどうなるべきだろうか。やはり秘密はここにあると思われた。感覚や思惟（主観）は自然（客観）の所産であり反映であるということ、このこと自身が感覚や思惟の構設であるということ、かく構設する主観自身がまた自然の所産であるということ、こうした堂々めぐりは右の批判主義的認識論と唯物論との堂々めぐりである。だがまず、自然において明かにされた運動や関係

が、たとえ精神の構設したものにせよ、しかも逆に精神の諸要素がどんな意味においてもせよ、自然における諸要素によって闡明せんめいされえたるならば、それはその限りにおいて、唯物論の一応の勝利であつて、その後は精神の關係として提出されるものを、自然的なるものの關係の展開またはその一側面であるまいかとして、考察を進めることには充分の権利があるであろう。そしてこれが成功する都度、唯物論は勝利するのだ。唯物論は、その正当性を一挙にして人びとの目に直観せしめるべき手段はない。それは、事象を自然から自然の展開として闡明せんめいしえる限りで、漸次に貫徹され正当化されて行く観点である。この観点がまだ全面的に貫徹されていない知識領域では、主観によつて客観を闡明せんめいせんとする認識論も一応の権利をもち意識的にあるいは無意識的に認容されるので、これはその限り、どうにも仕方のないことである。果してどちらの認識論によつて、知識の全領域を占領しえるかは、争奪戦のうちにきまることだ。われわれが唯物論を最も正しい認識だというのは、この観点が『少くとも大綱の上では知識のあらゆる領域に貫徹され』、『フオイエルバッハ論』七六頁）あとはこれを細部まで仕上げることのみが問題だ、という事情になつていゝという事情に基づくので、それ以外のいかなる理由にも基づかない。それ以外の何等かの立場を設けて、その立場から知識を展開すれば唯物論となつていゝのは唯物論の歪曲であり、理論の正しさを奪うものである。この考え方は、その後の私の思索を導く光となつた。そしてこれによつてそれまで充分に理解できなかったエンゲルスの言説が適応的に明かとなるように思われた。反デューリング論の思惟の外に思惟と独立に存在があるということは、直観的に常識に訴えたり、単なる経験上の習慣や信念から確定されてそれで足りりとするとはできない。ただわれわれが思惟の上で描き保持している表象は、思惟の中なかへ入つてくる内容的要素の相互関連についての経験が、豊富になつてくるにつれて、その関連の限定または抽象として解明できるといふ事実、この事実が益々ますます確立されていくといふことの中なかにのみ、思惟から独立した外界の存在の証明がある。

『わしの女房と煙草が、わしの感覚にすぎぬなどは非常識極まる。女房は親の里から、煙草は農夫の畠から

工場を経てきたのだ』という人に、『しかしそういう風な確信は、そういう風にすべてが君の感覚の上に印象されているにすぎないのではないか。君はそういう感覚を忘れたり思い出したり描いたりするだけで、君がいまだ感覚しないものを忘れたり、思い出したり、目をつむつて外界に存在する如く頭のなかに描いて見るといったって、できない相談ではないか。君は君の感覚の上で承認している女房と結婚しているのであって、それ以外、見たことも聞いたことも触ったこともないものと結婚しているのではないか』

といえどもであろう。恐らく窮するに相違ない。感覚外の存在を素朴に直観的に信じている素朴实在論が窮したところから、カント的批判的先験哲学やヒューム、マツハハ的批判的経験哲学が生れた。女房が自分の感覚外の存在であることは、自分の感覚の上でたしかめている女房の上に、常に新しい内容を経験（感覚）し、既往における感覚によつて確定していたものは、この新しい豊富な内容の感覚によつて確定している今の女房の一面でしかなかったということが、確定されるとき感覚外の存在が——何らかの意味で——証明されるのだ。もちろん一般に物事は証明される前に直観される。これは当然だが、直観は証明ではない。更にこの証明は、別の方面から、感覚は生物の感官への外界の刺戟であるという関係が発見され、それが自然史の結果として闡明せんめいされることによつて完全なものとなる。（観念論は思惟と存在との問における関係を指摘したり、分析したりはできるが、その結果を証明できない。）第二版序文は素晴らしい感銘を受けたものの一つであったが、それはいままがた福本的『マルクス弁証法』の観念によつて（『経済学批判』としての『資本論』に倣ならい）『自然科学批判』としての『プロレタリア自然科学』を体系化せんと考え立った私の前に、内々不安であったある種の問題をズバリと退けた。『しかし、理論的自然科学の結果、私（エンゲルス）の著作が不用になるかも知れない。けだし、うず高く集積する経験的諸発見を整理するといふ、それだけの必要から経験科学者もまた自然過程の弁証法的特質を意識せずにはおれないであるから』と。プロレタリアートの立場に立ちプロレタリアートの思惟法則たる唯物論的弁証法を体得することなしに、自然科

学者がエンゲルスを追い抜いて行く！ こうした予想を唯物論的弁証法に関して許すということ、また唯物論的弁証法を説明するに当って『フオイエルバッハ論』においても『反デューリング論』、『空想から科学へ』においてもそれをプロレタリアートの立場から導きださないうで、実証材料や観察事実の相互連関の発見から導いてきていてこと、これらの不審は私に閃いた右の新しい光の下で難なく氷解すると思われた。特に『フオイエルバッハ論』の第二節で、唯物論は自然科学上の画期的発見が現われる毎に形態を変化すること、また人類の歴史が唯物論的取扱いの下に置かれたので、この方面にも形態変化が開かれたことを語った箇所（岩波文庫五二頁最初の二行）、最後に、同書での哲学者を『真に駆りたてたものは特に自然科学および産業の強大にして急激な進歩であった』という指摘（同上四九頁）、および哲学的幻想を破るものは『実践すなわち実験と産業』という言葉（四七頁）が新しく光ってきた。何故ならわれわれの当時の意識では唯物論の形態変化は、プロレタリアートの実践の発展段階に依存すると信ぜられていたのである。そして、『哲学は二千五百年の昔から政治的であった』という誤訳命題（哲学思想の政治性という観念が誤りなのではない）を、政治的实践（階級闘争）が認識の根底であると解釈していたわれわれには、『実践すなわち実験と産業』という言葉が唯物論的弁証法の根本精神を忘れたもののように響いていたのであったから。

とにかく、私は、自然のなかで実験観察される諸条件から諸事象の理解を展開することによって、（文字通りに公式的な唯物論的な仕方でも）それら事象の本質を闡明できるか、して見よう、その結果が一般的に受容られているマルクス主義的観念とどんな風に違ってくるか、またそれが果してマルクス主義の見解と結果において一致するか否か、一番験して見ようと決心した。常識的に唯物論が世界の正当な見方であることを直覚せしめるものは、『実在の世界を、先人見的な観念的妄想のない人間の誰れでもの眼に映ずるがままに把握せんとするもの』というエンゲルスの説明であろうが、それはつまり、自然から自然的条件によって展開されるがままに把握することだと理解

した。(昭和八年に至^{いた}つて、『唯研』十月号に吉田敏氏は妄想のない人間とはプロレタリアートの目に映ずるがままに把握することが唯物論だという面白い解釈を私に対置した。しかしエンゲルスは、この一句を『現実上の関連においてあるがままに把握された事実と一致しない観念的妄想をすべて犠牲にすること』(『フオイエルバッハ論』右の引用につづいて)と説明しているのもあつて、プロレタリアート——や一般知識階級や民衆——の中に広^な範に巢くくいた絶えず再生産されるところの観念的妄想を、唯物論すなわち現実的関連の把握をつきつけることによって打破するというプロ・アチ的課題が、吉田氏にはそもそも眼中になつたのであろう。)

この見解から、哲学上の理論的方法や範疇^{はんちゆう}を考へて見ると、『人間の頭脳の所産は、結局において自然の産物たるがゆえに、自然の關係に矛盾せず、それに適應する』(『反デューリング論』第二節)という關係が保たれていなければならぬ。ところで、実証的經驗的に探りえた限りでの自然關係に適應して形成されたのではないところの論理的範疇^{はんちゆう}を、かつて人類は知らなかつたということが大体哲学史的に確定し得^えられるように思われた。ギリシャ哲学のプラトンのアリストテレス的論理にしても、自然哲学が発見した範疇^{はんちゆう}の展開であつた。ソクラテスは、破壊されたその論理的概念をあたかもエレア派の自然認識と同じ具合に人文認識の中^{なか}に導入せんとするもので、メガラ派やプラトンに發展したのは、当然の事りである。スコラ哲学は、超自然的なるものを定式するのに応用されたギリシャ論理の破片にすぎぬ。イギリス經驗論者も自然科学の實驗的研究方法以上の概念を哲学化しえなかつたし、大陸合理論者も数学と物理学で使われる以上の概念を真理探究に駆使しえなかつた。

カントの先驗論理はいわずもがな、フイヒテの純粹我すら、カントが自然認識で闡明^{せんめい}した先驗的方法をもつて反省した実践理性概念がなかつたら、自己を立すべき概念上の支点を失つて出現できなかつたであらう。そのフイヒテすら理論的概念は自然に条件付^つけられて形成されるとなした。ヘーゲル弁証法の論理的核心は、自然認識の反省としての純理哲学、ことにカントの先驗論理とシエリングの自然哲学の一層深い反省に外ならぬ。つまり、自然的

範疇^{はんちゆう}であることが確定されていない概念の上に理論的思考を築くことはできないのだ。従って唯物論的弁証法を『弁証法的特質をもった地位にある無産者階級』の上で形成されたものとして把握することは、現実世界のありのままの連関を^{せんめい}闡明し定式しえる論理としての妥当性をまず消去するものである。そうした弁証法は、本来自然認識において得^えられた^{はんちゆう}範疇が、それと意識されずに、ある種の階級主体の地位にあてはめられ特殊な着色をほどこされて現われたものであるかも知れぬ。もしそうだとすれば、具体的な歴史的社会的現実性の弁証法と称しながらその実、合理的核心においては単なる自然一般、実在一般の抽象的^{はんちゆう}範疇にすぎず、従ってその特殊な着色というのは何等現実に適応しない観念的思弁的妄想であるかも知れぬ。そう思つて福本氏の弁証法を見ると媒介性、生成、全体性等は、これらすべて実在一般の認識方法にすぎず、また自己認識が社会の客観的認識であつたり、認識主体が客体になつたりする弁証法は、現実社会における無産階級の階級闘争の現実的な客観的行程をイークオル認識行程として、それを観念論的認識論の形式に照らして評価したものに外ならぬ。そう考えついたとき、私はフオイエルバッハの観念論がどの点に存するかを指摘したエンゲルスの特徴的な仕方から鮮かな印象を受けた。曰く『彼は相互の愛情に基づく人間の相互関係を、過去の特定の宗教に対する因縁なしにそれ自身に存立するものとして認めないで、宗教の名で浄められる時に始めて完全な資格をえると考える』(岩波文庫六二頁)。

社会的歴史的現実性を唯物論的に、すなわちそれ自身に存立するものとして把握することは、それを自然から展開するままに認めることだ。従つて社会階級として存立する現実のプロレタリアートを認識主体と規定し、それへヘーゲル的なあるいは新カント派風な認識論の(一般に観念論的認識論に特有な)主観客観の統一に関する論理図式を応用してえられた弁証法の代りに、そしてそれによつて清められるとき社会認識は完全な資格を得^えるとなす代りに、われわれは、社会の真の認識を自然に基づいて、自然から展開してきた社会として^{せんめい}闡明しなければならぬ、そういうものとして世界の全体を^{せんめい}闡明しえる弁証法論理を明かにしなければならぬ。(因^{ちん}に、主観客観の観

念論的統一の図式は、「主観の反省または自己意識の中に客観なかがあり、客観の成立する根底を反省すると主観がある」である。その唯物論的統一の図式は、「客観の反省または反映が主観であり、主観の成立する根底を反省すると客観的存在がある」である。）

ちよどそのころ『唯物論と経験批判論』の最初の翻訳が出た。それは、認識の問題に対し、先ず階級的立場なるものを設定してそこから解剖を進めるといふ行き方を全くとっていないことがまっ先に私を打った。それは、唯物論の基本命題（意識と独立な客観的實在の承認、人間のあらゆる意識はその實在の反映であること）をあらゆる場合に首尾一貫して固守し、そのあらゆる糊塗、あらゆる偏倚へんいを断々乎として排すべきことを主張した。そしてこの立場に基づいてあらゆる認識問題を社会認識の領域にまでこの立場を一貫することは『人類の社会的意識とは独立な社会的存在を認め』、前者を後者の反映もしくは所産と見ることに他ならない。だが、それが唯物史観的社会認識の根本的立場だとすれば、プロレタリアートの立場からする認識、また政治的党派闘争の立場からする認識とはそもそも何ものであろうか。前者、レーニンの指摘する立場は確かに文字通りに唯物論的だ。が、後者はいかなる意味で史的唯物論の立場といえるか。ただ一つの解答は、プロレタリア的政治闘争の立場のみが唯物史観的社会認識を可能ならしめるからだといふにある。が、これは何を意味するか。なるほど階級闘争という拭いえない社会的事実を排除して正しい現実的認識などが生れえようはずはないが、相闘争する一方の階級と自己とを連帯つ付け、その各種各様の連帯感の意識において社会を捉えとらようとしたところで、その認識が唯物論的であり、社会のそれ自身の現実的関係の把握であるという保証はどこにもない。せいぜい、そうした意識がきざしたために、マルクスの史的唯物論の理論が勉強され普及され適用されるにいたるといふだけである。現実の社会が唯物論的に認識されるということと、マルクスの唯物論的歴史理論が勉強されるということとは別々のことである。

該書でレーニンはこういつた、『わが国（註ロシア）のマツハ主義者がマルクス主義を理解しえなかつた理由は、

マルクス主義にいわば他の側から接するにいたったからで、マルクスの経済・歴史理論を、その基礎たる哲学的唯物論をハッキリ会得してからでなしに覚え込んだ（時には覚え込むよりは棒暗記した）そのためであった』（第六章二節末）。河上博士は福本氏から唯物史観の文義解釈的模索のゆえに手ひどく非難された。しかし、福本氏が真の『マルクスの』精神として提出した諸種の方法論的認識論的概念もまた——ちよつどそのころわが国に流行しはじめた言葉をかきついでいえば——マルクス主義に他の（観念論的認識論の）側から接する一つの『解釈学的概念』以外の何であろう。マルクスおよびレーニンの経済的政治的文献の一般的な解釈的手腕、そしてそれを直観的に見透したつく体系に整理して戦闘的主張に転化する手腕は見事であった。しかも『無産者的認識方法』を通じてのそうした戦闘的主張が当然のことながらプロレタリアートの最高の自己主張（『全無産階級的政治闘争意識』）という意味に高められたときには悦惚（宣託）的でした。だが、マルクス自身はいかなる仕方でも現実を把握し彼自身の理論を築き上げたのか——それが問題だ。

マルクスは『経済学批判』の序文のなかで自らそれを語っている。社会的存在は人類の社会的意識から独立した必然的關係で、後者に対しては前者が決定的であつて、前者に後者が適応する關係にある。独立的に存在するものはそれ自身として自然科学的な忠実さで闡明さるべきで、後者すなわち社会意識に従つて判断してはならぬ。

レーニンは、意識が存在の反映であり、存在は意識から独立しているという命題は、いかなる最新知識によつても、最新物理学によつても、攪乱されず反証されえないことを確定し、如何なる点を踏みはずして人びとが観念論的認識論に陥るかを指摘した。この命題から真すぐにでてくる結論は、存在はそれ自身として（それ自身の現実的連関において）把握されねばならぬということである。自然的存在と同様、社会的存在についてもそうである。これが客観的存在を把握する正しい道で、『かく把握された事実と一致しない反映（観念論的妄想）を容赦なく犠牲にしよ』とすることが唯物論の立場である。ここにおいて真実の唯物論的認識理論は、この客観的存在をそれ自身に把

握する方法を説明するものでなければならない。その第一の条件は実践である。実際にその存在に当ってみることである。『われわれの実践の確認するものが唯一の終極の客観的な真理であるとすれば——そこからして、この真理への唯一の道こそは、唯物論的見地に立つ科学の道だという認定がでてくる』（二章上六節末）。つまりマルクスが自然科学的な忠実さで確定することといい、エンゲルスが自然および歴史の実証科学といい、もしくは『ドイツ・イデオロギー』で経験的実証的観察といった方法がそれである。ところでレーニンはどこで論究をとどめている。

それ以上の方法、すなわち『実証科学によって並びに実証科学の総果を弁証法的思惟をもつと総括することによって到達しえる相対真理を追求』（『フオイエルバッハ論』岩波文庫三八頁）する方法そのものについては該書では分析しなかった。また、その方法によって闡明せんめいせられた客観的存在そのものの弁証法も該書では説明していない。（昭和四年以降レーニンのこの問題については『哲学ノート』（一九一四〜一六ころの主として弁証法に関する読書ノート）が出版されて、大体のことは覗うかがいえる。『ノート』のうち『弁証法の問題に寄せて』や川内氏の訳出した部分についてはいち早く知られていた訳だ。昭和六年五月には紹介論文集『レーニンの哲学遺産』共生閣の訳が出ている。『ノート』の全訳は昭和八年以降白揚社刊）後者については、レーニンの全著作は帝国主義時代の全世界の政治経済的現実性の弁証法の説明とみてよい。因ちなみにレーニンはかつて自然科学の最近の発展に基づいて自然の弁証法を説明することは試みていない。エンゲルスはそれを試みようとしたのだが。レーニンの自然科学に対する寄与についてはマクシモフ『レーニンと自然科学』ナウカ社刊等多くの試論がある。われわれにとつては、唯物論全書『自然弁証法』中の吉田・石原・岡三氏の討論が面白い（一〇四〜一一一頁）。

自然弁証法の問題は一般に『自然科学への弁証法の適用』という風に理解されているが、これはある意味では自然過程そのものの弁証法の認識ないし説明であり、理論的自然科学者の本来の仕事である。また、狭く、自然科学理論について、あらゆる観念論的な誤った有害な観念が発生する思惟の契機せんめいを闡明して、自然事象を正しく思惟す

る弁証法的論理を説明する意味にとるとすれば、レーニンは前記の如く『戦闘的唯物論の意義について』で、その必要を指摘し、課題を提起している。しかし彼自身が自分でそれをやった訳ではない。——「哲学ノート」は、いかに彼がその革命的生涯の最初から、マルクス主義に導かれてあらゆる問題に唯物論的態度を一貫し、現実的な社会的政治的関係の闡明の中に弁証法的思惟方法の本質を体得していたかを示している。断章『弁証法の問題に寄せて』のみをみても、『唯物論の見地に立つ科学』すなわち経験的現実的認識の弁証法の根本的特徴が遺漏なく（簡潔に）尽されていることを知る。この時期以後多くの機会に、レーニンは、弁証法的論理の概論を説明し、現実的関係の実際の認識に弁証法を適用する仕方を説明し、弁証法を意識していない場合に人びとがどんな観念的な誤った有害な見解に陥るかを説明した。前出一九二二年の労働組合の討論においてブハーリンの誤謬を説明している如きその著しい例である。しかしながら、その同じことを自然認識の領域で遂行することは、課題として残したのである。

『唯物論と経験批判論』の第五章「自然科学における最近の革命と哲学的唯物論」は（該書そのものの目的からして）論究を標題の如く（思惟と存在とイづれが根本的かという問題に対する解答としての）哲学的唯物論に制限している。すなわち、実証的経験的観察事項の弁証法的総括によつてまさに到達さるべき正しい諸相對真理の特定の内容を、研究者が弁証法的思惟の契機を外したために、観念的に歪曲されていることから援護したのではなく、またその特定の内容を用いて哲学的唯物論の諸契機を抹殺せんとするものからその諸契機を擁護しているのである。すなわち、そもそも人間の認識が客観的存在の反映であるのだという事実、換言すれば、人間の認識は客観的存在とその法則（絶対真理）を益々正確に模写してゆくところの、そうした性質をもった相對真理であるのだという事実、すなわち人間の認識は相對的でありながら、絶対的要素を内包し、絶対真理に接近して行くものであるのだという事実、この弁証法的事実がわからないで、客観的存在の契機を清算しようとする物理学的认识論者に対し、こ

の、事実すなわち哲学的、唯物論の基礎、命題が何ら否定される理由がなく、かえって清算者の論拠こそは、この、事実を立証するものであることを指摘しているのだ。レーニンはこの章では、この、弁証法的事実の弁証法的内容、すなわち益々正確ますますに存在を反映し行く思惟の法則としての弁証法的論理にも、またかかる反映の一定段階としての自然科学理論の内容にも、関説してはいないのだ。

レーニンは、マルクス、エンゲルス以後自然科学の新しい発展に対して、正面から決済することを知っていた唯一の弁証法的唯物論者であった。しかし、彼の自然科学への寄与を不当に誇張するものは、レーニンがわれわれのために残した課題がどこにあるか、「自然科学に弁証法を適用する」課題はどこにあるか、について明確な概念を持ちえない人間だ。『十月』は彼を彼の固有の課題に集中せしめた。われわれはレーニンが自然科学に対して、もつと多くの寄与をなしえる機会と余裕がなかったことを残念がる必要はない。『十月』という事件が彼を自然科学から奪わなかったら、マルクス・エンゲルス以後最大の否、唯一の、唯物論哲学上の業績は、われわれの間にかくも普及していなかっただかも知れぬ。その方が自然科学理論にとつてはかえって大きな損失であつたらう！

さて、福本氏の『無産者の認識の弁証法』に対して、社会的意識は社会的存在の反映であるという、マルクスの真の認識論的立場は、実践によつて——という、意味は、自然科学が自然を研究すると同じように実験・観察・実地検証によつて——客観的な経済的社会的存在を捉とらえることであると理解できたとして、ここに一つの問題が残る。それは、福本氏の弁証法および政党組織論を、観念論的非現実的と非難し党派的に対立していた人びとにおいて、無視されていた問題であり、その派の一人稲村氏が対立の意図から訳出したデボーリンのルカチ評からわれわれが満足をえず、それを不評ならしめた質の問題である。唯物論が自然および歴史をそれ自身あるがままに認識する科学になつてしまうと、『哲学者は世界を種々に解釈しただけだ。世界を变革するのが問題だろうに』というその問題はどうなるか。無産階級の立場に立つて、政治的実践の立場、福本氏の表現をかりていえば、意識的行為性の立場

に立つて世界を『把握』するという、衝動的に迫りくる問題はどうか。唯物論者は世界を正しく認識しただけだということになってしまつて、肝心の問題がどこかへ消え失せはしないだろうか。唯物論的認識論にしろ、反福本派の『現実主義者』にしろ、この問題に満足な解答を与えぬ限りは、いかに正しいものを持つていたところではじめから問題にならないではないか。

これに対する解決は案外手近にあつた。当時左翼で聖書のように読まれたレーニンの『何をなすべきか』がそれだ——『革命的理論なくして何の革命的行動ぞや。』唯物論の立場から社会の発展と階級関係をそれ自身あるがままに認識した理論こそ、行動を正しく導く。行動の客観的な意義および条件が認識されているところにのみ、正しい意識的行為性がある。理論と行動との統一は、プロレタリアートの立場から、あるいは意識的行為性の立場から、『把握』することにあるのではなく、現実の關係の正しい認識に従つて行動する限りに、(と、こ、ろ、に) 成立するのだ。マルクス主義はプロレタリアートの立場からする認識なるがゆえに正しいのではない、正しい(唯物論的立場からする)認識なるがゆえにプロレタリアートを正しく導くことができ、プロレタリアートはそれを自己の指導理論としなければならぬのだ。——この結論に到達したときのよろこびを私は今なお忘れえない。昭和二年の夏六月であつた。

ここで私は、精神は自然の所産であり、意識は存在の反映であり模写であるという唯物論の立場を、認識および意識的行為の問題に首尾一貫して維持する立場に確信ができた。福本氏の『マルクスの若しくは無産者的認識の弁証法』や一般に階級的政治的実践の立場からする『把握』は、意識と独立に客観的自然成長的に進行しつつある社会的実践關係のなかで、無産者階級を理論によつて目的意識的に導くという実践——この現実的な従つてそれ自身社会的存在であるところの実践が、逆倒的、観念的に福本氏の意識へ反映し、自己意識の上での『把握』過程として解釈(改釈)されたものには過ぎない。『理論が実践へ統一され、実践にまで止揚しやうされ、実践の上で実現され

る』という形態で表象されたものがかの『把握』である。マルクス主義とは、何等事象の客観的認識ではなく、かかる『把握』の弁証法によって、実践が、実践の主体が、プロレタリアートが、理論の中なかへ止揚しやうされた成果であり、かかるものとして実践の段階が進む毎に更新される意識であり、この意識の中なかにおける理論と実践である。かかる『把握』の弁証法すなわち『マルクスの弁証法』を福本氏に教えたルカチが、この弁証法を自然認識に適用することに反対したのは当然だ。何故なにゆえならこの弁証法は元来、現実の社会的存在の上で実現さるべき特定の実践関係の弁証法が観念論的に歪曲された反映であり、論者の意識においてはその実践そのものと同じなのだから、この弁証法を自然へあてはめることは、論者の意識ではその実践すなわち『有産者社会の批判者』としてのプロレタリアートの実践を人間以前の自然にまで引戻してしまうのと同じことになる。否、これを過去の社会関係にすらあてはめることもできない。というのは、それはその実践を有産者社会以前の存在に引戻してしまうことになるから。そうした自然や社会の客観的な法則を分析することは『実証科学』にまかせておけばよい。しかしながら、自然も前有産者社会も、この弁証法の『把握』によって照明されるとき、換言すれば、あらゆる認識対象はこの、『把握』へ止揚しやうされるとき真正の認識となる。——かくの如ごときが、『無産者の把握』の『マルクスの弁証法』であった。(この『把握』論は、昭和八年、ソヴェト哲学界のお手本にならって、その日本の亜流がデボーリンの影響を克服しつつ『実践的認識論・実践的模写論・実践的反映論』の名でそっくりそのまま反芻はんすうしたものである。もちろんその間にマルクス主義の勉強の素晴らしい発達の時期が介在しているので、この『把握』の中なかへ止揚しやうさるべき知識材料、論理的素材、経験法則の量も増大しており、『実践的模写論』もそれだけに進歩があつたが、根本は少しも変つていなかった。そして、その『把握』の弁証法にその後の論理学的勉強の知識を吸収せしめて、『最も普遍的、最も全面的』と表象したが、実際においてはやはりプロレタリアートの批判的実践の一解釈学的概念にすぎなかつた。)

この、『マルクスの弁証法』は、自然および社会の諸事象を、特定の観念に対する因縁なしに、それ自身で存立

するものとして通用させず、階級意識が観念論的に論理図式化された『無産者の把握の弁証法』によって解釈されるとき、はじめて完全なる資格を得ると考えたのだ。つまり、自然それ自身の運動から、それ自身の条件によって展開する社会的人間の生産、その生産の上に必然的に展開する歴史的階級実践の相互関係、その関係の中から必然的に展開するプロレタリア階級と、その実践的批判的行動、その行動の上に展開するその行動の意識——この、関係をそれ自身において把握し、かかる把握において、その実践的批判的行動を意識することによって、その意識をこの、関係へ益々適応させることが、本来の唯物論的な認識である。プロレタリアートの立場からの認識というのは、結局、この、関係においてその行動を認識すべきところを、この、関係からはずして自立的なものとして取上げられたその行動の意識（実践理念）において、この、関係を屈折せしめようとする解釈的試みにすぎない。（既に見たようにこの理念はかかる観念論的抽象においては、主観と客観との逆立的相互関係の図式に帰着するので、プロレタリア的認識の論理としての弁証法は、『優れて』主観客観の関係の中にあるという考え方がその後随分散見された。）プロレタリアートの認識というのは、人間の頭脳がプロレタリアートを本来の関係において認識することの謂であって、プロレタリアートが認識するという表象はプロレタリアートの行動（その意義・形態・条件）を認識する、あるいはプロレタリアートの行動が実在するままの関係において、認識され反省されて行くという、客観的過程の観念論的逆倒的解釈であり、いい表わしである。こうして、一つの哲学的あるいは認識論的学説を判断するには、まず、存在を、しかも自然的存在を、それがいかに処理しているかを吟味してみればよい。真の弁証法は主観の中に、主観と客観の関係の中にでなく、先ず、客観の中に自然の運動の中にある。自然弁証法の問題は、マルクス主義の理論的哲学的定礎が問題となる限り、決定的な意義をもつ。

上のような見解に到達したころ、私は友人の注意で『思想』誌上の三木氏のマルクス主義解釈の第一労作を読み、数日後には京大で第二労作の発表を聞いた。いままがた訣別したばかりの福本氏の解釈を、哲学的美文学化したよ

うな氏の思想には我慢がならなかったが、しかし氏が自分の思想のなかで（すなわち『無産者的基礎経験』の立場で与えられる人間の自己解釈概念としての『マルクス主義的人間学』によって）取上げ、意味付け、解釈し、表象した当の対象や関係を私の側から自由に捉えきたって、それをそれ自身として在る通りに実証的に闡明し、その闡明の成果を氏の空想的表象に対立せしめるという風な正攻法は、やっと認識論的方法論的立場を確信したばかりの私には、まだこなし切れぬ用兵術であつた。しかし、とにかく、この行き方こそ史的唯物論の基礎には哲学的唯物論があるという命題の真の内容であり、自然的存在の独立の権利が回復されるや否や認識が意識的に進まねばならぬ方向である。福本氏の政党論にしろ、三木氏の社会科学論にしろ、もはや決してそのままに受取つてはならぬ。彼が観念的に（観念的な把握図式から）把握してみせたその事象を、唯物論の立場で実際に把握し直して見なければならぬ。このことは、私には全くはつきりしていた。

福本イズムは既に唯物史観や経済学のみならず、マルクス主義的政策論をも、その『マルクスの弁証法』によつて解釈し、その解釈なりの政治行動を無産者運動の中に移し入れ、そこで実際に経験される無産者運動とは調和しないで、破綻しなければならぬ破目に陥つたが、福本氏の政党理論がモスクワで批判をうけつつあつたのは、唯物史観の一解釈学としての三木哲学が登場したちょうどそのときであつた。この批判はその年の末蔵原惟人氏と雑誌『社会思想』とがプラヴダ社説を記述するときまで知られなかつた。それに私の立場から、福本理論は必ず大きな欠陥があるに相違ないと予想され、氏の『何をなすべきか』の解釈も全く誤っていると解つても、福本イズムの連的潮流のなかで、プロレタリア運動を見聞するにすぎなかつた私には、福本氏が表象している政治過程の現実の基礎と条件と内容とを、自分で、福本氏の眼鏡をかりずに、現実の中に発見することはまだまだできなかつた。否、欧州の運動の諸経験の記録すら、氏の眼鏡をかりずに、それ自身に評価することはまだ当分できなかつた。しかし、いまはこの方面に論及する必要はない。

三木氏の『無産者の基礎経験に基づく人間の自己解釈』としての論理概念は、同じく『プロレタリアートの立場・観点』であり、かつ同じく思惟と存在、理論と実践、主観と客観の統一に関する観念論的図式による類推概念ではあるが、それが福本氏の弁証法概念と異なるところは、後者が政治的階級闘争の解釈概念であったに對し、三木氏は、社会的物質生産（人間の労働）過程の解釈概念だという点にあった。この解釈概念を持つことは、この概念（三木氏の意識）の立場においては、同時に物質主義者たることであり、そう、いう意味での、『プロレタリアート』たることであつた。従つて三木氏の『無産者の立場』は社会的階級としての自己反省を持つことができず、マルクスが『抽象的人間的労働』といったときの『人間』一般の立場をでなかつた。そしてそういう生産する『人間（ホモ・フアーベル）』がプロレタリア階級と同一視されても一寸ちよつともおかしくないほどに、資本主義的生産労働と階級闘争の場面から現実的には比較的縁遠い、哲学的インテリゲンチヤを捉とらえて哲学界に刺戟を与え、学問理念や論理概念の新解釈を促進した。これが昭和五年ごろの科学階級論となつて花咲いたわけである。

さて、唯物史観や経済学、また組織論や政策問題の基本概念について、私の立場からどんな結果が得えられたかは述べないことにして、弁証法論理と自然認識についての結果を摘記しよう。ただ間もなく九月に入つて、『猿の人間化における労働の寄与』が唯物史観においても私の確信を強めてくれたことだけは付加しておきたい。

一切を自然から必然性をもつて展開してくるがままの関連において把握しようという風に立場をきめてみると、三木氏や福本氏の弁証法のみでなく、デボーリンの弁証法とも訣別けつべつしなければならぬことが解つてきた。われわれの頭脳における諸観念が客観的な自然的歴史的存在の反映とするならば、そして唯物論とはその存在の客観的関連の把握に外ならぬものとするならば、かく把握された實在の法則と別個に、それから抽象された一般的運動形式としての弁証法に一つの領域を設けることはそも何を意味するであろうか。實在の個々の分野の法則でなく、實在一般にあてはまる法則を計上して、『哲学』の領域を設けることは何を意味するか。自然の發展法則、歴史の發展

法則と並んで、方法論としての發展一般の法則とは何か。われわれの知識は抽象から具体へ、一般から特殊へ進むといわれるが、また同時に原理や一般的抽象的法則は、特殊的具体的研究の結果である。個々の領域でなく実在一般の運動に妥当する法則は、実在一般が研究されてゆくに従って漸次に会得されてゆくのであって、研究の以前にあるのではない。しかも、もしわれわれが研究の前提として用いる諸概念を問題にするなら、一般的法則のみならず、既得の具体的な特殊法則もすべて必要なのだ。そしてこれらの諸法則のなかで、どこからどこまでが一般法則で、どこからどこまでが特殊法則という境界はない。また等しく実在の運動の把握であり反映であるという点では、特殊法則と一般法則に原理的区別を置く必然性は少しもない。いままも、実在の一定の領域や連関を扱う特殊法則と区別して、実在のどの領域にもあてはまるが、それ自身は別に、どの特定領域の運動を表現しているわけでもないという一般法則を考えて見れば、それはもはや主観的思惟なの中にしか存在しない（しかも、それは、それ自身実在の一部分として、客観的に運動する人類の思惟の法則として、意識されたものではなく、認識のオルガノンとして、主観的思惟がある一定の段階で客観的対象に対して行使する一般的方法として、一面化されたものである）。デボーリンは主観と客観、思惟と経験事象との間において、後者から前者への抽象的一般化や、前者から後者への特殊的具体化・具体的適用を語り、抽象と一般を思惟に、具体と特殊とを経験対象に帰したのである。そしてこの一般的弁証的法則をもって実在世界の魂と考えた。これは既述この如く、悟性概念はんちゆう（範疇）が実在を貫き、経験世界を成立せしめているというカントと同じ思想である。客観の根底は主観にありと考えることである。だが例えば対立物の統一の法則は、実在のどの部分にでもあてはまるが、だからといって経験世界の根底に対立物の統一の法則が横わっていたり、その法則の具現が実在の経験世界であったりするのではない。

カントは自分の範疇はんちゆう（計量性・因果性・必然性等の）を、経験される現象世界にのみ妥当性を有する思惟規定であることを忘れなかった。そしてわれわれの主観に対して現象していない物そのもの（物自体）の固有の法則である

と考える愚を戒めた。デボーリンは自分の範疇はんちゆうまたは一般的方法は実在そのものの魂の表現だと考えることによつて、この点ではカントよりも一層野蛮な形而上学的合理論に陥っている。この合理論は、思惟が自己自身で明晰かつ判然と推論する通りに、実在世界の本質もまた成立っていると考える。カントは経験的な諸事実なかの中に実証される関係を反省すれば、思惟の範疇はんちゆう（判断の形式）が経験の中に自覚できることを指摘した。エンゲルスは、否定の否定、量から質への転化、対立の相通等の弁証法が、あらゆる領域に普遍的に妥当することを例証した。これによつて、カントの十二範疇はんちゆうのみならず、それらの範疇はんちゆうを内面的に関連付けた弁証法の三法則もまた、普遍的な思惟範疇はんちゆうであり認識の方法であることが明かとなった。しかし、われわれはそれによつて実在世界の成立ち、その運動の魂が把握できたなどといったら、とんでもない妄想に陥るものだ。そのあらゆる部分あらゆる側面において、弁証法的発展が確認されるその実在世界そのものを、かかるものとして認識すること、——これこそが問題だ。

われわれは、一般的方法としての弁証法、すなわち一定の思惟範疇はんちゆうの形式の下に、経験的事象が秩序付けれられ合理的形態を得たとき、始めて認識は完全なる資格を得ると考える代りに、諸事象をそれ自身の連関にあるものとして認めなければならぬ。例証された規則を計上することなどが何にならう、そうした規則にあてはまったところで、それによつて一定の科学的事実の現実的意義や妥当性には何物も加わらぬ。それも一種の解釈概念にすぎぬ。エンゲルスのいう通り、『進行をば否定の否定といい表わし、それによつてこの進行が歴史的必然的であることを立証するのではない。この進行は既にある部分**は**事実起つており、ある部分**は**必然的に起らねばならぬということを経史的に立証して後、なおそれに加えて、これを一定の弁証法的法則に従つて行われるものといひ表わすのだ。……弁証法を単なる証明の道具と解するならば、それは既に弁証法の性質に対する洞察の完全な欠如である。形式論理ですら、何よりも先ず新しい成果の発見の方法、既知物から未知物への進歩の方法であり、弁証法もまた一層高い意味でそうである。』（『反デューリング論』十三）例証によつてあらゆる運動の中に個々の弁証法的規定を反省す

ることは、その規定自身を「直観的に明かにする」には役立つが、例証の引合いに出された経験事実そのものがそれによって一層明かになることはない。私は例証によって弁証法を説明することに冷淡と不満を感じながら、實在の事象を、實在的前提から、實在の条件によって把握することに益々熱中した。そして弁証法の内容をも、弁証法を認識に適用する形態と妥当性をも、その背景から理解しようとして試みた。実に、デボーリンもまた、實在の連関の過程的な反映として、この連関が明かになるに従って反省的に意識されてゆく弁証法（かかるものとしての認識主観・意識主観）を、そうした前提から浄化して独立化し、實在の運動をこれへ反照せしめて評価するとき、唯物論的弁証法的認識が生れるとなすものであった。これは、福本氏や三木氏がプロレタリアートの存在形態のある側面ある契機の意識上の反映をその實在的前提から浄化し抽象化して、認識のオルガノンに変えてしまったのと同じ行き方である。

だが、實在を、実証的経験的に、すなわち人間の実践が対象について実証するままの関係において、把握するには、人間の全実践の経験（自然科学や社会科学も含めて）が総合されなければならぬ。その総合から現実事象の発展形態を分析し、発展の脈を明かにしなければならぬ。対立の統一というような規定を発見しても、それによって實在をつかみ上げ、實在を動かし、實在を転化させることはできぬ。これに反し、實在の脈、實在の魂を発見すれば、それによって實在は支配される。例えばエネルギーの転化は全自然のそうした脈であり、生産力の発展は歴史の脈である。生物という普遍概念から犬は生れて来ないが、単細胞生物に含まれている生活条件は、それが犬という哺乳動物に進化し特殊化する脈をなす。デカルトやスピノザは實在の根源（実体）を最も単純な思惟規定に求めた。唯物論者は實在における発展の脈を、実証的に遡及してゆくことよって見出さねばならぬ。しかし、究極の実体や自己原因といったものは實在しない。實在の世界には相対的な根源が見出されるのみである。全生物界の根源をたどって最初の原形質に到着しても、また一切の化学物質をたどって原子に到着しても、それらはすでにまた

一定の条件によつて成立しているのであつて、その条件は經驗的実証的に分析することができる。經驗的な諸事実や諸關係についての表象を相互に比較し、その共通点を抽象することによつて、「一般的なるもの」を得れば、それは思惟規定としては一般的であるが、しかし、そうした一般的なものが实在界にあるのではない。それに対応する实在の上の一般的なものは、それら諸事実や諸關係を、自己の条件から成立發展せしめた根源的事象そのものの中にある。

単なる思惟の上の一般化は、实在の上の普遍的事象の認識へ高められ、単なる思惟上の推論は、その普遍的事象がそれ自身の条件によつて、特殊的諸事実や諸關係に進化發展する過程の認識に高められねばならぬ。思惟の上で实在世界の最も一般的な規定を抽象すると、存在するという規定だけが残る。従つて在るものすなわち実体、自己原因、物自体、有（存在）等は、われわれは既にこれをわれわれの感覚や經驗の上に具体的に持つてゐる訳だ。しかし、この規定を实在の上に投影して、われわれの經驗世界が展開される根源としての实在の最も根本的普遍的初源的な形態の意味で受取るならば、そうした実体はヒュームやカントに従つて認識不可能を宣言してよいし、ヘーゲルに従つて無だといつてもよい。それは經驗世界を支えている支柱ではなくて、經驗世界によつて支えられてゐる觀念であり、現実的にはわれわれが日々の經驗を通じて認識しつつある当の對象世界そのものを全体として指す觀念に外ならぬ。それはわれわれがまさに口々に認識しつつあるもので、従つてどこまで行つたら認識し尽せるといふ約束は最初からない。同様にまた、それは、その上で認識を進めている中に、それ以上進みえない限界にぶつかるといふ約束もない訳だ。ただ思惟のなかで抽象し、思惟の中のみある規定を、实在の上に投影し、实在の上で捜そうとするから、不可認識の領域が实在の中に在るかの如く映ずるのである。

いずれにせよ、思惟は經驗的実証的に与えられる实在世界を、その一側面、一契機、一部分に従つて限定しつつ反映するものであつて、前者から後者が理解さるべきでなく、その反対であることがわかる。思惟の諸契機、諸形

態が、經驗的実証的に取上げられた世界の反映なら、因果とか時間とか対立の統一とか、否定の否定とかの範疇もまた、實在の脈として實在する法則として理解するべきでなく、従つてそれによつて實在が理解するべきでなく、それ自身が實在によつて反省するべきであり、しかして實在する關係の認識へ高めらるべきである。例えば対立の統一という法則は、實在においては常に特定の内容の事象における対立なのであつて、この形式からその事象が理解されるべきでなく、対立する關係を成立せしめている實在的諸条件を實証的に分析することによつて、対立の實在的な形態を理解することが大切なのである。時空や因果關係にしても、その實在的内容はそれぞれに決定を要するかつ、實在における特定の關係には、常にそのよつてきたる根拠がある。以上の考え方は、昭和三年の夏、『自然弁証法』第一章特にその第十七節（『眞の無限はヘーゲルによつて充たされたる時空すなわち自然過程および歴史の中へ移された。自然および歴史のかかる無限な多様性は、時空の無限——悪しき無限——を止揚された契機として含むにすぎぬ。』）を読んだとき、動かしえない確信となつた。一般にこの第一章は私に最初に弁証法的認識の性質をはつきり教えてくれた先生であつて、十七節の外、二六、二九、七一節等は殊に魅力的であつた。

實在の脈の認識は絶えず新しい經驗によつて深められるのであるが、認識された限りにおいては、世界をその展開として把握し得る。思惟（精神）と社會關係は人間の活動の諸条件から、人間とその活動は有機的自然の諸条件から、そして後者は無機的自然の諸条件から展開するというのが實在の脈である。われわれの經驗世界の一切を生み出した諸条件は、実証科学が呈示する限りにおいて、宇宙の物理学的過程の中にある。この自然的原因における諸条件から、人間が自然に対立せしめて考えている一切のものを展開し跡づけ得るならば、唯物論は決定的に立証されたのである。

従来の哲学史、一般に人類の認識史は、根本においては、意識の中にこの實在の脈を生かそうとする党派（唯物論）と、この脈から独立した自立的意識を主張せんとする党派（觀念論）との闘争として現われる。この場合一切の

事象をその要素に分解して自然に還元したり、また内容的契機だけを自然や実在へ還元し、形式的契機はそれと独立の（主観的・精神的）要因に還元したり等のことは、その事象の説明にはならぬ。自然の最も根源的な諸条件からそれらの事象への展開を追跡せねばならぬ。分解（分析・解剖等）と還元は、かかる展開の理解の不可欠の前提ではあるが、また単に前提たるにすぎない。分解されたものをかかるとして規定し計上することは、多かれ少かれ形式論理の仕事であり、それらの規定を実在の展開においてとらえる理論意識は、多かれ少かれ弁証法として現われる。過程や法則には常にその実在的担い手があり、それが展開するところに法則が体现する（あるいは認識される）のである。担い手すなわち実在する主体は、例えばそれが化合物形成過程の主体としての元素原子であるならば、物理的条件によって成立し、成立した上ではその条件に左右されて運動する、あるいはその運動において物理的条件を反映する。物理的条件の量的変化（それがどういふ原因ないし条件によるかはいま問わずとして）は、一の原子を他の原子に転化し、あるいは原子の運動条件を変化し、化合物質の変化をもたらず。化合物の内部における化合や分解の対立は、物理的過程と化学的過程との対立の反映であり結果である。発展は対立の闘争であるという弁証法の命題も、ただ対象的実在の上に両極的な対立要素を見るだけでは、実在の中へ対立を持ち込むと同じことである。一主体における対立の根源はそれを成立せしめた諸条件の中なかにあり、それから導き出すことによつて取上げられねばならぬ。でなかつたら、何らその主体の過程の認識を押し進めることにならない。原子における物理的条件が親和力（原子間力）として現われるとすれば、物理的条件はその場合原子間力として化学過程に止揚しやうされたといえよう。だがその、条件の複合がもつと根本的なある条件によつて推移して、それをもはや原子としての形態にとどめておくことができなくなれば、原子という実在は止揚しやうされる。だがまた原子が別の推移の仕方によつて、原子としての存在を保ちつつ原形質物質に合成されるなら、原子過程すなわち化学過程は、原形質の外圍物質との新陳代謝による発展過程へ止揚しやうされる。生命ある物質の運動は、物理的・化学的過程を自己のうちに止揚しやうし、自己の

運動においてそれを反映する。生物は自然条件を自己のうちに包摂する程度が高い程高級となる。いわば生物は体制の分化、生態の進化を通じて、自然条件を摂取し、それに適応する、すなわち反映する。一つの物質と他の物質との物理的・化学的關係は、生体の物質代謝・栄養摂取が生物と外圍との対立の統一であり、止揚しやうであるとするならば、これによって生物の内部には現存の体制や生態と栄養との間に対立が生じ、これが生物を進化させたり、退化させる内的要因となる。

思惟は、かかる進化において生物の体制なかの中に成立した神経系統の中軸をなす一主体の運動（機能）なのであって、この主体に關係する一切の物理的・化学的・生物的・社会的条件に左右され、それらの運動を反映しつつ進化する（この進化が人類、集団および個人における認識の發展である）。自然条件の生物への反映・止揚しやうが、生物主体の進化（人類とその社会）と、生物主体への自然条件の反映・止揚・摂取しやうのより高度な形態（労働）をもたらしたとき、生物進化の過程は、人間社会に反映・止揚しやうされ、社会進化の過程すなわち社会形態と労働の生産力との対立、およびその対立から生れる社会内部の対立（階級対立）として現われる。これが、實在の塊であり、この發展の思惟（頭脳）への反映が弁証法である。この實在の發展を一側面で固定したり、關係を転倒したりすることなく、この發展の脈に沿って摂取された思惟規定が弁証法の論理である。従つて弁証法論理を思惟の上で最も抽象化して表現すれば、限定された實在が自らその限定を止揚しやうして發展する過程の規定であるといえよう。唯物論的弁証法的認識の核心は、われわれの思惟が表象している一切の内容を分解して實在において経験されるそれぞれの規定に還元し、改めてこの實在の脈をたどつてそれらの規定を取上げることである。

これらのことが分つて見ると、従来の通用觀念なかの中にも相当疑わしくなるものが少くない。例えば、唯物史觀の最も根本的な問題の一つとして生産關係の「唯物論的」把握は、それを時間空間における人間や機械の組織化として見るのだというブハーリンの解釈などそれであった。生産關係を唯物論的に把握する道は、それをそれ自身に成

り立っているものとして、自然の必然的な発展の成果として捉とらえることである。それは自然と人間との統一としての生産力の状態を反映しつつ階級関係として客観的に成立しているのであって、労働要素をあるいは企業資本家の立場から、あるいは労働者の立場から合目的に組織した結果なのではない。ブハーリンは生産過程を諸要素、工場、機械、人間等の「物質」に分解したが、それらの関連を實在の客観的な脈に従って跡付け得えず、主観的にそれらの間の矛盾を除いて労働秩序へ組織化することを考えた訳なのだ。つまり彼は社会という主体を、自身の中なかに生産力と生産関係との対立を蔵し自己運動（内的必然的發展）をなすものとして把握できなかつたのである。

諸要素の均衡点を発見し、またそれらを均衡にもたらし組織するというブハーリンの世界観『均衡論』（ボグダノフ的『組織論』）は昭和四年の彼の政治的過誤の後、翌年はじめには哲学的にも批判に付せられたが、しかしデボーリン以下の哲学的批判者は、ブハーリンが提起した『運動する物質の形態の中なかに弁証法則に対応するところのものを発見する』課題（彼は、均衡、均衡の破壊、新しい基礎の上における均衡の再建、という過程をかかせるものとして発見している）の本当の解決がどこにあるかを示さないで、ブハーリンのようでは、弁証法の諸規定の豊富さが失われてしまうという。その通りである。だが私には、ヘーゲルの定式した弁証法が、實在世界の反映とすれば、その弁証法を實在世界の運動の魂として先まずいい表わさるべきが当然だと思われた。そして絶えず例の實在の脈をたどっては思惟規定を豊富にすべきであって、既にヘーゲルに学んで知っている諸範疇はんちゆうをあれこれの現象にあてはめて見たり諸々の所説なかの中にそれらを再発見して見たり、諸範疇はんちゆうをただかかせるものとして防御したりすることは無意味だと思えた。

思惟は實在のそれ自身の内的必然的發展をたどることによつてのみ、自己を唯物論的弁証法として規定できるのであって、それと独立に思惟を扱うことは、切角せつかくの弁証法的範疇はんちゆうをも形式論理学的図式主義的定規に変えてしまうことである。かかることは、ヘーゲル（彼は存在の把握（ベグライフエン）として弁証法を規定した）すらやらな

かったことだ。また思惟が対象それ自身の内的必然的發展をたどることによつてのみ自己を唯物論的弁証法に高める限りは、この弁証法的思惟は自己自身の中なかに一つの必然的な發展法則をもっている訳である。感覺的經驗要素相互なかの中に均衡点を見出してこれを合目的に組織化しようとする（ボグダノフ・ハーリンの經驗批判論的）認識論や、一般にこの思惟そのものの必然法則を無視して、必要に応じて思いのままに『考える』（概念を扱う）ことができると思えるものは、そのことによつて自身を最も俗悪な哲学の思考様式に、また經驗主義的な『解釈』やその場その場の合理化に、売り渡すものである。普通ある階級の立場に立てば弁証法は理解できると考えられているが、弁証法は思惟法則の反省および分析から研究されねばならぬ。それがなければ、階級の立場にあつたとて意識的に弁証法的に思惟することはできず、その時々ときどきの情勢において、何が真にその階級のとるべき立場であるかを自ら、弁証法的に見分けてゆくことすらできないであろう。

上のような見解を、私は『自然弁証法』の訳序に簡単に述べた訳だが、人びとはそれを三木氏流のイデオロギー論的考え方に対する批判とのみ見て、デボーリン的考え方への抗議である点（『自然弁証法』上巻一二頁十七行、一三頁六行）は見てくれなかつた。『デボーリンの克服』はまだ当分問題になつていなかつた。

右訳書の訳序と跋ぼつについて、若干の註釈と重要な訂正をして置こう。

吉田歛氏は、この序文を『史的唯物論の自然への機械的適用である事を難じ』たものと理解されている。もちろん自然へでなく自然科学または自然認識へのことであろう。しかし、それを唯物史観的にみることを私は大いに主張しているのだ。認識の基礎には人間の歴史的实践（生産力、産業と実験）がある。人間の实践が自然の連関を確証し検証し開示するに従つて、人間は自然を認識したのである。従つて、自然認識の發展は、人間の实践を反映し、人間の歴史から理解されねばならない限り、唯物史観的解剖のみが正しい理解をもたらす。ところが当時は誰も自然認識、一般に人間の認識を唯物史観から考察しなかつた。

まず自然認識は実践の歴史に制約され、その事情を反映するが、しかし実践を反映の対象として持つのではなく、実践が人間の前に展開してみせる自然を反映の対象として持つのだ。従って人間の認識対象たる自然は歴史的に制約されている。そのころ戸坂氏は前記『科学の社会的歴史的制約』で、われわれの自然科学が立脚する現実たる自然は、歴史的現段階が持つ現実ではなく超時代的であるといい、少し後伊豆氏は『自然現象は社会現象と異って、その発展のテンポがのろいから、今日の自然科学と古代の自然科学とは殆んど同一の自然を対象としている』と考えている（前掲書五六頁）。なるほど、自然はそれ自身として超人間史的存在であり、われわれの思惟はその自然の法則の認識を達成せんとするものである。がしかし、人間の実践（産業と交通、実験と観察）は思惟の対象となる自然の範囲と興行を絶えず変化し行き、これが自然認識の変遷と発展の基礎となったのだ。この点の無視から両氏は自然認識の変革が、一般的方法論、科学の理念、哲学的解釈の方面からもたらされると考える結果になった（なお本多氏の考え方参照）こうしてデボーリン流に現実の実践、自然との交渉から切離され独立化された方法・理念としての弁証法は、他の『歴史的現実』へ身の振り方をつけることになる。ここに既述の如く西欧の最新哲学諸派の影響の下に、科学的弁証法やマルクス学説の解釈概念が発案され、『歴史的現実』またはその代表カテゴリー（『型』）としての『生産人（ホモ・ファベル）』や階級概念が提出された。だが『批判的批判は人間の自然に対する理論的実践的行為（自然科学と産業）を歴史の運動から除外しながら、歴史的現実の認識の端緒にだけでも到達したと思ふのか。その時代の産業（生の直接的生産様式）をさえ認識しないでその時代を事実認識したとでもいうのか』だ（『自然弁証法』上巻二二頁）。

超歴史的・歴史の自然法則的カテゴリーとしての『生産者』や、無産者階級の歴史的『地位』や、階級対立の止揚様式等という思惟上の抽象観念は、その時代の産業的現実の認識と独立に、従って現実の生産関係階級関係における人間社会の諸事情を考慮せずに、置かれたもので、この理念によって産業的現実を理解するなどとは全くの空

語（転倒）である。これは観念論的な解釈概念であつて、唯物史観ではない。私はこれに反対しているのだ。唯物史観は産業的現実をそれ自身として『自然科学的な』仕方理解し、その上に生産関係階級関係を把握する。

史的唯物論は歴史を實在の脈たる生産力をたどつて理解する。産業（生産・交換）的技術的活動が自然について実践的に闡明するものの理論的な再闡明が自然科学なのだ。そしてこの実践活動とそれから展開する諸関係をかかせるものとして闡明するのが社会科学（史的唯物論）だ。もちろん右のような解釈概念は『マルクス主義哲学者』だけの発明でなく、科学に対する観念的解釈は東西哲学者伝来の遺産である。マルクス・エンゲルスが始めてその本性を唯物論的に闡明したのである。現在では、反動的な風潮から、科学の宗教的観念的宗派的解釈のためのあらゆる試みが猖獗を極めている。われわれが科学的認識の本性の反省なしに、すなわち唯物論的弁証法の研究なしに、この事情を対処しようとするれば、易々と泥濘に招き込まれるだろう。われわれは自然科学を種々の解釈概念から解放して、それ自身として理解すべきであつて、新しい『階級的・党派的』概念をもつてする解釈によつて、泥濘への招待に協力する必要はない。それゆえ昭和八年に人びとが、右の解釈派を『唯物史観主義』と名付けたのは、全く不当であつた。彼等の解釈概念は唯物論的でないのはもちろん、歴史的でもなかったから。ただ『唯物史観主義』者はすべて、『唯物史観』（すなわち自己の解釈概念）をもつと、「以下欠落」

ぬけ落ちた原稿

科学の階級性については既に本質的なことは述べてしまったわけだが、なお若干閑説して置こう。田辺博士が術には階級性があるが、学にはないといわれたことは、極めて俗な常識の蒸返しのように見えるが、これを田辺博士的意味付けから救い出して次のように考えれば合理的に見える。歴史的な階級的な産業および商業上の技術は、新しい経験素材をわれわれに提供する媒介であるが、これらの実証材料を加工して、われわれは自然そのものを認識するのである、と。逆に社会的階級的に運用される技術は、自然そのものの法則の応用である、と。ところで、科学階級性論は、まさに自然そのものの法則の把握としての自然科学の階級性を分析しようというのである。(ちょうど同じところに書かれた)戸坂潤氏はその『科学の歴史的社会的制約』(『東洋学芸雑誌』一月号)のなかで階級性(岡氏はこれを歴史性と等置している。)の四段階を説いている。第一段階、理論内容が歴史的に変化する(たとえば理論構成の不変のアプリオリ性を認めるとしても)。第二段階、人間の関心する問題(科学の内容とはその問題の解決と展開である)が歴史的に変化する。以上は名目上の階級性である。真の階級性は科学の論理に関する。第三段階、科学の理念、哲学的解釈、が歴史的に変化するために科学的概念が歴史的に変化する。第三段階プライム、数学の論理や法則の如きは『それ自身(ペル・セ)では』かかる階級性は持たないが哲学的(従ってまた歴史的)世界観に意味付けられることにより『間接の(偶有の)(ペル・アクキデンス)』第三階級性をもつ。第四段階、論理形態が変化する、すなわち内容全体が階級性に制約される。(これは社会科学のみ。自然科学は歴史的現段階のもつ現実に立脚せず、それにとつての現実には『原理的(ペル・セ)』には超時代的——『偶然には(ペル・アクキデンス)』いざ知らず——自然であつて、歴史的制約は、その一定形態をそのままに、または一定の相関性において、その論理に付与しえない。その論理は形態的には歴史的に制約されない。自然科学に階級性がないと見えるのはこの第四のそれがないだけである。)

戸坂氏のいつに変わらぬ概念整理のお手際には敬服するが、私は氏がいつも唯物論的基礎の上に諸概念の弁証法的連関を探る労を惜まれるのを残念に思う。氏は第三階級性について、アリストテレス的物理学と今日の物理学とは同一科学の原始状態と成熟状態とであるかのように見えるにかかわらず、二つは科学のイデーを異にする、といわれる。『二つの物理学が歴史上に発生した経験を通過することによって、論理的に——単に歴史的にばかりでなく』

——他の物理学を否定止揚しやうしたのであった』と。問題は『歴史上に発生した経験』である。この経験とは、氏にあっては、生産力と技術の歴史的発展が堆積する個々の経験素材の全体のことではない。それであれば特に方法ないし哲学の方面から特定階級に関連した階級性を語る必要がない。科学が処理し得る経験素材の量的堆積が科学の系統、理念または方法の質的脱化、絶えざる止揚しやうをもたらすことは当然で、人間思惟の弁証法の基礎的特徴であるのだから。(氏は自然科学に媒介されて初めて知り得る自然諸概念を、経験的観察から得たのでない自然諸概念と区別している)のである。『例えば運動の概念は、存在と無との、一点での存在と、他点での存在との、対立矛盾者の総合として概念される。この運動概念は必ずしも自然科学によつて教えられたのでもなく、またそれによつて訂正されるべき筋合のものでもない。』

氏の考えておられる右の『歴史上に発展した経験』は、これと異り、やはり歴史的現段階のもつ階級性事実であつて、イデーはその方から来るのである。ただしその制約は間接的であり、『変装され』ている。残念ながら氏はそれ以上にこの制約関係を具体的に分析していない——ここにこそ問題があるのだらうに。伊豆氏の考察も不思議に戸坂氏と一致する。『自然科学の理論が当該社会の一般的方法論(哲学)によつて制約せられている……一般的方法論も自然科学理論も、これを生んだ社会との間に直接的な繋りがあるのは当然である。ただしそれは意識過程における高次の産物として、被媒介性形態(すなわち間接的!)のものとなっている。媒介するものは一次的には階級関係、二次的にはその反映たるイデオロギーであるが故に、方法あるいは科学の階級性という問題の解答は、こ

こから容易に引かれる。』(前掲二〇三頁、それに続く『だが最後に、いわゆる応用自然科学の問題、すなわち自然科学の実践の問題にまで下向すれば、その社会性、歴史性、あるいは階級性は、最も具体的に露出される。』という一句は戸坂氏の第四階級性のペル・アクキデンス形態に対応すると見てよからう。)しかし、伊豆氏もまた社会と一般方法論、それから唯物史観で割り切れない『自然科学それ自身の方法、すなわち(「われわれの時代にあつては」自然弁証法』との相互関連の内的媒介を分析していない。(これらの人びとは、方法論者であつたが、自然研究者でなかつた。つまり、経験材料の科学およびその方法に対する直接的な決定的な意義を体得していなかつた。そして現実的事情を裏返しにみていたのである。)

結局、経験事実と区別して考えられる方法的思惟を取上げ、それを何等かの意味で歴史的な階級主体の意識に係(リファー)付けるところにこれらの階級性論の手の種がある。だがその経験事実の方、その歴史性の方が最も根源的なのである。すなわち、一定の経験材料や実験事実の堆積は一定の生産力に基づく人間実践の成果なので、この生産力はいつでも一定の生産関係に従つて一定の階級によつて占有、制御されている。この経験事実の一定の堆積こそ、その時代の科学の性質を規定する根源的な契機であつて、それのただでいいだけ広範な摂取の上に立脚しつつ、われわれは科学を進めるのだから、科学に歴史性があり、その歴史性を、その生産力を統制している階級の名によつて、便宜的にいい表わすことができるのはいうまでもない。しかし科学はいつまでもその本質において時代の生産力を代表する社会性を持ち、その社会性と反する限りの階級性(やその社会性に矛盾した『階級性』の理念)に対立するのである。この意味で科学は常に階級性から解放されて社会化されねばならないのだ。(同様に民族性から解放されて国際化されねばならないのだ)科学に対するプロレタリア階級の政策の基調もここになければならぬ。方法論を改革してプロレタリア階級の科学をつくるがごときことは、哲学者の空想である。それに、生産力を統制する階級の名前でもいい表わすにしても……

従つて、戸坂氏とは反対に、われわれの自然科学が立脚する現実たる自然は、超歴史的ではないのである。なるほど自然そのものは超歴史的であろうし、われわれはその、自然そのものの法則の認識を達成せんとするのであるが、その自然とわれわれとの接触点は産業と実験との発展にともない絶えず変化しつつあるのである、すなわち深化し拡大しつつあるのである。戸坂氏はこの点を見逃し、『新しい発展が現われる度ごとに唯物論は自己の姿を変えねばならなかった』ことに想倒せず、科学の理念の変化の眞の弁証法を見ず、理念を経験的自然から独立化している。われわれはいまだ、現在の資本主義社会の埒内らちないでは到底処理しえないような高い生産力が提供する手段や経験材料によつて、現在の自然科学が質的な脱化を遂げるといふような実情に到達してないので、社会主義国の科学的活動の目覚しい発展や科学促進のための独自の形態については語りえるが、中世貴族階級の科学、ルネッサンス期のマニファクチュアブルジョア科学、十八・九世紀の発展期のブルジョア科学、および帝国主義の科学を対照させえる如き意味で、現在プロレタリアートの組織している社会主義社会の科学を異質的なものとして挙示することはできない。——そういう事情が大いに約束されているというのは間違ない。そして現在の資本主義国が経済的危機を益々深めつつあるとすれば、新進のソヴェト科学への期待は益々大きいわけである。

- 『加藤正著作集』第二巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九九〇年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi}2\text{pdf}^{\text{m}}\text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/~hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。